永遠（とわ）の愛

朝日 慧子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永遠（とわ）の愛

【Ｎコード】
Ｎ２７９０Ｗ

【作者名】
朝日　慧子

【あらすじ】
幼いころの約束を胸に、赤い糸で結ばれていると信じて疑わない、１７歳の高校生ひかると、２３歳の若き高校教師翔太。
禁断の関係を越えて純愛を育むふたりだったが、
思わぬ嫉妬の嵐に巻き込まれ、運命の歯車が狂い始める。

翔太に仕掛けられた罠、ひかるの出生の秘密、だんだんとすれ違うふたりの心……。

次々にふりかかる困難を越え、ふたりは永遠の愛を貫くことができるのか――。

◆一言ごあいさつ◆

前半はラブラブ、後半は波乱万丈なストーリー展開です。
韓国ドラマ風な激しい場面もちらほら出てきます。
ぜひ、レビューや感想などいただけたら嬉しいです。

◆お願い◆

※お越しいただきありがとうございます。
随時必要に応じて本文を編集することがありますが、ストーリーの流れは変わりませんのでご安心ください。

小説の最後の方に設置してある「アルファポリス」バナーのクリックにご協力お願いします♪
クリックでポイントが入る仕組みになっています。
面白いと感じていただけた時、続きが読みたいと思っていただけた時、クリックしてもいいかなと感じた時などに、ぜひよろしくお願いいたします。

新学期

私はいつものホームで電車を待っていた。銀色に緑色の線が入った車両が目の前で止まり、プシューと音をたててドアが開く。待っていましたとばかりに、勢いよくドドドドっと人がなだれ込む。七時台の電車ってオヤジばかり乗っててユウウツだな……。八つ目の桜中駅で下車すると、白色のセーラー服に身を包んだ女子高生がすでに何列かに連なって歩きながら、おしゃべりに夢中になっていた。四月の東京は桜がとても綺麗だ。とくに、駅前からの桜並木は観光客がこぞって訪れるほどの人気のお花見スポットになっている。ひらひらと散る桜の花びらを見ながら、ふと今日から始まる新学期のことを考えた。ダラダラとした女子高生活も三年目に突入する。もともと社交的ではないから友達も少ない、そして彼氏もいない私にとって、毎日の生活は特に面白いものではなかった。何か目新しくて楽しいことが始まるような予感もしないまま、重い足取りで学校へ向かった。

始業式で、うちのクラスの新しい担任の先生が発表された。三月まではちょっとヒステリックな女教師だったが、産休に入るので一年休むそうだ。そして、今回新しく来た担任教師は、どこか王子様のような雰囲気を漂わせた風貌でソフトな笑顔を浮かべるイケメン先生だった。ちょっぴり茶色がかったサラサラの髪の毛に、ぱっちりした二重の目、すっきりと通った鼻筋に、少しぽてっとした下唇が印象的だ。筋肉はありそうだけど細身で、身長は１８０センチくらいだろうか。女子たちが朝からキャーキャー騒いでいた理由が今やっとわかった。

教室で壇上に立つ先生が、眩しいほどに美しい。まさに美男子という言葉がぴったり当てはまる。黒板に＜桜庭翔太＞と素早く名前を書き、クルリと前を向いた。紺色のスーツに白いワイシャツ、淡いピンクと白のチェック柄のネクタイ。肌の色が白いから、薄いピ

ンクがよく似合う。さわやかな笑顔を浮かべ、ハキハキした口調で挨拶をはじめた。
「おはよう！　今日からみんなの担任になった桜庭翔太です。これから一年間よろしくな」
想像していたより声は低い。でも、透き通るような感じでどこか甘めだった。
教室中がざわついている。女子たちがヒソヒソと「めっちゃイケメンだよね。何歳なんだろ？　彼女いるのかな」などと、興奮した様子で口々に話していた。
「お前ら、俺が話している時に私語はするな！　知りたいことがあるなら手を挙げろ」
微笑みながらも、語調は厳しかった。見た目はソフトで優しそうなのに、ちょっとSっぽい。
「センセー、何歳ですか」
先陣を切って質問をしたのは、一番後ろの席に座る彩夏だった。小麦色に日焼けした肌に大きな二重の目。薄い唇からのぞく八重歯が目立つ。欧米風のハッキリした顔立ちで、ファッション誌のモデルのようにスタイルがいい。
「お、いきなり年齢か」
先生はちょっとためらった後で「２３」と答えた。
「キャー！　わか～い！」
女子の黄色い声が教室中に飛び交った。恐らく、ドアを閉めていても廊下中に響き渡っていることだろう。
私も目の前の美男子にいろいろ聞いてみたいことはあるけど、到底無理だ。引っ込み思案で恥ずかしがり屋の生徒なんて、きっと先生の目には最初から入っていないだろうし……。カッコいい人が目の前に現れたって、どうせ相手にされない。夢を見るだけ時間の無駄でしょ？
私は本気でそう思っていた。予想をはるかに超える出来事がすぐ

そこに迫っているとも知らずに。

傘

始業式の帰り道、私はアルバイト先のカフェに寄った。間接照明とシンプルな白系の家具でコーディネートされた空間は、まるで北欧のオシャレなカフェにいるような気分にさせてくれる。お金に余裕のある社会人がゆったりした時間を楽しめるように、コーヒーの料金も五百円からと少し高めに設定されている。

「いらっしゃいませー」

カウンター越しに顔をあげると見覚えのある男性が立っていた。まさかとは思ったが、あの外見はどう考えてもイケメン先生だ。向こうはこちらに気づかない様子で、一番端っこの窓際のソファー席に座った。嬉しいやら恥ずかしいやらで注文を聞きに行くのを渋っていたら、先輩に背中を押され「早く注文とりにいって」とせかされてしまった。覚悟を決め、ゆっくりと背後から先生の座る席へ近づいていく。

「ご注文はお決まりでしょうか」

「エスプレッソおねがいします」と先生は一言告げた。

もしかして気づいてない？　それとも知ってて無視しているの？

一瞬迷ったが、意を決して「三年A組の渡瀬ひかるです。わかります？」と早口で聞いてしまった。

「渡瀬なのか？　制服がメイドっぽいと雰囲気変わるんだなぁ。ここでバイトしてるんだね」

「この制服、本物のメイドみたいで……。スカートも短いし、なんか恥ずかしい。あ、今日は九時までバイトなんです」

スカートを少し手で押さえながら、顔を赤らめた。しばらくたってエスプレッソを先輩が運んでいるのを遠目で見ながら、先生を観察した。カバンから文庫本を取り出して、かれこれ二時間くらい読みふけっている。鼻から口元にかけての横顔があまりに美しく、じっと見惚れてしまった。

突然、先生が振り返って私を見た。
「渡瀬ひかるさん、もう一杯エスプレッソをもらえる？」
先生の後姿を見ているだけで、なんだか胸が苦しいくらいにドキドキしてしまう。私、先生が好きなのかな？　一目惚れってこと？
自問自答してみたが、恋愛経験が乏しいせいか心臓の高鳴りが増すだけで答えは出なかった。
九時を過ぎた頃にそそくさと帰り支度をしていると、カフェの出入り口に人影が見えた。
「お客様、申し訳ありませんが閉店のお時間です」とクローズの看板を出そうとしたら、その男性が顔をあげた。先生だ……。
「どうしたんですか？」
「実は傘を忘れちゃって。ここで雨宿りをさせてもらってたんだ」
「それなら一緒に駅まで行きますか？　私、傘持ってますから」
「いいのか？　悪いなぁ……」
先生と私は並んで傘の中に入った。密着度が急激に上がったせいか、緊張のあまり手が震えてしまう。距離が近すぎて、まともに先生の顔が見られなかった。
「傘は俺が持つよ。君は背が小さいから」
遠慮して少し離れて歩く先生。
「あの、濡れるからもっと真ん中に来てください」と声をかけると、「ありがとう」と照れたように先生が少し笑った。心臓の高鳴りが止まず、まともに歩けない。先生の腕が私の腕に触れるたび、相手の体温を感じて身体の芯が熱くなった。先生の横顔をちらっと盗み見しようとしたら、思いっきり目が合った。慌ててそらす。これじゃあ先生を一目惚れしちゃったことがバレてしまう……。自分の頬が熱を帯びていくのを感じた。

再会

傘の下で緊張しながら必死に歩幅を合わせていたら、「俺のこと覚えてない？」と先生が意味深な言葉を発した。

「どういう意味ですか？」

「昔さ、隣の家に住んでたんだよ。引っ越した後、ずっと連絡取ってなかったから覚えてないかもな」

「先生が隣の家に？」

「そう、君が八歳のときまで隣に住んでいた」

小学生の頃、憧れのお兄ちゃんが隣家に住んでいたことを鮮やかに思い出した。

「もしかして、翔お兄ちゃん？」

思わず、昔の呼び名が口をついて出た。

「そう。あの翔太だよ。俺は生徒の名簿を見た瞬間、また会えるんだって懐かしくってさ」

信じられない！　諦めていた再会の時がこんなに突然訪れるなんて。

「本物の翔お兄ちゃんなんだね」

「ひかる、思い出してくれて本当によかったよ」

先生は満足そうに笑みを浮かべた。

ふと、駅への通り道に公園があるのを思い出した。無造作に積まれた土管が、下に二つ、上に一つ、合計三本、小さな公園の隅っこに横たわっている。冷たい雨風をしのぐにはちょうどいい。私たちは、左下の土管に入って隣同士に座った。密着度がますますアップして心臓がドクドク鳴ってしまう。この鼓動が先生にも聞こえてしまうかもしれない……。そう考えるだけで、恥ずかしさで顔が赤くなっていくのを感じた。

私は緊張を隠すために、突拍子もなく質問を投げかけた。

「ねぇ。先生と翔お兄ちゃん、どっちで呼んだらいい？」

「ふたりだけの時は好きな方でいいけど。でも学校では先生だぞ」
私の額を指で少しだけ押すと、念を押すように「生徒たちの前ではお兄ちゃんって呼ぶなよ」と付け加えた。
あの頃から、私は翔お兄ちゃんに憧れていた。でも私は小学生、お兄ちゃんは中学生。家庭教師として来てくれていたことも思い出に残っている。引っ越し前日に翔お兄ちゃんにキスを迫ったこともあったっけ。
「翔お兄ちゃん……私、あの頃はマセガキだったよね」
「あぁ、ホントだよ。キスしようとして、俺を押し倒したんだからな」
口角を上げてにやっと笑うと、私の顔を見て「今も面影は変わんねぇな」と呟いた。
「なによー！　それって今も幼いってこと？　子どもってこと？」
「そう怒るなよ」
翔お兄ちゃんは私の頭に手をのせて、ぽんぽんと優しく撫ぜてくれた。

再会できたことがただ幸せで嬉しくて……。これから人生を狂わすほどの大波乱がふたりの前に待ち構えていたことを、この時の私は知る由もなかった。

強引な約束

新学期初日は、まさに青天の霹靂(へきれき)だった。あんなに憧れていた翔お兄ちゃんが目の前に現れるなんて。担任の先生だからこれからは毎日会えるんだ。嬉しい気持ちが抑えられず、鼓動が速くなる。頭の中で今日起きた出来事をぐるぐると回想してみた。公園の土管の中で二人で密着して座り、優しく頭を撫でてもらい……。緊張のせいで終始、先生の顔はまともに見られなかった。翔お兄ちゃんとの再会を思い返すだけで、その夜は全然寝つけなかった。

あれから一週間。先生とは毎日教室で会っている。授業中に目が合うとニコっと笑ってくれるし、廊下では誰にも見られないようにウィンクをしてくれることもあった。内気で目立たないような自分をひそかに特別扱いしてくれることが、とても嬉しかった。心がくすぐったくて、ウキウキした気分にさせてくれる。

火曜日の四時間目は、翔お兄ちゃんに会える生物の授業だ。腕が長いせいか、黒板の上の方にも文字をびっしり書き込む。ノートに書きうつすのに必死になっていると、教室中を歩きまわっていた翔お兄ちゃんが突然私の近くに来て、耳元で囁いた。

「ホームルームが終わったら、すぐ理科準備室に来い」

幸い誰にも気づかれなかったみたいだけど、先生の大胆な行動には度肝を抜かれた。

放課後、素直に指定された理科準備室へ行った。うちの学校では、生物の先生一人ひとりに三畳ほどの小さな個室が与えられている。狭い室内に、職員室にあるような机が一つ、キャスターと背もたれのついた椅子が二つ、あとは壁側の本棚に資料や本がたくさん入っていた。窓には黒い遮光カーテンがかかっているせいか、まだ夕方でもないのに薄暗い。

白衣を着たままの先生は、私が来たのを確認するとうっすら笑い

を浮かべて「こっち」と手招きした。
「お前、この前の小テストで赤点だっただろ。勉強してないのか」
真剣な顔で、問い詰めるような言い方だ。
「翔お兄ちゃ……先生、私生物はニガテなの。暗記が出来ないから」
「そんなの言い訳だろ」
「今日からお前は補習だ。毎日放課後にここへ来るんだ」
「ちょっと待って！　一方的に決めないでよ。私、バイトだってあるのに」
「バイトは辞めろ」
「勝手に決めないで！」
上から目線の言い方に、正直ムカっときた。たしかに生物の点数は赤点だったけど、それは今に始まったことじゃない。昔から暗記系は苦手中のニガテだった。それなのに毎日居残りなんて何様のつもりだろう。すぐに踵を返して準備室を出ようとした。
その瞬間、先生は私の手首をぐっとつかんで体を引き戻した。
「やめて！　離して！」
「嫌だね」
「先生、なんか今日変だよ」
異様な雰囲気に泣きそうになりながらも、必死に先生の腕を振りほどこうとした。でも、強い力で私の手首をつかんで離さない。
「ちゃんと明日からここに来るって約束しろ」
「約束？　なに言ってるの？　私は忙しいの。バイトだって辞められないし」
「ダメだ。来るって言うまで離してやらない」
先生の手に加わる力はどんどん増していく。このままだと埒が明かない。
「もう、わかった。明日は来るから。今出ないとバイトに遅れる！　手離して」
先生は無言で私の手を開放し、満足そうに口元を緩めた。

渡されたメモ

強引な約束をさせられた次の日、ホームルーム中に何度か先生と目が合った。でも手を離してくれなかった横暴な態度が頭にちらついて、どうしても補習を受ける気分じゃなかった。約束を忘れたわけではないけど、わざと無視してそのままバイトへ行った。

その翌日、生物の授業中に先生はいつもの白衣を着て各机を周っていた。顕微鏡をのぞく私のすぐ横に先生が立つ。ふわっとしたせっけんのいい香りがかすかに鼻をかすめた。そして、みんなが気づかないように、先生はそっと私の手を握る。びくっと肩を震わせてちょっと距離を置こうとした瞬間、先生は無理やり私の手を開き、その中に小さく折られたメモ紙を入れた。

休み時間にメモを確認した。汗で少しふやけた紙をゆっくり開けると、＜１８時３０分　どんぐり公園＞とだけ書かれてあった。どんぐり公園は、先生と再会した日に行った場所。そこで何の話があるんだろう。まさかまたバイトを辞めろと言われるんだろうか。嫌な予感がしつつも、また約束を破る勇気はなかった。

キス

沈みゆく太陽をボーっと見ていると、なんだか無性に寂しい気持ちになった。この辺には子どもがあまり住んでいないせいか人影はまったく見えない。数羽のカラスだけがせわしなくカァカァと鳴き、頭上を飛び回っている。ちらっと腕時計を見ると、六時半を少し過ぎたところだった。無造作に積まれた土管の中にゆっくり足を踏み入れ、意味もなく携帯をいじる。「新着メールはありません」と書かれた画面をうつろな目で見ていたら、だんだんと眠くなってきた。

どのくらい時間がたっただろう。ゆっくりまぶたを開けると、誰かが私の肩にもたれかかっていた。少し茶色がかった髪の毛に、きめの細かい白い肌。少しぷっくりした下唇から歯並びの良い白い歯がちょっとだけ覗いていた。気持ち良さそうにスースーと寝息を立てている。

「先生？」と小さく声をかけてみた。

「ん？　おはよ」

「先生……」

「ひかる、お前も寝てただろ。待ちくたびれた？　ゴメンな」

「先生も寝ちゃったんだね」

「お前の顔見てたら、俺も眠くなったんだ」

目をこすりながらも、起きて数秒でシャキっとできる翔お兄ちゃんをすごいと思った。現に私はまだうつらうつらしている。

「お前さ、昔から暗記モノ苦手だったよな。でも、俺の科目で赤点は許さないぞ。家庭教師の時はあんなに頑張ってたのに。今勉強しておかないと後で後悔するからな」

「翔お兄ちゃん、いいの私は。勉強はニガテだもん。そんなこと言われたって困るし」

「特別にお前に補習をしてやる」

「いいよ、しなくていい」

「駄目だ、補習は決定だ」
「バイトは辞められないの。無理だって」
「お前な、バイトより勉強の方が大事だろ。今のレベルじゃどこの大学に入るのも無理だぞ？　これからどうするんだ！　受験生だろ。しっかりしろ！」
怖い顔で私を叱る。あーあ、また始まった。翔お兄ちゃんはどうしてこんなにこだわるんだろう。私の人生なのに。
嫌気がさして、土管から出た。少し早歩きで公園を去ろうとしたら、翔お兄ちゃんが後ろから走って追いかけてきた。
「おい！　待てよ！」
「ついてこないで！」
耳元で「捕まえた」という甘い声がして、腕を強くつかまれた。後ろにぐいっと引き寄せられ、いとも簡単に体がくるっと回される。目の前には、イジワルな顔をした翔お兄ちゃんがいた。
「離してよ。やめて」
私の抵抗もむなしく、太くて大きな木の下に連れて行かれた。背中を木に押し付けられ、私の顔のすぐ横に両手をつく。この態勢じゃ逃げられない……どうしよう。翔お兄ちゃんの顔がどんどん近くなってくる。右手でくいっとあごを持ち上げられた。あと数センチで、翔お兄ちゃんの唇が……。目をつぶった瞬間、唇に温かい感触がした。これがキスっていうことなの？　あぁ、憧れていた初めてのキスが無理やり奪われるなんて。
もう一度唇が重なる。息ができない。
「イヤ……ん……やめ……」
意識しなくても熱い吐息が漏れた。
「ダメだ。逃げるな」
耳元でささやき、翔お兄ちゃんはキスをする唇に力を込めた。頭の中が真っ白になる。へなへなと力がなくなっていき、おへその下の方がじんじんと熱くなっていくのを感じた。
イジワルな目つきで、今度は首筋にキスをした。

「変態！」
「俺が？」
にやりと笑う。
こんなに強引にキスを奪われるなんて。昔の優しい翔お兄ちゃんじゃ考えられない。反応をひとつひとつ確かめるように、熱を帯びたような目でじっと私を見つめる。翔お兄ちゃん細い指が、頬にかかっていた髪の毛をそっとよけた。
「イヤ。触らないで」
もう一度、唇が触れ合う。キスの嵐にあいながら、私はめまいを起こしそうになっていた。

家庭教師

前までは近所のお兄ちゃんだったのに、今は教師と生徒。いつの間にか禁断の関係になってしまった。俺は、ひかるが赤ちゃんの頃から八歳まで隣の家に住んでいた。その頃のあいつは、活発で人見知りもしないし、明るい子だった。俺が中学生の頃、ひかるのお母さんに家庭教師を頼まれた。私立の中学校に入れたいってことで、七歳から八歳までだいたい一年くらい勉強を教えていた。あの頃から、ひかるは机に向かうことが苦手だった。俺の顔をちらちら見て、全くテキストに集中してなかった光景がつい昨日の事のように思い浮かぶ。昔からひかるは愛嬌があって本当にかわいい奴だった。

あいつの家庭教師を始めて半年くらいたったころ、俺は親友を亡くした。あの体験は今思い出してもすごく苦しい。いつも一緒に登下校し、部活も一緒だった大親友が、夏休み中に海で溺れ死んでしまったのだ。親しい人の死を目の当たりにする惨さ。これはどんな言葉にも代えがたかった。

こんな心境で勉強を教えるのはひかるにも悪いと思い、家庭教師をしばらく休もうと決心してあいつの家の前に立っていた。すると、誰かがそっと俺の手を握ってきた。

「翔ちゃん、今日はお勉強の日じゃないよ？」

ひかるが俺の腰のあたりにぎゅっと抱きついて、無邪気に笑っていた。

「翔ちゃん、どうしたの？なにかあったの？顔が白いよ」

「ひかる、俺はもう勉強を教えてあげられないんだよ」

「どうして？」

「すごく悲しいことがあってね。心が苦しいんだ」

一筋の涙がこぼれてきた。そんな俺を見上げてひかるはポツリと言った。

「ママが言ってたの。悲しいときは誰かに話すといいんだって。悲

しみが半分になるんだよ。だからひかるが聞いてあげる。ねっ？」
「ひかる……ありがとな」
外から見えない門の陰で、しばらく泣き続けた。ひかるの笑顔には不思議な力があった。見る者を癒やす何かがあるように感じた。家庭教師を最後まで続けられたのも、精神的におかしくならずにすんだのも、天真爛漫なひかるに毎週会っていたおかげかもしれない。

妹になった日

算数の授業をしていた夏のある日、急にひかるの顔色がおかしくなった。

「しょ……ちゃ……ん……い……たい……」

蚊の鳴くような声で、お腹を押さえて倒れ込んでしまった。顔からは脂汗が流れ、顔は真っ青だ。あわててすぐにひかるの母親の携帯に電話をかけた。ところが、呼び出し音が鳴るだけでいっこうに出る気配はない。救急車だ！　震える手でダイヤルを押した。

「すみません、救急車をおねがいします。俺の……俺の妹が苦しんでるんです！　早く！　早く来てください！」

思わず口から出た「妹」という言葉。無意識にひかるを家族の一員にしていた。俺にとってひかるは妹であり、大事な存在で絶対に失いたくなかった。救急車に乗っている時もずっと手を握っていた。そして名前を呼び続けた。意識はなかったけど、呼び続けないとどこか遠い所へ行ってしまいそうで怖かった。

しばらくして、血相を変えたひかるのお母さんがやってきた。

「翔太くん！　ひかるは？」

「こっちです。今手術が終わって眠っています」

「本当にありがとうね」とお母さんが涙をためて俺の手を握った。

「ひかるちゃんのご家族の方ですね。先生からお話があります」

看護師さんの言葉にうながされ、お母さんは足早に病室を後にした。機械的な音が規則的に鳴り響く部屋で、酸素マスクをつけられ、点滴につながれたひかるが静かに眠っている。

俺は、ひかるの手を握って必死に祈った。絶対に死なせない！　もう一度目を開けてくれるなら、ひかるのしてほしいこと全部叶えてやる。だから、もう一度俺にあの笑顔を見せてくれ！　大切な人をこれ以上失いたくないんだ。

しばらくして、少し元気を取り戻したお母さんが戻ってきた。

「ひかるはもう大丈夫よ。虫垂炎ですって。腹膜炎をおこしかけていたから、もう少し遅かったら危なかったって言われたわ。本当に翔太くんのおかげよ」
ひかるのお母さんは、ハンカチで目を押さえながら何度も「ありがとう」と頭を下げた。

淡い想い

秋のある日、突然引っ越しで都内から北海道へ移ることになった。親父の仕事の都合だから反論もできず、一週間ぐらいで荷物をまとめることが決まった。今までは親父ひとりが単身赴任をしていたこともあったが、北海道はあまりに遠すぎて月に一回帰ってこれるかどうかもわからない。自動的に俺たち家族もついて行くことになった。

ひかるのお母さんには、引っ越しが決まったことをすぐに伝えた。でもその時、本人には伏せてもらうように頼んだ。どうしてもひかるには言いだせなかった。あいつの悲しむ顔は絶対に見たくなかったから。

「翔ちゃん！　翔ちゃんってば！　ボーっとしてどうしたの？」

ピンクで統一された六畳ほどの部屋の中で、ひかるが目の前で一生懸命にぶんぶんと手を振っていた。算数の教科書を放り投げて、下からのぞき込み、わざと変な顔をしてみせる。

「翔ちゃん！　笑って！」

ひかるの整った顔が、今は子ブタのようになっている。鼻をぐにゃっと曲げてもこんなに可愛いなんてやっぱり俺の妹だな……と自己満足に浸っていたら、「なにニヤニヤしてるのー」とひかるは嬉しそうな顔を浮かべた。

「ひかる、ちょっとおいで」

柔らかくて小さな手足。軽々と持ち上げると、俺はひかるを自分の膝の上に乗っけた。

「ひかる、実は……兄ちゃんは遠い所へ引っ越すことになったんだよ」

「ひ、ひっこす？」

「そう、北海道っていう場所に住むことになったんだ」

「え？　北海道ってどこ？」

「ずっと北にあるんだ。ここからは飛行機で行くんだよ」
「ひこーき？　ひかる、乗ったことない。空を飛ばないと、翔ちゃんに会えないの？」
「うん」
「イヤだ！」
「ごめんな」
「絶対にいやだもん」
「ひかる……」
「翔ちゃんがいないと、ひかる泣いちゃうもん」
「兄ちゃんも本当は離れたくないんだよ。でも、家族みんなで行くからしょうがないんだ」
　ひっくひっく……嗚咽をあげて泣き始めた。
「ひかる、もっとお勉強がんばるよ。もっと算数の宿題もがんばるから！　だからひかるを置いていかないで！」
　切ない。本当に辛かった。俺だってお前をずっとそばに置いておきたいんだ。
　膝の上で、ひかるは茫然（ぼうぜん）としている。優しく頭を撫ぜながら、なだめるように話した。
「これからもずっと、俺はお前の兄ちゃんだ。離れていても同じだよ。それを忘れるな。いいな？」
　コクっと頷く。
「お兄ちゃん……。じゃあ、翔お兄ちゃんだね？　翔ちゃんじゃなくて、これからは翔お兄ちゃんって呼ぶよ、いーい？」
「いいよ。その呼び方は、ひかるだけに許す。ほかのヤツには呼ばせない。お前だけの、翔お兄ちゃんだからな」
　コクっと、今度は強く頷いた。
「……翔お兄ちゃん」
「ん？」
「ひかる、もう大丈夫だよ。だって翔お兄ちゃんが守ってくれるもん。遠くにいても、お兄ちゃんは守ってくれるもん。そうでしょ？」

「そうだよ。いつもひかるのことを考えてるよ」
「うん」
「翔お兄ちゃん、大好き！」
「俺も大好きだよ」
ひかるは、俺の方に向き直って肩に手をまわして抱きついてきた。
「お別れのチューは？」
「……」
一瞬耳を疑った。小学3年生の口から出る言葉とは思えない。
「ねぇ、翔お兄ちゃん！ひかるにお別れの印は？」
俺は勢いで半分押し倒されそうになりながらも、上体を起こしてひかるを横に座らせた。そして前髪を優しく上げ、額にキスをした。
「これで俺たちは永遠に一緒だよ」

色あせない約束

終業のベルが鳴る。部活のない生徒たちは、一斉に帰宅準備をはじめた。

「ねぇ、ひかるは今日もバイトでしょ？」と隣の席の理香が声をかけてきた。

「あ、うん」

本当は違うけど、先生と補習をすることは誰にもナイショだって言われてたから黙っておこう。あれから、カフェでのアルバイトは土日だけのシフトに変えてもらった。放課後はこれから毎日、先生との時間になる。公園でのファーストキスを思い出すだけで胸がときめいてドキドキした。

ガラッ――。理科準備室のドアを開けた。あれ？　誰もいない。

「先生？」

返事はない。

「どこ？」

シーンと静まり返った教室。ドアの外に出て、もう一度白いプラスチックのプレートを確認した。真新しい黒い文字で“理科準備室　桜庭翔太”と書かれている。間違いはないはずだ。もう一度呼んでみる。

「先生？」

突然、背後から石鹸の良い香りがして、ぎゅっと抱きしめられた。

「え？」

戸惑いながら振り向くと、先生が立っていた。

「ひかる、来てくれたんだな」

私は、照れたような嬉しいような顔をして、口角を上げてニッと笑って見せた。

「ねぇ、ひかるとした約束、今でも覚えてる？」

「あぁ。お前が八歳の時、俺のお嫁さんになるって言ってたよな」

「覚えててくれたんだね」
翔お兄ちゃんは椅子にもたれかかった。
「お前も座れ」
「はーい」
「さぁ、勉強するぞ」
「えー？　本当に勉強するの？」
「あったりまえだろ！」
「センセー、私勉強したくないよ」
「ん？　じゃあ、何しに来たんだ？」
「……」
私は公園での出来事を思い出して、顔を赤らめた。
「変なこと想像してたんだろ？」
「ちがう！」
「あやしいなー」
「ちがうもん」
ふてくされて頬を膨らませる。翔お兄ちゃんは、下から顔を覗き込むように私を見てぷっと吹き出した。
「やっぱかわいい。そのすね方、変わらねぇな」
「もしかして八歳の時のこと？」
「そう、あの時のまま。まだまだガキだな。」
「ちょっとー！　私はもう大人のオンナなのに」
「大人のオンナ？　色気もないくせに」
「見てよ、胸だってこんなに……」
着ているセーラー服が白色なのをいいことに、今日はわざと濃いピンクのブラをつけてきた。中にはキャミソールもタンクトップも着ていない。
「俺を誘惑してるだろ？」
「だって、私のことまだ子ども扱いしてるでしょ。そんなの嫌だもん」
翔お兄ちゃんの顔色がさっと変わった気がした。

「本気で襲われたいのか？」
「……」
またあの時の目だ。公園でキスをした時と同じ。翔お兄ちゃんは、ごくんと唾を飲み込んだ。そしてふーっと大きく息を吐き出す。
「お前はまだ未成年だろ。オトナぶっていると痴漢に遭うぞ」
「何？　電車とか？」
「そうだよ。気をつけろよ」
翔お兄ちゃんは私から目を逸らすと、手元に置いていた生物の教科書をぱらぱらとめくり始めた。
あの日公園でキスをしてから、私は何か期待していたのかもしれない。でも翔お兄ちゃんは思ったよりも真面目で、生徒である私との関係にためらいを感じているようだった。

幼いころの面影

またしても驚かされた。ひかるの奴、いつの間にあんな大胆になったんだ？　少なくとも、俺の知ってるひかるは男を誘惑するような子じゃなかったはずなのに。あぁ、でも思い返せば、八歳の頃に俺を押し倒してお別れのキスを迫ってきたことがあったな。やっぱり本質は変わっていないのかもしれない。理科準備室での出来事が走馬灯のように頭を駆け巡る。ひかるの胸が脳裏からチラついて離れない。小さくて華奢な体なのに、よくあんなに成長したものだ……。あの日、公園でひかるにキスをした。再会できた嬉しさが抑えられなくて、自分の欲望に負けてしまった。

俺は八歳のあいつを妹として見ていた。虫垂炎で倒れた日、「ひかるのことは一生俺が守る」と神に誓った。何でもするから助けてくれと祈り続けたことが、つい昨日のことのように思える。

正直に告白すると、俺がこの学校に赴任してきたのは偶然ではない。ひかるが通っている高校を調べてから希望を出した。すると、ラッキーなことにA組の担任が産休を申し出たのだ。カフェでひかるが働いていることも知っていた。ふりふりの白いエプロンに黒地のミニスカート、そして白いハイソックスを履いてメイドのような格好をしているのを見て、他の男が寄りつかないように喫茶店に何度か通ったこともある。本人は俺だって気づかなかったみたいだけど。ストーカーのように聞こえるかもしれないけど、そうじゃない。俺はただ、ひかるを近くで守りたいだけなんだ。

両親のケンカ

今日はズシンと心が重い。理由は、両親の大げんかだった。朝の六時半ごろ、お母さんのどなり声で目が覚めた。慌てて階下に行ってみたら、ケンカの痕跡の酷さ（ひどさ）に血の気が引いた。花瓶は割れて粉々になっていたし、食卓テーブルの上にあるはずの花柄のお皿やコップが床の上でひっくり返っていた。読みかけの新聞や、テレビのリモコンまでも床に散乱していた。

両親に気づかれる前に、こっそり支度をしていつもより三十分早く家を出た。今まで親があんなに激しく物を投げ合ってケンカする場面なんて見たことがない。ショックで胸の動悸がおさまらない。お父さんがお母さんに暴力でも振るっていたらどうしよう。ちょっと前にテレビで見た事件のようになっていたら……。帰宅したら、二人は元通りになっているだろうか？　もし、どちらかが家を出ていくことになってしまったら……？　想像しただけで背筋が凍り、寒気がした。

耳の奥で始業のチャイムの鳴る音がかすかに聞こえた。だんだんと目の前が白くなっていく。理香が大きな声で騒いでいるのが視界に入ってきた。目を見開いて「ひかる！」と叫んでいる。

目が覚めたら、白いパイプベッドの上に寝かされていた。私の周りに引いてある真っ白のカーテンをかき分けてみる。

「気がついた？」

保健室のお姉さんと呼ばれている綺麗な顔立ちの中田先生が、ゆっくりとした動きでベッドの横に座った。グリーン系のアイシャドウにオレンジ色のチーク。マスカラはしっかり塗り、黒いアイラインが上げ気味に書かれている。切れ長の目に合うように、メイクも研究し尽くされているみたいだ。薄くて小さな唇に、真っ赤な口紅が目立つ。年齢は直接聞いたことがないけど、恐らく２６歳か２７歳といったところだろう。

「あの、私どうして？」
「貧血で倒れたの。朝ご飯はちゃんと食べてきた？」
首を横に振った。
「きっと血が薄くなっていたのね。明日から少しでもいいから何か食べてから学校に来るのよ」
「はい」
廊下から足音が響いてきた。だんだんと近くなってくる。もしかして先生かも、と淡い期待が胸をよぎった。
ガラッと引き戸のドアが開く。
「あ、ひかるさんのお母さんですね。わざわざ呼び出してすみませんでした」
「いいえ、こちらこそ。娘がご迷惑をかけてしまって」
お母さんが息を切らしながら申し訳なさそうな顔を浮かべていた。
「今日は貧血がひどいので、家で休ませてあげてください。学校にいても授業には行けないでしょうし」

予期せぬ訪問

ベージュと茶系で統一された六畳ほどの自室。勉強机の上にカバンを放り投げる。キャスターのついた椅子の背もたれ部分に、脱いだ制服をそのまま畳まずに掛けた。濃い茶系のカーテンを一気に引き、壁側の窓の近くに置かれたシングルサイズのパイプベッドに横になった。淡いピンク色の掛け布団は私のお気に入りで、枕とおそろいの小花柄にしている。イルカの抱き枕にぎゅっと体を巻きつけた。

コンコン――。突然、ドアがノックされた。

「はい」

「ひかる？　担任の先生が来てくれたわよ。開けていい？」

先生が？　私のために来てくれたの？　半信半疑のまま机の上から素早く丸い手鏡を取り、乱れた髪の毛をさっと直した。そして、白いキャミソールの上に学校で着ている紺色のカーディガンも羽織る。上半身だけ起こして、ボタンは閉めなかった。

先生はひどく心配そうな顔で、「ひかる、倒れたんだってな。ひどい顔色じゃないか」と小さな声で言った。そして、私が横たわっているベットの上に座った。

「何があったのか話してくれ」

「大したことじゃなかったの。朝ご飯を食べなかったせいで倒れちゃった。私って弱すぎだよね。でも翔お兄ちゃんが来てくれて、すっごく元気になれた気がする」

「本当にそれだけなのか？　悩みがあったんじゃないのか？」

コンコン――。再びドアがノックされた。

「お茶でもどうぞ」

お母さんがドアを開けて、湯呑みをお盆ごと机の上に置いていった。ベッドで上半身だけ起こした私と、先生の座る位置があまりに近かったせいだろう。お母さんはちょっと驚いたような顔をしなが

らも、そそくさと出ていった。
「ねぇ、今のお母さんの顔見た？」
「あぁ」
「すっごい面喰ってなかった？」
「だな」
「バレちゃったかな？」
「大丈夫だろ」
「お母さん、先生が翔お兄ちゃんだってこと気づいてないよね？」
「今日顔合わせるのが初めてだしな」
「顔ちょっと変わったもんね。雰囲気も違うし」
「そうか？雰囲気が違うって？」
「今はなんていうか……エロオーラが出てる！」
翔お兄ちゃんはぷっと吹き出した。
「エロオーラ？」
「だってあのキス……」
「そんなにヤバかった？」
「私、初めてだったんだよ」
私は顔を赤らめて、うつむいた。

隠された本音

俺がひかるの初めてだったのか。ファーストキスならきっと驚いたはずだ。なんだか悪いことをしたな。もっとロマンチックな演出を考えてやれば良かった。正直、イマドキの女子高生なら、もうキスぐらいは済ませているのかと思ったけど……。ひかるは違った。俺のことを待っててくれたのだろうか。自分勝手に解釈をして自己満足に浸る。

見舞いに来てひかるの顔を見たら、ものすごくホッとした。顔色はまだ悪いけど、この分だと明日は学校に来られそうだ。ひかるの部屋にいると、当時の記憶が鮮明によみがえる。そういえば、虫垂炎で病院から退院してきた日もひかるはベッドで眠っていた。あの頃の俺は、心配で毎日のように見舞いに来ていた。

ベッドに横たわるひかるが、俺の腕をつかんで何か考え込んでいる。

「もしもの話だけど、翔お兄ちゃんと私の関係がバレたらどうしよう」

「お前はこっぴどく叱られるだろうし、俺は教師クビだろうな」

「クビになっちゃうの？」

「ワイセツ行為で懲戒免職だろ」

「ワイセツって……。キスしかしてないのに！　そんなの嫌だ」

「最悪の場合の話だから。心配すんなよ」

「もしバレて先生がクビになったら、私も学校やめるから」

「ダメだ。お前はちゃんと卒業して、大学へ行きなさい」

「先生のお嫁さんになるんだから、別にいいじゃん」

「ちゃんと教養をつけて仕事を見つけなさい」

「いいの！　家で翔お兄ちゃんの帰りを待つの。毎日おいしいご飯をつくって、お風呂の準備もして、可愛いエプロンをして待つんだ

もん」
「……ったく。お前はいつからこんなに口答えするようになったんだ？」
はにかんで笑うひかるがかわいい。今すぐ抱きしめたい衝動に駆られたが、さすがにドアを一枚隔てた向こうに母親がいると思うと、そんな欲望も消え去った。
ここに来てもう三十分近くたつ。そろそろ帰らないと、本当に怪しまれてしまうだろう。いくら俺が昔の命の恩人だとはいえ、教師が生徒に手を出したとわかればタダじゃすまない。ベージュのスプリングコートを手に取り、ベッドから立ち上がろうとした。その瞬間、ひかるがぐいっと腕を引っ張った。
「ダメ。帰らないで」
「おい、なに言ってんだ」
「翔お兄ちゃん、私も行きたい。ここにはいたくないの。家へ連れて行って」
不意打ちだった。正直に言えば、心がぐらっと傾いた。普通のカップルなら即答でＹＥＳと答えるかもしれない。だが、仮にも俺は高校教師だ。
「お前はバカか！　少しは頭で考えろ。俺は教師だぞ？　しかも担任の」
嬉しい気持ちを隠すようにわざと冷たく突き放した。
「……」
泣きそうな顔で見つめるひかるを置いて、ドアを閉めた。
ひかるにはちゃんとした人生を歩んでほしいんだ。俺のせいで一寸も狂うことのないように。

酔っ払い

小テストの答案を全部チェックし、頼まれていた事務作業も終えた。教師一年目というのは、妙に雑用が多いらしい。誰もが通る道だとわかっていても、「はっー」とため息が出てしまう。これで残業は全部かたづけた。左手に巻いた腕時計をちらっと見る。もうすでに午後九時を回っていた。そろそろ帰るとするか。

「桜庭先生！　緊急事態ですよ！」

ちょっと小太りで化粧の濃い、五十五歳にしては若作りの学年主任が血相を変えて走ってきた。もしかして、俺たちの禁断の関係がついにバレてしまったのか……？　想像しただけで心臓が飛び出しそうだった。ひかると俺は、あれから毎日のように放課後、理科準備室で会っており、補習という名目で半分は勉強、半分は世間話をしていた。懐かしい家庭教師時代の話をすることもあり、俺たちにとってはかけがえのない時間だった。

学年主任は俺の顔を見るなり、唾を飛ばしそうな勢いで口を開いた。

「先生のクラスの渡瀬ひかるが泥酔したって」

なんだって？　ひかるが酔っぱらった？　自分の耳を疑った。

「本当に渡瀬ですか？」

「今、新宿二丁目のバーから迎えに来いって電話があったのよ。早く行ってきて！」

学年主任からもらったメモを片手に、急いでバーまで駆けつけた。“エタニティ”と書かれた古ぼけた看板の前に車を停め、昭和の臭いがする雑居ビルの階段を二階まで一気に駆け上がる。ドアノブを勢いよく回してドアを開けると、カウンター越しにいるオーナーらしきひげ面の人物が、面倒臭そうな表情で無言のまま店の奥を指差した。一番奥の窓側のL字になったソファーに、泥酔しきった様子の少女が横になって眠っているのが見える。ピンクのシフォン生地

のひらひらしたミニスカートに、白基調の小花柄のブラウス。華奢な足には不釣り合いな赤いハイヒールまで履いていた。真っ赤な口紅を塗り、濃い青色のアイシャドウを塗った顔は、いつものひかるとは大違いだった。
「おい！　ひかる！」
体を揺さぶってもまったく反応がない。
「強い酒を飲んで潰れたんだよ。翔お兄ちゃんってずっとうわ言のようにつぶやいててね。でも、親や兄弟の連絡先は言わないから困っちゃったよ。さっきやっと生徒手帳を見つけて、学校に連絡したってわけさ」
バーのオーナーらしき男が近寄ってきて、呆れたように言った。
「そうですか。ご迷惑をおかけしました」
「まさか未成年だとはね。警察には言わないでおくけど、先生なんだからしっかり頼むよ」
「すみませんでした」
「お金は払っていってくれよ、先生」
「もちろんです」
目の前に差し出された少し錆びた銀色のトレーに、財布から三万円を抜いてそっと置いた。そして数百円のお釣りをもらい、ひかるを背負って足早に車に戻った。

「翔お兄ちゃん……？」
「ひかる？　気がついたか？」
「うん」
「お前、どうしてバーになんか行ったんだ？　少しは心配する親の気持ちを考えたらどうだ！」
「やめて。親なんてどうでもいいの」
「どうでもいいってそんな言い方ないだろ」
「あんな人たち。お互いに傷つけあってバカみたい」
「どうした？　ひかる？　なんか変だぞ」

助手席にちょこんと座っていたひかるは、突然俺に抱きついてきた。そして、ぽろぽろと大粒の涙を流した。頭を優しく撫でてやると、ひかるは子どものように嗚咽を繰り返した。
「何かあったんだろ？」
首を横に振る。
「何でもないの。大したことじゃないの」
「じゃあ、どうして泣くんだ？」
「……」
「言いたくないんだな」
「ごめんなさい」
「わかった。家まで送るよ。もう遅いから」
「どうしても家には帰りたくない」
「え？」
「翔お兄ちゃんの家に泊めて」
「それは……」
「いいでしょ？　今夜だけだから」
「ダメだ」
「お願いだから泊めて」
「前にも言っただろ。教師と生徒は」
「わかってる！」と強い口調でひかるが遮った。
「翔お兄ちゃんは頭が固すぎる。親に電話して友達の家に泊まるって言うから。明日はそのまま学校に行って家に帰る。いいでしょ？」
「親に嘘をつくのか？」
「そう、私って悪い子だから」
両手の人差し指をこめかみの位置に持っていき、頭に角が生えている仕草をして俺の顔をのぞきこんできた。おまけに捨て犬のような目つきで訴えかけてくる。
「俺を困らせるなよ」
「一晩だけ！　お願い！」
「……わかったよ」

ついに俺は根負けした。ひかるは満面の笑みで、両手をあげて助手席でぴょんぴょん跳ねている。こんなに喜ばれるとは予想外だった。ひかるが泊まりに来てくれるのは確かに嬉しい。しかし反面、俺は教師として禁断の関係を続けることへの罪悪感に悩まされ始めていた。

犬の名前の由来

「5」と地面に大きく書かれた入居者専用の駐車場に、赤いスカイラインのクーペを停める。この愛車は、社会人になったお祝いに自分へのご褒美としてローンで購入したものだ。ひかるが助手席からよろよろと降りてきたのを確認し、三階建マンションの二階へ上がった。あまり人混みが好きではない俺は、“静かな環境”という条件を第一希望にして賃貸住宅を選んだ。周りにあるのは一軒家ばかりで、コンビニもなければパチンコのような娯楽施設もない。そのためか、夜間は昼間以上に静かだ。スプリングコートの裾をぎゅっと握りながら、ひかるは俺の後ろをぴょこぴょこ跳ねながらついてきた。その姿は、八歳の頃と何ら変わらない。ただ背が伸びて、体だけ大人になったみたいだ。

ガチャ――冷たい音が響いて重いドアが開く。俺はまだ生徒を家に連れ込む罪悪感が完全に消し去れていなかった。

「お邪魔しまーす」

ひかるは何かの歌を軽く口ずさみながら、ご機嫌で俺の後ろにぴったりくっついている。

「お前、本当に泊まるのか？後悔しても知らないぞ」

「しないもん。翔お兄ちゃんのお部屋をチェックしなくっちゃ」

ひかるは口元に指を置いて、子どものような無邪気な顔でニタっと笑った。まさか誰かが来るとは思っていなかったが、たまたま昨日掃除機をかけておいて正解だった。学校関係の書類はきちんとファイルに入れて机の引き出しにしまっておいたし、黒いソファーの上に散乱していた白い犬の毛もコロコロ粘着テープで取っておいた。ひかるは酔っ払いとは思えないほど意識がはっきりしているようだ。丁寧に手で靴を揃えて玄関を抜け、すぐにリビングの隅にある犬用の白いケージに近づいた。

「チワワだ！　かわいいー。名前なんていうの？」

「ん？　いや……その……」
「まだ名前ないの？　子犬なの？」
「子犬じゃない。名前はさ……」
「ん？」
「ヒッキーナ」
「何それ。かわいくない」
「おい！」
「なんか引きこもりみたいな名前」
「ひっでーな」
「なんでヒッキーナにしたの？　由来は？」
「……」
「秘密なの？」
「何でもいいだろ」
「ふぅん。冷たいなー」
本当のことを言うと、北海道に引っ越した後ひかるのことを思ってつけた名前だった。小さくて華奢で、大きなくりっとした目、主張しない小さな鼻と口がよくひかるに似ていると思った。高校二年の時、親が誕生日にプレゼントしてくれたチワワ。飼い始めて一日目は「ひかる」と呼んでいたが、両親の手前もあってちょっと変化させたのだ。
話題を変えようと思い、冷蔵庫の棚から缶ビールを一本取った。
「翔お兄ちゃん、ひかるも喉乾いた」
「冷蔵庫開けて勝手に好きなの飲めよ」
「飲みたいのないよ。これ、ひかるにもちょうだい」
「ビールはダメだ」
「いいじゃん。どうせお酒飲んじゃったんだし」
「ダメだ。ちゃんと言うことを聞け。俺はお前の先生なんだぞ」
わざと語調を強くして叱るように言った。
「はぁい」
ひかるは甘ったるい声で返事をしたかと思えば、ダイニングテー

ブルの横からすっと手を出してきた。危うくビールに口をつけるところだった。まったく油断も隙もない奴だ。
シャワーを浴びて戻ってくると、ソファーの上でひかるは眠っていた。テレビの方を見て横向きに、手足をだらんとさせている。このままソファーで寝かせて風邪でも引いたら大変だ。起こさないようにそっとお姫様抱っこをして持ち上げ、そのまま寝室へ運んだ。透き通った白い肌にピンク色に染まった頬、そして半開きの赤い唇。化粧をしたままのひかるは、どこか妖艶で大人のオンナに見えた。
モノトーンでコーディネートされた寝室。真っ白で統一されたシーツ、枕カバー、そして掛け布団は、ちょうど今朝新しいものに取り換えたばかりだった。セミダブルサイズのベッドの上にひかるをそっと寝かせ、ふわっと掛け布団をかけた。
「しょうおにい……ちゃん……」
寝言で俺を呼ぶ。夢の中でも恋しているんだな。どこまで可愛いんだろう、こいつは。

初めての朝帰り

きっと翔お兄ちゃんと私は赤い糸で結ばれている。お互いの小指と小指から出ている糸は、誰にも外すことができない。私には幸せになれる確信がある。一緒にいて、こんなに楽しくて心が躍る人はいないもの。まるで、ふたりはいつもオレンジ色の大きなシャボン玉の中にいるみたいだ。シャボン玉の中は柔らかくて温かい。ここにいれば、どんなに大きな波が来たって大丈夫。ねぇ翔お兄ちゃん、そうでしょ？

突如、髪の毛を引っ張られたような気がして後ろを見た。誰かが遠くから翔お兄ちゃんを追いかけて来ているのが見えた。そこにいる女の人は誰だろう？　私から翔お兄ちゃんを奪おうとしている。私がどれだけ「連れていかないで」と懇願しても無駄だった。私は一人ぼっちになった。シャボン玉の色がみるみるうちに黒く、冷たく硬くなってくる。逃げ出そうとして走ったら、シャボン玉からポーンとはじき出されたように急に視界が明るくなった。

「ひかる！　起きないと遅刻だぞ」

ドア越しに翔お兄ちゃんの声が聞こえる。あれはただの夢だったんだ。命拾いしたような気分で、ほっと胸をなでおろす。

「おい！」

翔お兄ちゃんがしびれを切らしたような顔でドアを乱暴に開けた。

「ノックぐらいしてよ。着替えでもしていたらどうするのよ？」

「お前が返事しないからだ。学校に遅れるぞ」

カバンの中から聞き覚えのある音がした。

「ヤバイ、親から電話だ！」

「昨日しなかったのか？」

翔お兄ちゃんは顔面蒼白で、あたふたしている。これが生徒を外泊させた教師の反応？　そんなに慌てなくたっていいのに。

「もしもし？」
「ひかる！　どこにいるの！　昨日から何回も電話をかけているのにどうして出ないの？」
「ごめん。マナーモードになってた。理香の家に泊ったの。昨日のバイトが長引いちゃって。その後、理香の相談に乗ってたら夜十二時過ぎちゃったの。終電もないからそのまま寝かせてもらった」
「本当なの？」
「うん」
「まったく。連絡くらいしなさい。心配するでしょ。早く帰ってらっしゃい」
「今日はそのまま学校へ行くから。いい？」
　電話を切った。心臓がドキドキと大きな鼓動を立てている。小さい嘘をついたことは今まで何度かあったけど、朝帰りは生まれて初めてだ。
「お前、嘘が上手いな」
「えへへ」
「ちょっと待て、えへへじゃないだろ。俺は褒めてないからな。勘違いするなよ」
　時間がない。バターをたっぷり塗った食パンを一枚頬張りながら身支度を整える。
「ひかるはハチミツもかけたほうが好きなんだけどなー」
「いいからさっさと支度しろ！」
「少しぐらい遅刻したって大したことないよ」
「お前は良くても俺はマズイんだよ。新米教師が遅刻なんてありえないだろ。しかも生徒を外泊させてるし」
　翔お兄ちゃんが鍵を持ってドアの所で待っている。
「早くしろ。マジで遅れるぞ！」
「はぁい」
「今日に限って弟に車を貸すことになってるし、まったくツイてないな。電車だといつもより時間がかかるぞ」

「うん、わかってるー」
私は急ぎ足で玄関まで走り、あわてて茶色のローファーを履いた。
「ホントにトロい奴だな」と言いながら、翔お兄ちゃんはドアの鍵を閉めた。ふたりでマンションを出る。なんだか同棲中のカップルみたいだ。二人並んで閑静な住宅街を歩いていると、スズメの愛らしい鳴き声が耳に響いてきた。駅までのほんの五分くらいの間に、25キロくらいはありそうな大きな茶系のラブラドールレトリバーを連れてジョギングする人、電動自転車に乗って駅へ急ぐ人、グレーの上下おそろいのスウェットを着てゆったり散歩を楽しむ老夫婦とすれ違った。
「ねぇ、血圧低いでしょ」
「根拠もないくせに適当に言うな」と言い、翔お兄ちゃんはちらっと私の方を見た。
「ほら、怒ってる。血圧低い証拠だよ」
「お前が早くしないからだ」
わざと早足にして私を置いていこうとする。
「翔お兄ちゃん、家に忘れものして来ちゃった」
「え？　何を？」
「体操着。今日は体育があるから絶対に使うの。取りに行くから鍵貸して。あとでそっと返すから」
おもむろに差し出してくれた鍵を握り、私は踵を返した。そして、全速力で駅とは反対方向へ走った。

合鍵

「おはよ」
聞き覚えのある甘い声。家の中には誰もいるはずがないのに。変だなと思いながら、辺りをきょろきょろと見まわした。ん？　誰かが玄関で靴を脱ぎながらこっちに手を振っている。
「ひかる？　なんでここに？　鍵はどうやって開けたんだ？」
俺は寝ぼけているのか？　昨日貸した鍵は確かに返してもらったはずなのに。
「えへへーこれ見て」
ひかるは、自分の目の高さまで鍵を持ってきてブラブラさせた。先端には白っぽいチワワの顔をしたキーホルダーがついている。
「お前、それ……」
「昨日ね、合鍵つくっちゃったの。これで好きな時に翔お兄ちゃんのお部屋に来られるでしょ？」
「お前なー、それ犯罪だぞ？」
怖い顔をして睨んだつもりが、ひかるには逆効果だったようだ。
「絶対に返さないからね。ファーストキスまで奪った恋人なんだからいいでしょ」
手の中にある鍵を無理やり開かせようとしたが、なかなか取れない。ひかるはイヤイヤをするように、体をねじ曲げたり伸ばしたりして必死に抵抗している。もちろん男の力で押し倒しでもすれば簡単に奪い取れる。そんなことはわかっていた。だけど、こんなに華奢なひかるを簡単に降参させるのは気がひけた。
「クソッ！」
「諦めた？」
「お前の勝手にしろ。ただし、友達は絶対に連れてくるな。秘密にしてろよ」
「オッケィ。翔お兄ちゃんと二人だけの秘密だね」

ひかるは舌をちらっと出し、いたずらっぽい笑顔を浮かべた。
「ねぇ、ゲームしない？」
「どんな？」
「これ持ってきたの」
ひかるは、カバンから携帯版のオセロゲームを取りだした。
「うわっ、これ懐かしいな」
「でしょ？」
「俺たち、昔勉強が終わったらよくやってたよな」
「うん、翔お兄ちゃんが教えてくれたよね」
「久しぶりにやるか」
「どうせなら賭けない？　負けた人は勝った人の言うことを何でも一つ聞いてあげるの」
「おっ、勝つ気満々だな」
「当たり前でしょ。昨日は家で練習してきたんだから」
ゲームを始めて三十分くらいたっただろうか。二回戦が終わった。今のところ、勝負は引き分けだ。
「学校に遅れるぞ。続きはあとだ」
俺は腕時計をちらっと見てひかるに言った。
「ダメだってば。賭けをしてるんだから、今やらなくちゃ」
結局、強引に三回戦に突入することになった。時間に焦る俺を尻目に、ひかるはどんどん追いあげていく。
「ヤッター！」
結果は、ひかるの勝利に終わった。
「お願い、聞いてくれるんだよね？」
「ん？」
俺は耳を塞いでわざと聞こえないふりをした。
「デートに行きたい」
聞く気がないとわかると、ひかるは紙とペンをカバンから取り出した。
“デートに連れて行って”と赤いボールペンで書き、俺の目の前ま

で持ってきて紙をひらひらさせる。デートなんてとんでもない。説得させなくては。
「デートって外でだろ？」
「うん。ダメなの？」
「絶対に無理だって。誰かに見られたらどうするんだ」
「変装すればいいでしょ」
「どんな変装だよ」
「伊達メガネをかけて、かつらをかぶるの。アフロなんてどう？流行っているらしいよ」
ひかるはころころと笑った。
「逆に目立ちそうだな、それ」
「ねぇ、サングラスは持ってないの？」
「ない」
「じゃ、ひかるが買ってくる。それでいいでしょ？」
ここまで引き下がられると、どうしようもなくなる。またもやひかるのペースに巻き込まれたような気がした。

海

「危ないからそっちには行くなよ！」
白いTシャツに茶色のジャケット、ブラックジーンズ、野球帽を被った翔お兄ちゃんが、腕組みをして五十メートルぐらい離れた所に立っている。三十分以上も前から、まるで録音されたアナウンスみたいに「そこで止まれ」とか「こっちに戻ってこい」とか「風邪をひくからダメだ」とか、同じことを何度も繰り返して叫んでいた。
数十メートル先ではサーファーたちが波のりを楽しんでいる。でも風が強くなってきたせいか、一人、また一人と去って行く。ただ海を見に来たのは私たちだけみたいだ。
「翔お兄ちゃんもこっちおいでよ」
白のひざ丈ワンピースに淡いピンクのカーディガン、そして黄色いビーチサンダルを履き、私は一人で波打ち際を歩いていた。
「いや、いい」
「今日は海嫌いを克服しに来たんでしょ」
「そうだけど、いざ来てみたらやっぱ怖いな」
中学生の頃に大親友を海の事故で亡くして以来、翔お兄ちゃんは水に強い恐怖心を持つようになっていた。海水浴は事故があってから一度も行ってないし、プールにも入らない。お風呂に入るのも苦手で、なるべくシャワーで済ませることが多いと言っていた。
初めてのデートで「海へ行こう」と提案したのは翔お兄ちゃんだった。きっかけはほんの些細なこと――。先週理科準備室で補習をしている時、将来の夢についての話になった。私が「早くお嫁さんになりたい」と言うと、そのまま流れで理想の結婚式や子どもの数の話になった。「結婚式はどこでやりたい？」と聞かれ、「ハワイのビーチ！」と即答。そう、何も考えずに。あの時、翔お兄ちゃんの恐怖症のことはまったく頭になかった。数秒後に気づいて「やっぱり陸でいいよ。普通に教会か神社で挙式をするのが一番だよ」と

言い直したけれど、本人は半分しか聞いていない様子だった。
デートの行き先は遊園地の予定だったのに、今朝になって「ひかる、俺は海恐怖症を治す」と言い出したのだ。いくら止めても「今日行きたいんだ」と言い張るし、これじゃ埒が明かないと思って私も一緒についてきた。実際、恐怖症を克服できるかどうかなんてわからない。だけど、やっぱりなんとかして力になってあげたいと思った。
「大丈夫だよ。海なんてちっとも怖くない。ひかるのそばに来て！」
とりあえず、大きく手を振りながら呼んでみた。
翔お兄ちゃんの顔はひどく引きつっている。こんなにおびえる姿を見るのは初めてだった。今まで私のことを守ってくれていた翔お兄ちゃん。入院した時も、ずっとそばにいて手を握って名前を呼んでくれていた。心の底から、何かしてあげたいと思う。もし、今ここで大きな波がきても私は翔お兄ちゃんを守る。絶対に逃げないんだ。私は溺れてもいい。死んだっていい。でも、翔お兄ちゃんだけは助けたい。
「私が守る！　守ってあげる！　私を信じてこっちに来て！」
気がつくと叫んでいた。頭で考えて出た言葉ではなく、心で強く念じたことがそのまま口をついて出てきたのだ。今日は私が翔お兄ちゃんを守ってあげるんだ。心配しなくても大丈夫。私だってやればできるんだから。真実の気持ちを伴った言葉には、計り知れない力がこもっているのかもしれない。翔お兄ちゃんの歩いてくるスピードは少しずつ速くなった。
震える足で波打ち際まで歩み寄り、翔お兄ちゃんは「お前を信じたんだ。信じたからここまで来れた。ありがとな」と照れたように笑った。
「ううん。本当の気持ちだもん」
「俺さっき、お前となら死んだっていいと思ったんだ。ひかるの言葉を聞いて、怖いっていう気持ちより、早くそばに行きたいっていう気持ちが勝ったんだよ」

「私も翔お兄ちゃんが一緒なら死ぬことも怖くないって思った」
「同じ気持ちだったんだな、俺たち」
「うん！　なんたって運命だからね」
オレンジ色の夕日が、まるで宝石を散ばせたようにキラキラと海面を照らす。そっと頬を撫でる風が心地いい。翔お兄ちゃんは後ろからぎゅっと私を抱きしめて耳元でささやいた。
「いつかハワイのビーチで結婚式をやろうな」

疑惑の目

北海道へ移り住んだ直後、中学生だった俺は文房具店へ行き、お小遣いで便箋と封筒を買った。ひかるが喜ぶように、ひよこの絵がついた淡い黄色のレターセットを選んだ。机に向かって鉛筆を持つ。でも、何を書けばいいのかわからなかった。言いたいことはたくさんあるはずなのに、どの言葉を選んでも自分の気持ちを表現しきれない気がした。書き損じの便箋だけが山のように増えていく。結局、封筒は一度も使われることなく、便箋だけがなくなってしまった。

それから一週間くらいたった頃、ダイニングテーブルに座って麦茶を飲んでいると、突然電話が鳴った。

「はい、桜庭です」母が洗濯もののカゴを置いてすぐに受話器を取った。

「あらっ、お久しぶり。東京はまだ暑いでしょう？　こっちはもうだいぶ涼しいわ」

「うん、うん。そうなのよ。大変なの。転勤って嫌だわ、本当に。でも翔太がすぐにこっちの中学に慣れてくれて助かったわ」

また転勤話の愚痴だ。まったく嫌になる。他の奴には俺の話はするなって言ってあるのに。

「ひかるちゃんはどう？」

突然耳に響いてきた“ひかる”という名前。相手はひかるのお母さんだったのか！　受話器を置いたのを確認し、俺は噛みつかんばかりの勢いで声を発した。

「今の電話ってひかるのお母さん？」

「ええ、そうよ」

「ひかる、元気だって？」

「まだ翔太のことが寂しいみたいね。毎晩、電話をかけたいって言っているそうよ」

「かければいいのに」

俺はぼそっと呟いた。
「そうそう、ひかるちゃんに新しい家庭教師の先生を探すんだって」
「新しい先生……か。俺がいなくても平気なのかな」
「八歳の子だもの。あんたの事もすぐに忘れるわよ」
母の何気ない言葉が、心にぐさっと刺さった。
「それに、早く忘れた方がひかるちゃんのためなのよ。いつまでもメソメソしていられないでしょ」
「そうだね」
俺は力なく返事をした。ひかるのためを思えば、母の言うことにも一理ある。北海道と東京は遠すぎる。たとえ「助けて」ってSOSを出されても、すぐに駆けつけることなんてできないだろう。今はそっとしておいた方がいいのかもしれない。
俺にはまだまだやることがある。自信と誇りに満ち溢れたでっかい大人になるんだ。そして、いつかちゃんとした仕事に就いて東京にひかるを迎えに行くんだ。そう心に誓ってからは、手紙も書かず、電話もしなかった。

ふっと鼻腔の奥にバラの強い香りが漂ってきた。
「桜庭先生、昼間からボーっとしちゃって。どうしたんですか。悩みがあるなら聞きますよ。いちおう私、カウンセラーの資格も持っていますから」
声のする方に目をやると、白いシャツにタイトな黒いミニスカートを履いた、保健室の中田先生が真横の席に座っていた。
「悩み？まぁ、生きていれば色々ありますからね」
ハハっと愛想笑いをした。
「お弁当、全然食べてないじゃないですか。お腹空いてないんですか」
「いや、いま食べるところです」
あわてて箸を右手に持ちかえ、一番近くにあったミニトマトをつまむ。だが、つるっと滑ってばかりで上手くいかない。

「先生、不器用なんですね」
中田先生はふっと口元を緩めた。ピンクのマニキュアをした親指と人差し指がトマトをとらえる。そしてゆっくりと緑のへたを取った。
「こうやって手で……」
俺の口元にまでトマトを持ってくる。
「どうぞ」
「……」
「食べないんですか？」
シンと静まり返った印刷室で、中田先生の声が妖艶さを保ったまま響いている。
「そういうのは困ります」
俺はピシっとした語調で断った。
「困るって？」
「生徒が見ているかもしれませんし」
「先生って意外と真面目なんですね」
中田先生はふっと小さく笑った。
「好意を持たれても困るんです」
「私があなたに？」
俺は首を縦に振った。
「ずいぶん自惚れが強いんですね」
挑戦的な目つきで、長い脚を組み変えながら中田先生は言った。
「先生ってイマドキの草食系男子だと思ってたけど、実は生徒思いで教育熱心で……。あぁ、感心しちゃうな」
「いや、別にそんなことは……」
俺は逃げるように素早く立ちあがり、資料が無造作に積まれた壁側の棚によしかかった。弁当なんて食べられるような雰囲気ではない。
「クラス全員じゃなくて、一人の生徒にって意味で言ったんですよ」
中田先生は鋭い目のまま、口元だけ動かしてふふっと笑う。何か

確信を持ったような言い方に恐怖を覚えた。
「理科準備室に生徒を呼び出して……どんなコトをしてるんですか？」
「何もしていませんよ」
背中から汗がじわじわと滲み出てくる。
「ふーん。何もやましいことはしていない？」
「勉強を、生物を教えているだけですよ」
「禁断の関係が明るみになっちゃうと大変ですよねぇ。ま、あなたはクビになるだけでそのままサヨナラしちゃえば済む話だけど。あの子は傷つくでしょうね。卒業までずっとクラス中から、いいえ、学校中からそういう目で見られて。先生を誘惑したいやらしい子っていうレッテルを貼られるの」
「……」
中田先生は椅子から立ち上がった。そして俺のすぐ前まで来ると、ネクタイに手をかけてゆっくりと緩め始めた。
「でも安心して。学校でこの関係を知っているのはあなたたちと私の三人だけだから」
「渡瀬と俺は何の関係もないんです。誤解ですよ」
必死に冷静を装い、ワイシャツのボタンを外そうとする手を力強く振り払った。

普通、結婚の約束をした恋人同士と言えば、堂々とデートをしたり、指輪を交換したり、お互いの親に紹介しあったりするのかもしれない。だけど、ひかると俺は生徒と教師。禁断の関係を守るためには、絶対に周りに知られてはいけなかったんだ。

紫のチューリップ

「あっ！」
声を上げるのと同時に掃除用のモップが頭上に降ってきた。しかも、その拍子に滑って尻もちをついてしまった。
「渡瀬さん、大丈夫？」
クラスの女子が数人駆け寄ってくる。
「うん、平気」
私はうっすらと愛想笑いを浮かべた。
「呼んでくれれば取ってあげるのに。小さいんだから無理しちゃダメだって」
クラス一美人と評判の彩夏が、年上ぶった口ぶりで立ったまま目線だけを落として口を開いた。彩夏は１６５ｃｍかそれ以上の長身で、手足もすらっと長い。修学旅行ではモデルのような着こなしをして、みんなから注目を浴びていた。身長が１５１ｃｍしかない私は、体育の時間、背の順番で前から二番目に並ばされている。これは小学校時代から変わっていない。背の低さは、私の中でコンプレックスのひとつだった。
掃除当番はいつも憂鬱（ゆううつ）で、ため息がでてしまう。私が属している二班の女子たち五人は、キャッキャと騒ぎながら楽しそうに床を掃いたり、机を並べたりしている。クラス内の噂話やアイドルの話、恋愛話を語らせれば、一日中眠らずに話し続けるんじゃないかと思うくらい、本当によく喋るのだ。一番後ろの机にリーダー格の彩夏が座り、周りをほかの四人が取り囲んだ。
「ねぇ、やっぱうちの担任ってイケメンだよねー」
彩夏が大声で同調を求める。取り巻き女子は、頷きながら「ホントだよね」「カッコよすぎだし」と、口々に翔お兄ちゃんを褒める言葉を並べたてた。
「背高いし、細いのに筋肉ありそうだし、声はセクシーだし。それ

にちょっとSっぽい話し方もイイ感じじゃない？」
「わかる、わかる！」と女子たちが一斉に大声を上げた。
「目がいいよね。ぱっちり二重とか羨ましいんだけど」
「あたしは高い鼻が好きー」
「唇も下だけふっくらしててセクシーでしょ。あと歯並びもいいし」
「普通に芸能人とかモデルとかできるよね、あのレベルなら」
全員が「うんうん」と首を縦に振った。
「キスしてみたくない？」彩夏が女子四人衆に向かって畳みかける。
「したーい！」
全員が声高に叫んだ。女子たちは一様に興奮しているようで、いつもよりだいぶ大きな声で話している。いや、話しているというよりは叫んでいるといったほうが適切かもしれない。
「お前ら！」
突然、背後から大きな声が飛んできた。振り返ってみると、翔お兄ちゃんが仁王立ちで彩夏たちを睨んでいた。
「掃除はどうした！」
声と表情からかなり怒っているのが読み取れる。注意する時の口調はいつも厳しいが、こんなに声を荒げる姿は初めて見た。実際に、彩夏たちもかなり驚いたようで気まずそうに五人で目配せをしていた。そして、黙ったままそそくさと掃除を再開させた。
「渡瀬、ちょっといいか？」
さっきとは一転して、いつもの調子に戻った声で私を呼ぶ。
「今日は理科準備室には来るな。代わりにどんぐり公園に来い。六時でいいか？」と、先生は小さな声で囁くように言った。私は近くに誰もいないのを確認してから、コクっと頷いた。
先生が出ていった直後、緊張が解けたようにさっきの女子たちがクスクスと笑い声を立て始めた。
「マジで怒ってなかった？」
「ヤバかったよねー」
「でもさ、なんかSっ気全開って感じだったよね」

「そうそう！　怒ってもカッコイイ、みたいな」
彩夏たちの黄色い声にイラっとしながらも、私の心は浮き足立っていた。どんぐり公園は思い出の場所だから。先生と再会し、初めてのキスをささげた特別な場所だ。

腕時計をじっと見つめる。あと十分ほどで約束の時間になる。私は三十分も前から公園にいた。夕焼けを背にしてブランコに乗り足をぶらぶらさせてみたり、一人でシーソーに乗って小さく何度かジャンプしてみたり。最後に公園で遊んだのは小学生の頃だったかな。中学校に入ってからは来ることもなかった。遊具がとても小さく感じるのは、自分が成長したせいだろうか。滑り台に上ってみたが、お尻が大きすぎるのかすっぽり入らない。身長は相変わらず低い方だけど、ここで遊んでいた頃に比べたら外見がだいぶ変化したように思う。小さめの鼻や二重のぱっちりした目、小ぶりな唇はあまり変わらないが、体つきがだいぶ女らしくなった。
「時がたつのって早いな」
八歳の頃の自分を思い出しながら、私はぼそっとひとり言を呟いた。

ブランコに腰をおろして少し揺らしていたら、突然目の前に紫色の物体が現れた。翔お兄ちゃんの手にはきれいにラッピングされたチューリップの花束が握られている。
「はい、ひかるに」
短く言うと、照れたように口角を上げて微笑んだ。
「紫色のチューリップ？」
「そう」
「私に？　どうして？　本当にもらっていいの？」
「いらないのか？　じゃ、ほかの人にあげちゃおう」
少しイジワルな言い方で、花束を上にひょいっと持ち上げる。私はあわてて「いる！」と言い、小さく跳び上がって取り返した。
「でも、なんでチューリップなの？」

「さぁね、なんででしょう？　いちおう俺なりに悩んでこれにしたんだけど。気になるなら、あとで調べてみたらいいよ」
「調べるって何を？」
「ネットでググったら出てくるから。これはお前の宿題な」
「えー、また宿題？」
翔お兄ちゃんは私の頭を軽くぽんぽんと撫でた。公園にはあいかわらず誰もいない。物音ひとつない静寂の中で、翔お兄ちゃんは私の隣のブランコに座った。錆ついた鎖がキーキーと耳障りな音を立てている。
「これから理科準備室で会うのはよそう」
「え？　どうして？」
「もう二カ月になるし、だいぶわかるようになっただろ？　テストでも百点目指せる実力はついたはずだ」
「百点？」
思わずぷっと吹き出してしまった。生物なんて高校に入ってからずっと赤点なのに。
「俺が一生懸命教えたからな。感謝しろよー」
翔お兄ちゃんの右手が伸びてきて、私のほっぺたを軽くつねった。そして、そのままちょっと左右に動かして「やわらけー」と満足そうに呟く。
「ね、お礼に何してほしい？」
「なんかくれんの？」
翔お兄ちゃんは、いやに嬉しそうな顔をした。
「そういえば、お給料みたいなの一回もあげてなかったなって」
「じゃ、時給三千円でどう？毎日一時間は教えてたからざっと計算して……」
空を見ながら指を折り、翔お兄ちゃんはぶつぶつ数字を言い始めた。
「もう！　そんなの払えない。お小遣い全部合わせたって足りないよ」

「ひかる、お前ゲーセン好きだったよな？」
翔お兄ちゃんは唐突に話を変えた。
「ＵＦＯキャッチャーでぬいぐるみをゲットして来い。それがお前からのお礼ってことで」
「え？　ぬいぐるみが欲しいの？」
「そういうこと。今から取りに行こうよ」
何がなんだかわからないまま、私は翔お兄ちゃんの車でゲームセンターへ向かうことになった。

カーテンの奥で

車を運転し始めてもうすぐ四十分になる。
「どうしてこんなに遠くまで来たの？」と言い、ひかるは不思議そうな顔を浮かべた。
「ここまで運転すれば、絶対うちの生徒に会うこともないだろ」
「あ、そっか！」
妙に納得をしたように縦に首を数回振った。
「次はこの曲にしよっと。ＣＤ変えるよ？」
助手席に座るひかるが、鼻歌まじりに話す。ダッシュボードを開けて、中のＣＤを何枚か取り出した。そして、「これはうまく歌えないから……」とか「こっちの方が自信あるかも」などとつぶやきながら、ゆっくり選んでいる。
歌詞カードを見ながら１人カラオケを楽しむひかる。たまに音を外しても気にせず熱唱する姿が、なんとも言えなく可愛い。こんなに小さな体から、随分と大きな声が出るもんだと感心してしまう。そういえば昔から、ひかるは楽しい時に身振りや手振り、声までが大きくなるクセがあった。時間がたっても、こうして変わらない姿を見られることに幸福感を感じた。
「ひかる、随分楽しそうだな」
「歌うのって気持ちよくない？　たのしーぃ！」
ひかるは、屈託のない笑顔を見せる。俺もつられて、無性にはしゃぎたい気分になった。
「いっしょに歌おっかな」
ひかるの顔がぱっと明るくなる。
「ホント？　翔お兄ちゃんが歌うなんて八歳の時以来だね。じゃ、この曲にしよ！」
慣れた手つきでＣＤを替えた。俺は普段カラオケには行かない。そのせいか歌詞にはイマイチ自信がなく……。「ララ」とごまか

すたびに、ひかるが笑いながら助け船を出した。ゲームセンターに着くまでの間、車内はカラオケルームと化していた。

ジーという大きな音を響かせて自動ドアが開く。ゲームセンター特有の騒音がせきを切ったように溢れ出した。人工的な機械音に混じって、甲高いアニメキャラが喋っているような声も耳につく。ひかるは店内をきょろきょろと見回してから、プリクラのマシンを指さして「行こ！」と俺の手を握った。スタスタと歩き、二十台くらいある中から白とピンクの派手なマシンを選び、手前で止まった。四百円と書いてあるのを見て、俺は百円玉硬貨四枚をさっと差し出した。

「翔お兄ちゃんのおごり？」

目の前でしゃがんでいるひかるが、俺の顔を見上げる。

「ま、いちおう年上だしな」

中に入ってビニールのカーテンで仕切ると、にわかにふたりだけの空間になった。こんなに騒々しい場所でも、こうしてひかるとふたりっきりになると心が穏やかになれる。「ポーズを考えなきゃ」と呟いてひかるは俺の腕に自分の腕をからめてきた。「翔お兄ちゃんと撮るのは初めてだもん、ラブラブにしたい」と言いながらも、身長に三十センチほど差があるせいか、うまくポーズが取れないようだ。「あぁでもない」「こうでもない」と苦心している。

ひかるは、後ろに立っていた俺の方をふっと見て「どんな風に撮りたい？」と聞いた。

「そうだな……」

俺は、ひかるの背中と膝裏のあたりを持って横向きにひょいと持ち上げた。いわゆる、“お姫様抱っこ”というやつだ。体重は恐らく四十五キロ弱くらいしかないのだろう。軽々と持ち上げられた。ひかるは頬をピンクに染めて俺を見つめる。俺もひかるを見つめていた。心臓がドキドキと高鳴り、脈拍数が跳ね上がる。

シンと静まりかえった空間に、カシャという音だけが響いた。ふ

わりとひかるを下におろす。着地を確認し、そっと親指でひかるの下唇をなぞった。顔を赤くしてうつむく姿が愛おしい。ひかるの腰に手を当て、俺の方にぐいっと体を引き寄せた。そして、静かにゆっくりと唇を重ねた。甘い、甘い時間。体中の感覚が、唇の一点に集中しているような錯覚を起こさせる。

そのとき突如、プリクラのマシンが“早くしろ”とでも言いたげに勝手に撮影を始めた。ひとりでに「ハイチーズ」とか「3、2、1」などと号令をかけている。

「これってまだ撮れんの？」

「うん、あと何枚か」

「じゃ、俺の言うとおりにしろ。ポーズ考えたから」

「いいけど……」

ポカンとしているひかるを、背後からぎゅっと強く抱きしめて――カシャ。そのまま、後ろに立ってひかるの柔らかいほっぺたを指でつまんで――カシャ。数分後、プリクラが出来上がった。ひかるは「すごい！　すごい！」と興奮して喜んでいる。俺は今の幸せを噛みしめるように、カーテンの中でひかるの手をぎゅっと握った。そして、前髪をふわっとかき上げ、額に優しくキスをした。

指輪（前書き）

昨日、本小説「永遠(とわ)の愛」をお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいました＾＾本当にありがとうございます！感謝です♪

指輪

プリクラマシンを離れ、俺たちは手をつないだまま階段を一歩一歩上がっていった。ひかるの手の平から伝わってくる温かいぬくもりが心を和ませる。このまま時が止まってしまえばいいのにと思った。

硬貨を入れて、ＵＦＯキャッチャーの前にひかるを立たせた。腕は悪くない。でも、肝心なところでつかみかけたぬいぐるみを落としてしまう。何度も引っかかりそうになっては、するっと抜ける。八回ほどトライしたところで、ひかるは悔しそうにガンっとプラスチックの台を叩いた。「出てこないかなー」と言いながら、景品が出てくる穴をのぞきこむ。そして、泣きそうな顔で「取れないよ」と呟き、その場にしゃがみこんでしまった。

「……ったく、しょうがねぇな」

俺はレバーを握った。ウィーン――ガコン――。フレンチブルドックらしき潰れた顔のぬいぐるみが出てきた。全長七ｃｍくらいで、頭と鼻の部分が異常に大きく、胴体は短く小さい。頭にはストラップらしきものもついている。

「翔お兄ちゃん、すっごい！　上手すぎるよ！」

パチパチと手を叩きながら横でひかるが大きな声を出した。

「お前もやってみろ。教えてやるから」

ひかるの手をレバーに置く。上から、自分の手をぴったり重ね、そのまま誘導した。ウィーン――ガコン――。

「うっそ！　一回で取れるなんてすごい！」

ひかるは大きな目をきらきらと輝かせて、本当に嬉しそうな顔をする。

「二つあるから、翔お兄ちゃんとおそろいだね！　いろんな犬種のぬいぐるみがあるのに、フレンチブルが連続で取れるなんて不思議っ！」

まるで子どものように小躍りして喜ぶ姿を見ていると、あの頃――そう、八歳の頃のひかるが戻ってきたような気がした。
「これ、はい」
さっき取ったぬいぐるみをひかるが両方差し出す。
「いらないのか？」と聞くと、ひかるは首をぶんぶんと大きく横に振った。
「ちがう、本当は欲しいよ。でも、ＵＦＯキャッチャーで取るぬいぐるみはお礼って言ったでしょ？　だから、これは翔お兄ちゃんの」
「でも、俺が二個持っててもしょうがないし。片方はお前が持ってろ」
「え？　いいの？　本当に？」
ひかるの顔がぱっと明るくなる。昔からぬいぐるみ好きなところは変わってないんだな……。あの頃も俺が取ってきたＵＦＯキャッチャーの景品を、胸に抱きしめて大事に飾っていた。
車に戻り、ひかるを助手席に乗せる。そして、俺は、同じシリーズのチワワのぬいぐるみをポケットから取り出した。
「これもお前にやる」
「チワワ！　飼いたいって言ってたの覚えててくれたの？」
ひかるは目を細めてぬいぐるみを撫でた。
「あれ？　このチワワ、なんか縫い目が変」
やっぱりすぐに気づかれてしまった。ひかるは後頭部の縫い目に沿って指をあてている。本当はあとで驚かせるつもりだったけど、ここでバレちゃってもいいか……。
「そこ、開けてみて」
「開けるって、糸をほどいていいってこと？」
「そう」
俺は小さなハサミを取り出して渡した。ひかるは理解できないといった様子で、ゆっくりと糸を外す。かなり緩く縫ってあるせいか、簡単に中綿が露出した。予想通り、ひかるの反応はいつもストレートだ。顔に大きな疑問符がくっついている。

「中から指輪が出てきたけど？　なんで……？」
少し考えてから、「もしかして、翔お兄ちゃんが……？」と言い、ゆっくり顔を上げた。俺は黙って頷いた。
昨日の夜も俺はここに来て、ＵＦＯキャッチャーでチワワを取った。そして後頭部の部分をほどいて、買っておいた指輪を入れ、ゆるく糸で縫いつけた。裁縫は、中学時代に家庭科でボタンの付け方を習って以来だった。やり方がわからなかったから、ネットで調べながら一時間くらいかけて仕上げたのだ。
驚きを隠せないといった表情で目をパチパチさせるひかるから、俺はそっとチワワを取り、中の指輪を抜いた。そして、ひかるの左手を取って甲を上にさせると、薬指に指輪をはめた。

受け入れがたい現実（前書き）

本日、一昨日に引き続き本小説「永遠(とわ)の愛」をお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいました♪
ご愛読いただき、本当に嬉しい限りです！ありがとうございます。
深く感謝いたします＾＾
ご訪問いただいた皆さまからの応援が、執筆の大きな原動力となります。これからもよろしくお願いいたします！

受け入れがたい現実

翔お兄ちゃんがはめてくれた指輪は、その存在を誇示するかのように夜の闇の中でキラキラと輝きを放っている。ハート型にかたどられた小さなダイヤモンドが、ふたつ寄りそうようにして並んでいる。まるで愛し合う恋人同士のように。左腕を少し伸ばしてフロントミラーの方にかざし、少し左右に揺らしてみる。サイズまでぴったりの指輪をプレゼントしてくれるなんて……。あまりの嬉しさに、目の前が涙でにじむ。

「どうした？　泣いているのか？」

心配そうな声で、翔お兄ちゃんは私の頬に手を当てた。そして、優しい手つきで下まぶたから落ちる涙の跡をぬぐう。

「サイズ、ぴったりだけど」

「ん？」

「どうしてわかったの？」

「お前の小さい手を想像しながら適当に選んだんだよ」

「えー！　絶対うそ。密かに測ったんでしょ」

「いやいや、違うって。ひかるの指ならこれぐらいだろうって店で考えて買ったんだって」

そういえばさっき指輪をはめてくれた時、翔お兄ちゃんの指も少し震えていたような気がした。これって、翔お兄ちゃんもドキドキしてたってこと？　こんな風に、誰かに指輪を贈ったのは初めてだったのかな。

「ねぇ翔お兄ちゃん、今日ってなんか特別な日だっけ？」

「なんで？」

「どうしてこんなに優しくしてくれるのかなって。さっきからプレゼントもらってばっかだし」

「来週、お前の誕生日だろ」

何年もの歳月が流れても、誕生日を覚えててくれていたことがす

ごく嬉しかった。
「でもその日は一緒にいられない。だから今日、前祝いをしたいと思って」と、翔お兄ちゃんは申し訳なさそうに言った。
「誕生日なんて気にしないでいいよ。用事があるの？」
「来週の月曜からバスケ部の顧問を引き継ぐことになった」
「え？　急にどうして？」
「川元先生がヘルニアで入院することになっただろ？　でも、まだ新しい顧問が決まってなくて、俺にお鉢が回ってきたんだよ」
「そうなんだ……」
「ごめんな。しばらく忙しくなるから、放課後には会えなくなる」
いつまで待てばいいのかわからないまま会えなくなることが、すごく寂しい。翔お兄ちゃんとの間に大きな距離ができてしまうような、なんとも言えない嫌な感じがじわっと胸に広がる。
「補習もできないんだよね？」
「あぁ、そうだろうな」
私は自分の意志とは逆に、「がんばってね」と無理に笑顔を作った。悲しそうな顔を浮かべる翔お兄ちゃんを見ていると、今はそれしか言えなかった。

翔お兄ちゃんの言っていたことは、すぐに現実になった。月曜日の放課後、理科準備室には誰もいなかった。「もしかしたら」という淡い期待は、あっさりと崩さ去る。翌日の火曜日は私の誕生日だった。でも予告された通り、翔お兄ちゃんの姿を見ることができたのは、ホームルームと生物の授業中だけだった。そして、翌週も、翌々週も状況は変わらなかった。胸がぎゅっと締めつけられる。呼吸が苦しい。暗い穴の中に突き落とされ、這い上がることができない――そんな、救いがたいような気持ちになっていた。私はこの状況のままで、一体あと何日耐えられるんだろう。もらった指輪をぎゅっとにぎる。
「翔お兄ちゃん……」

十八年前の秘密

ひんやりと冷たい指が、私の前髪をゆっくりとかき分ける。そして、閉じたまぶた、鼻筋、上唇、下唇の順に指が這っていく。耳元で「ひかる」と甘い声がしたような気がした。翔お兄ちゃん？　私を迎えに来たの？　だけど、そう思った瞬間に触れていた指が突然離れていった。待って、逃げないで！　私も一緒に連れて行って！

お願いだから！去っていく翔お兄ちゃんらしき後ろ姿を、必死で追いかける。でも足が思うように動かない。走っても走っても、距離は縮まってくれない。私を置いて行かないで！　止まって！

急に目の前がまぶしくなる。濃いブラウンの遮光カーテンの隙間から朝日が差し込み、窓から入ってきたそよ風が頬を撫でる。ふと横に目をやると、時計の針は朝の五時すぎを指していた。

「ひかる、大丈夫？　顔色悪いけど」

お母さんが木製の食卓テーブルで細長いグラスに牛乳を注ぎながら、私の顔を見る。

「別に」

「じゃあどうして目の下にクマがあるの。寝れてないんでしょ？ちゃんとお母さんには本当のことを言いなさい」

「毎日毎日ケンカばっかりされてうるさいし。寝れるわけないじゃん」

下を向いたまま、キツイ口調で言い放つ。お母さんは、気まずそうな顔をして「ごめんね」と呟いた。

「謝ってばっかでマジにウザイ。もう話しかけないで」

お母さんの存在を感じるだけで、ムカムカして吐き気がしてくる。声も聞きたくなくて、耳をふさいだ。

昨晩、お風呂あがりに水を飲もうとリビングへ行ったら、金切り声が聞こえてきた。何事かと思いそっとドアの隙間から覗くと、お

母さんの困惑した顔が見えた。
「あなた！　そんな勝手なことばかり言わないでちょうだい」
「俺はもう我慢の限界だ！　離婚だ、離婚。」
「ちょっと！　一方的に決めないでって何度も言ってるでしょ！」
「とにかく三日以内に離婚届に判を押すんだ、いいな？」
「ひどいじゃない！　ひかるだってまだ高校生なのに！」
私の名前が出た瞬間、お父さんは深いため息をついた。
「ひかる？　ふざけたことを言うなよ。あいつは本当に俺の子なのか？」
全身からサーっと血の気が引くのを感じる。ドアノブに掛けていた手から一気に力が抜け、私はその場に崩れ落ちた。目の前で繰り広げられている光景を、まるで誰かの夢を見ているかのように感じる。聞こえてくる言葉にも現実感が沸いてこない。何が本当で何がウソなのか――。まったくわからなくなっていた。
「妊娠さえしなければ俺はお前とは結婚してなかったんだ。俺はやり直したいんだよ！　この気持ちがわかるか？」
「あなた！　なんてことを……」
「お前に騙されたんだ！」
「私だって妊娠しなかったら、今ごろ夢叶って女優になれていたかもしれないのに！　こっちばかり責めないで！」
お母さんのすすり泣く声が聞こえる。
「お前、昔は男によくモテてたよな。なんたって銀座でナンバーワンを争うホステスだったんだからな」と、お父さんは吐き捨てるように言った。
半狂乱になったお母さんは何度も泣き叫ぶ。そして、お父さんの足にすがりつき、「私を捨てないで」とわめいた。まるで地獄絵図を見ているようだった。思考が完全に停止し、全身がぶるぶると震え出す。
お父さんが週に何度も家に帰って来ないのは私のせいだったの？
今までに一度も頭を撫でてもらったことがないのも、テストで百

点を取った時に褒めてもらえなかったのも、女が原因でよく夫婦喧嘩をしていたのも全部つながっていたの？普通の家庭に育ったと信じて疑わなかったこの十八年間。でも、真実はそうじゃなかった。私はいらない子だったんだ。誰からも祝福されずに、誰が父親かもわからずに生まれた子だったんだ。

噂（うわさ）

朦朧（もうろう）とする意識の中、鼻の奥にバラの香りがツンと漂ってきた。
うっすらと目を開けると、白衣を着た人影が立っているのが見えた。
「渡瀬さん、気がついた？」
聞き覚えのある艶っぽい声。
「倒れて保健室へ運ばれたのよ？　覚えてる？」
中田先生だ。白衣の前ボタンは閉めずに、薄いピンクのブラウスにグレーのボックスプリーツのミニスカートを履いている。
「すいません、私覚えてなくて」
「貧血だと思うけど。朝ご飯食べてきてないでしょ？」
「今日はちょっと時間がなくて……」
中田先生は「栄養失調かもしれないね」と言って、コンビニのロゴが印刷してある、レタスとトマト、ツナなどが挟まったサンドイッチを差し出した。
「これ、食べなさい」
「えっ、いいです。大丈夫です」
「ダメよ。何か食べないと力が出ないでしょ」
中田先生は、無理やりサンドイッチを私の手に握らせた。
「前よりもずいぶん痩せたように見えるけど。何か悩みでもあるの？」
視線を下に向けたまま、私は小さく首を横に振った。
「ダイエットしてるんじゃないの？」
中田先生は、図星でしょという顔をしてニヤリと笑う。
「はい。まぁそんなとこです」
私は少し口角を上げて笑い、適当にごまかした。
「ねぇ、渡瀬さんはどの科目が一番苦手？」
「え？　苦手な科目ですか？」
突然話題が変わったので、困惑して数秒黙ってしまった。すると、

中田先生が答えをせっつくように早口で「生物が苦手なの？」と聞いてきた。
「はい。でも生物だけじゃなくてどの科目も苦手です」
「そう」
予想していた答えが得られなかったせいか中田先生は不服そうな顔を浮かべた。
「桜庭先生、クラスでも人気あるでしょう？」
「……」
突然、翔お兄ちゃんの話を振られて心臓が一気に跳ね上がった。ドキドキと脈拍が速くなる。
「かっこいいよね。年も若いし、みんなの憧れの的じゃない？」
「そう……かもしれないですね」
慎重に答えを選ばなくてはいけないと思えれば思うほど、語尾が口ごもってしまう。
「渡瀬さんはどう思うの？　桜庭先生のこと」
「ど、どうって……特に何も」
心臓が音を立てて、血液をドバっと頭に巡らせている。このままだと頭部だけのぼせてしまいそうだ。
「私ね、気になる噂を聞いちゃったの」
「噂、ですか？」
「そう。桜庭先生ってうちの生徒と付き合っているんだって」
中田先生が、鋭い目つきで私を見た。恐怖に手が震える。全身から冷や汗が流れ出し、血圧が急上昇していくのを感じた。顔を見られないように下を向き、「そんな噂、知りませんでした」と答えるのが精いっぱいだった。必死に隠したつもりだったけど、声が震えてしまう。
「あ、でもね、もう別れたんだって」
「別れた……？」
中田先生の声が頭の中で何度もこだまする。
もう別れたんだって

もう別れたんだって
もう別れたんだって
もう別れたんだって
もう別れたんだって

どういう意味？　翔お兄ちゃんと私が別れたってこと？　翔お兄ちゃんが告げた「バスケ部の顧問」は言い訳だったの？　私と別れるつもりだったの？

まさかそんな……。信じられないし、信じたくない。絶対に違う、違うに決まってるんだ。胸が苦しくて、息ができなくて、首にかけている指輪をぎゅっと握る。

「翔お兄ちゃん、助けて！」

私は、心の中で必死に叫び続けるしかなかった。

つかの間の幸せ

五時間目は生物の授業だ。始業チャイムが鳴る。席に着くと、すぐに日直が号令をかけた。

「起立、礼」

ちらっと前の方を見ると、クラスの女子達がかったるそうに体を斜めに曲げている。

「着席」

号令の声が、ものすごく遠い場所で発せられたような気がした。体がふわりと浮く。目が回って吐き気がする。足がふらふらしてこれ以上立っていられない。

白衣を着た翔お兄ちゃんが、集まってくる女子たちをかき分けて私のもとに走ってくるのが見えた。そして、血相を変えて「渡瀬！渡瀬！」と何度も私の名前を呼んでいる。

幸せ――。今はただの生徒じゃないんだね。私、また翔お兄ちゃんの特別な存在になれたんだね。私だけを見てくれているんだね。

「渡瀬！　しっかりしろ！」

耳に響いてくる翔お兄ちゃんの心配そうな声。私の背中を持ち上げ、ひょいとお姫様抱っこをしてくれた。廊下を走り、三階から一階まで一気に階段を駆け抜ける。

「ひかる！　お願いだから無事でいてくれ！」

先生の荒い息づかいが腕からも伝わってくる。

「先生、ごめんね」

涙が流れた。

「なんで謝るんだよ。ひかるは悪くない。悪いのは俺なんだ」

翔お兄ちゃんは勢いよく保健室のドアを開けた。

「中田先生！　うちの生徒が倒れたんです！」

中はシンと静まり返っていた。どうやら、部屋には誰もいないらしい。

「ひかる、ごめんな。具合悪いんだよな。ここで寝て待ってろよ、いいな？」
翔お兄ちゃんは慌てた様子で、中田先生を探しに行こうとした。でも、私はとっさに翔お兄ちゃんの腕にしがみついた。そして、力の限り引っ張った。
「お願いだから行かないで。ここにいて。ひかるのそばにいて欲しいの」
「ひかる……。お前、辛かったんだな」
翔お兄ちゃんの目はみるみるうちに真っ赤になり、涙がこぼれおちた。私の手に自分の手を重ねて強く握り、泣きながら「ごめんな」と何度も繰り返した。

暴かれた本性

ドアの開く音がして、中田先生が白衣姿で現れた。
「あら？　桜庭先生じゃないの」
「うちの生徒が授業中に倒れてしまって……」と今にも泣き出しそうな声で翔お兄ちゃんが口を開いた。
「先生は授業があるんでしょ、早く行って。私に任せて」
「でも……」
「渡瀬さんは今朝も倒れたのよ。また貧血を起こしたのね」
中田先生は少し面倒臭そうな顔で、ちらっと私の方を見た。
「そうだったんですか」
「ここで少し休めば回復するはずだから。とにかく先生は早く授業に戻った方がいいんじゃない？　それとも渡瀬さんがそんなに心配？」
冷たい目線のまま、翔お兄ちゃんをドアの方まで追いたてる。中田先生の登場で、私の願いはあっさりと打ち砕かれてしまった。
「渡瀬、五時間目が終わったらここに来るからな。無理はするなよ。ちゃんと寝てるんだぞ」
翔お兄ちゃんは、ひどく心配そうな顔をしながら名残惜しそうに去って行った。ドアが閉まったのを確認し、中田先生がふーっとため息をつく。そして、「体が弱いのね」と私の方を一瞥(いちべつ)した。
「ごめんなさい。また倒れるとは思ってなくて」
「今日はもう早退しなさい。今、お母さんに電話をかけるから」
「ダメです！　いいんです、一人で帰れますから」
「そう？　そんなに嫌なの？　すごい顔してるけど。親と何かあった？」
中田先生の観察力は相変わらず鋭い。表情や言動から、心の中を簡単に読み取ってしまう。頭が良くて綺麗な人だけど、この人には関わりたくない。さっきの態度からも翔お兄ちゃんに好意を持って

いるように感じたし、何よりも“噂”を知っているのが怖い。それに、中田先生や彩夏のような長身のスレンダー美人にはコンプレックスを感じてしまう。私は童顔で背も小さいせいか、幼く見える。男なら誰しも、あんなグラマーな美人に言い寄られたらイチコロなんだろうな。翔お兄ちゃんはいったい私のどこを好きになってくれたんだろう。こんな風に考えているだけで、言い知れない不安が胸を締めつけた。

「大丈夫、大丈夫」

呪文のように自分に言い聞かせて、首にかけている指輪をぎゅっと握った。

「渡瀬さん？」

不審な顔で、中田先生はじっと私を見ていた。

「何を握っているの？」

「いえ、何でもないんです」

慌てて、セーラー服の下に指輪を通したネックレスをしまう。

「そのネックレス、いつもつけてるね。大事なものなの？」

「はい」

「ふぅん。誰かの形見？　あ、違うか。彼氏からのプレゼントでしょ？」

「違います。自分で買ったんです」

顔色を変えないように注意しながら、さらっとウソをついた。

「そう。じゃあ見せてよ？　私も見たいなー、どんなネックレスなの？」

興味深々といった顔つきで、私の横たわるベッドのすぐそばまで歩いてきた。

「イヤです！　やめてください。」

中田先生の手が私の首周りに触れた。とっさに強く体をねじる。

その瞬間、パシン！　と大きな音が響いた。そして直後に、頬に鋭い痛みが走った。一瞬のうちに起きた出来事だった。私、叩かれたの？どうして……？わけがわからずにポカンとしていたら、中田

先生がヒステリックに叫んだ。
「なんて生意気な子なの！」
般若のような顔で上から私を睨みつけている。そして「これ以上私を怒らせないで！」と言い放ち、ドアを閉めて出て行った。
一人になって、やっと状況が飲み込めた。今までピーンと張りつめていた空気が、少し柔らかくなったような気がする。“怖い”という感情が波のように押し寄せ、とめどなく涙があふれてくる。今日はもうダメだ。精神的にボロボロになった自分がとても惨めで、辛くて、心が張り裂けそうだった。
さっき叩かれた拍子に床に落ちてしまった自分のカバンを拾う。散乱した物を集めて、手早く中にしまった。ベッドの下をのぞくと、銀色に光るものが目に入った。鍵だ。何度も返そうと思ったけどできなかった、お守りのようにずっと持ち続けていた合鍵。
決めた。これから翔お兄ちゃんの家に行こう。

待ち伏せ（前書き）

本日、本小説「永遠(とわ)の愛」をお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいました♪とっても嬉しくてテンション上がってます！　どうもありがとうございます＾＾
どうぞこれからもよろしくお願いいたします♪

待ち伏せ

「おじゃまします」

内緒で合鍵を使うのは空き巣に入るような気分で後ろめたい。でも、今日はどうしても翔お兄ちゃんと一緒にいたかった。そのまま泊めてもらおうと思い、駅前のコンビニで歯ブラシまで買ってきたのだ。玄関で茶色のローファーを脱いで、さっと向きを揃えた。翔お兄ちゃんはきっと今頃バスケ部の練習についているはずだから、帰宅するのは早くても午後七時過ぎだろう。ドアを開けると、すぐ右側に作り付けの白い靴箱、左側に重厚感のある陶器製の黒い傘立てが置いてあった。傘立てには、紺色の傘とコンビニで買ったようなビニールの傘が一本ずつ刺さっている。静寂の中、カチャとドアの開く音が響き渡った。リビングルームはシンプルで、物があまりない。モノトーンで統一された室内は、どこかのオシャレなホテルの一室のように感じられる。黒い革張りの三人掛けソファの下には、毛が長くてふさふさの真っ白なカーペットの上が敷かれている。この上にゴロンと寝転がるだけで、ぐっすり安眠できそうな気がした。

ゲージの中で、チワワのヒッキーナが元気よくキャンと吠えた。

「ここから出して！」と訴えかけるような目で私を見ている。勝手に出していいものか迷ったが、つぶらな瞳で見つめられると居ても立っても居られない気持ちになった。そっと抱き上げてソファの横に座らせた。そして、膝の上に乗せ、何度も体を撫ぜる。最初はちょっと震えていたヒッキーナも、今は安心しきって私に体を委ねてくる。なんてかわいいんだろう。

「私のこと、必要としてくれてるんだね？」自分を頼ってくれる存在のありがたさを噛みしめた。

ヒッキーナは腕の中からピョンと飛び出してキッチンの方へ走って行った。あわてて後を追いかけると、大きなシルバーの冷蔵庫が目に入った。翔お兄ちゃんは一人暮らしなのに家電や家具は大きめ

サイズをそろえるのが好きなようだ。そっと扉を開けると、すぐ目の前にグラスに入った飲みかけの牛乳があった。喉は乾いていなかったが、残っていた分をくいっと飲みほした。

「間接キスだね、翔お兄ちゃん」

私は小さく言って、腕に抱いているヒッキーナの頭を撫ぜる。寂しさを紛らわすために犬に話しかけると、気持ちがスっと楽になった。

「ねぇ、翔お兄ちゃんを驚かせちゃおうか？」

ヒッキーナは、わけがわからないといった様子で、自分の小さな手をペロペロ舐め続けている。私は翔お兄ちゃんが帰ってくるまで、ソファの陰に隠れることにした。ここなら玄関から入ってきてもすぐには気づかないだろう。そっと近づいて、後ろから「だーれだ！」と言ってみようかな。きっとびっくりして飛びあがるだろうな。翔お兄ちゃんの驚く顔を想像しただけで、胸がほわっと温かくなり、顔がほころんだ。

ガチャンと鍵を回す音が聞こえる。急にパッと視界が明るくなった。どうやら、ソファの陰に隠れている間にウトウトしてしまったらしい。さっきまで薄暗かったリビングルームにオレンジ色の照明がついた。私は高揚する気持ちを抑えながら、すっと立ちあがった。

目の前には、スーツを着た男と肌色のストッキングを穿いた足を大胆に投げ出す女の姿があった。白いカーペットの上で、女が仰向けになった男に馬乗りになってキスをした。目の前で繰り広げられる光景に、私の体は硬直して動かなくなった。あまりのショックに声も出せなかった。あの人たちはいったい誰……？

「おいっ、やめろ！」

大きな声がして、男が女を突き飛ばした。

「なによ、その気だったくせに」

突き飛ばされた反動によろめきながら、女は不満そうに声をあげた。

聞き覚えのある二人の声。どう考えても、翔お兄ちゃんと中田先生に違いなかった。顔はよく見えないけど、絶対にそうだ。ふたりは付き合っている？　翔お兄ちゃんは中田先生を選んだってこと？

必死に押さえていた涙が私の頬を伝う。声を出さないように我慢していたのに、口から嗚咽が漏れてしまった。

「ひかる！　どうしてここに……」

翔お兄ちゃんは上半身だけを起こした状態で、愕然（がくぜん）とした表情で私を見た。

枯れた涙

靴も履かず紺色のハイソックスのままで、ふらふらと外をさまよっていた。漆黒の闇の中、ぼんやりと顔を上げると、黄金の光を放つ満月が憂いを帯びたような目で私を見つめていた。出口のないトンネルを歩いているような無力感に襲われる。下を向いたまま、おぼつかない足取りで駅とは反対方向へ向かった。

ふと我に返ると、私はどんぐり公園の前に立っていた。再会した翔お兄ちゃんと初めてキスをした場所。オレンジ色の街灯の光を頼りに、公園の片隅に転がる土管の中に入って体育座りをした。コンクリートが素肌に当たるたびに、刺すような冷たさを感じる。昨晩から続く衝撃的な出来事の数々が、ぐるぐると止めどなく頭の中を回っていた。嫌な事ってこんなに続くものなのだろうか。私の先祖は過去に一体どんな罪を犯したというのだろう。どうしてここまで罰せられなくてはいけないのか。考えてみてもまったく理解できなかった。やるせない気持ちが沸々とこみ上げて来る。昔、「悲しい時は思いっきり泣くんだよ。涙が心の傷を洗い流してくれるから」と言っていたお母さんの顔が浮かんだ。でも、今は涙さえも出てこない。心はこんなに苦しみもだえているのに、好きなだけ泣くこともできないのだ。

街灯のそばに蚊やヌカガが数匹集まってきているのが見えた。汗の臭いに反応したのだろう。一匹の蚊がやってきて、私の左腕にとまった。いつもなら刺される前にパンっと叩き殺してしまうところだが、今はそんな気にはなれなかった。

「そんなに私の血が欲しい？　あげるよ。好きなだけあげる。大丈夫、殺さないから安心して。今私を必要としてくれてるのはあんただけだもん」

蚊のお腹が血で膨れていくのを確認してから、紺色の通学カバンを膝の上に乗せてファスナーを開けた。そして、中からおもむろに

小さな裁縫箱を取り出した。今日の家庭科の授業で使うために、布切れや針、糸、裁縫ばさみ、糸切りばさみなどを裁縫箱に入れておいたのだ。ゆっくりとした動きで裁縫ばさみを右手に取ると、自分の左手首に刃を当てた。躊躇（ちゅうちょ）することもなく、手前にスッと引く。赤い液体がポタポタと腕を伝って肘（ひじ）まで垂れてきた。想像していたような痛みはなく、意識だけが少しずつ遠のいていくのを感じた。

私は弱い人間だ。だから、自分の居場所が少しずつ暗黒の闇に犯されていくのを黙って見ていることができなかった。薄れゆく記憶の中で、翔お兄ちゃんと過ごした思い出がまぶたの奥に浮かんできた。私をぎゅっと抱きしめてくれる腕、柔らかくて温かい唇、甘くて優しい声。あなたのすべてが好きだった。今までありがとう、そしてごめんね。こんな私をどうか許して。

懺悔（ざんげ）（前書き）

本日、本小説「永遠（とわ）の愛」をお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいました♪とっても嬉しいです！本当にどうもありがとうございます。どうぞこれからもご愛読よろしくお願いします♪

懺悔（ざんげ）

シンとした静穏の中、電話がけたたましく鳴り響いた。電気をつけたまま着替えもせずに放心状態でソファに横たわっていた俺は、慌てて受話器を取った。

「はい、桜庭です」

壁にかかっている時計を見ると、夜中の一時半を回っていた。

「先生、娘が……娘が……！」

聞き覚えのあるひかるのお母さんの声だった。かなり狼狽した様子で受話器に向かって叫んでいる。

「どうしましたか？」

「手首を切って、今病院にいるんです。先生、どうしてうちの娘がこんなことに……」

「手首を切った？」

受話器を置く手が小刻みに震えた。病院の住所をメモした紙きれを握りしめ、車に飛び乗った。赤信号を無視し、更にアクセルを踏み込む。目の前の速度計が１００を振り切っていた。病院に着くまでのおよそ十五分間、俺は完全に正気を失っていたように思う。ただひかるが無事でいて欲しいと祈っていた。

五階建ての大きな総合病院が見えてきた。正面玄関前のロータリーに車を急停止させたところに、ちょうど一台の救急車がサイレンを鳴らしながら到着した。二人の救急救命士が手早くストレッチャーを担ぎ出し、それを三人の看護師が慣れた手つきでドアの内部へ押しやった。俺も看護師の後に続いて、ドアのすき間に体を滑り込ませた。

「すみません！　ここにさっき運ばれてきた渡瀬、渡瀬ひかるはどこですか！」

俺は、栗色に染めた髪の毛を頭の高い位置でお団子にしている若い看護師に声をかけた。看護師は俺の顔を一瞥（いちべつ）し、向かい側のドア

を指さした。焦慮する気持ちを抑え、音を立てないように白い引き戸のドアを慎重に開ける。目の前には、ベッドに寝かされている青白い顔をしたひかるの姿があった。今にも折れそうなほど小さくて細い体には、たくさんの管と線がつながれていた。そして、ピッピッと規則的に鳴る音だけが静寂な病室に響き渡っていた。

「ひかる、ごめんな。本当にごめんな」

ひかるの白くなった血の気のない頬をそっと指で撫でた。どんなに話しかけてみても、頬を撫でてみても、手をぎゅっと握ってみても、ひかるは何の反応も示さない。ただ、瞼(まぶた)を閉じて静かに眠り続けるだけだった。

――俺はなんて薄情で卑怯な男だったんだ。ひかるを愛してると言っておきながら、中田先生に握られた弱みに簡単に屈してしまった。「結局は保身だったんでしょ」と言われても、何も反論はできないだろう。俺にはもっと大切な守るべきものがあった。それなのに、結果的には俺の行動がひかるを深く深く傷つけてしまったんだ。

どんなに後悔してもしきれない。俺は自分の犯した間違いの大きさを改めて実感し、懺悔の気持ちで胸が押しつぶされそうだった。

告白（前書き）

本日、本小説「永遠（とわ）の愛」をお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいました♪嬉しくて小躍りしたい気分です！いつも応援をしていただき本当に感謝です。どうもありがとうございます。どうぞこれからもお願いいたします♪

告白

ワインレッドのポロシャツにベージュのコットンパンツ、安っぽい白色のサンダルを履いたひかるのお母さんが、うつむいたままドアを開けて静かに病室へ入ってきた。

「あ、こんな夜中にお呼び立てしてすみません。ひかるのケータイを見たら短縮1番に桜庭先生の番号が入っていたものですから。それに、先生なら今回の自殺未遂の原因をご存知かもしれないと思って……。とにかくさっきは気が動転していて、考えるよりも先に電話をかけていたんです。こんな夜中に本当にごめんなさいね」

「いいんですよ。僕も心配で居ても立っても居られなかったんですから。ひかるさんの容体はどうなんですか？」

「意識不明の重体です。切った傷が深くて、動脈にまで達していたんです。さっき処置をしてくれた先生は今晩がヤマだっておっしゃっていて……」

ひかるのお母さんは声を落として、下を向いた。声が小刻みに震え、頬から涙が伝っていた。

「今夜がヤマ……ですか」

俺は両手で額を覆ったまま膝からガクっと崩れ落ち、その場にへなへなと座り込んでしまった。まるで足全体が麻痺してしまったかのように、力が入らない。ひかるのお母さんが慌てた様子で、「先生！　先生！　しっかりしてください！」と大きな声を上げて俺の腕をつかんだ。

「ごめんなさい。僕が悪いんです。本当に……申し訳ありませんでした」

俺は気が動転し、気がつくと床に頭を擦りつけて土下座をしていた。

「先生、困ります。頭を上げてください。お願いですから」

「僕が……僕が……悪いんです」

頭に血が上り、俺は今にも発狂しそうな気分だった。
「先生、どういうことですか？　やっぱり学校で何かあったんですね？　いじめですか？」
「いいえ。そうじゃなく……」
「なんですか？　きちんと話していただけませんか？　先生、しっかりしてください」
静かではあったが、責任を問うような厳しい声が頭上から浴びせられた。
「実は……ひかるさんと僕は……」
「え？」
「付き合っています」
ひかるのお母さんは眉間に深くシワを寄せ、「うちの子が先生と付き合っているってことですか？」といぶかしげに聞いた。
「その通りです」
俺は罪悪感に押しつぶされ、顔を上げることができなくなっていた。胸の閉塞感が一気に強まり、呼吸困難に陥りそうだった。
「なんてことなの……」
「本当に、本当に申し訳ありませんでした。僕のせいで、ひかるさんは傷ついて……こんなことになってしまったんです。どうか許して下さい」
次から次へとこみ上げてくる自責の念から逃れることができず、俺はついに禁断の罪を告白し始めていた。

誤解

「その話は本当か？」
突然ドアの方から、しわがれた低い声がとんできた。冷静だが、強い怒りを含んだ厳しい口調だった。
「あなた！」
ひかるのお母さんは明らかにオロオロしている。
「先生、ひかるとはどういう関係なのかハッキリ説明してもらおうじゃないか」と、グレーの上下のスーツを着用したひかるの父親らしき人物が、ドスの利いた声で言い放った。まるでヤクザのような物の言い方と凄みの利いた目つきで、一歩一歩こちらに詰め寄ってくる。今にも取って食われそうな状況に、俺は完全に委縮し怖気づいていた。でも、今更さっきの発言を訂正することはできないし、何よりもひかるの親御さんに謝罪しなくてはいけないと思った。
「僕は、ひかるさんが八歳になるまで隣の家に住んでいました。その頃からひかるさんを妹のように思い、大事にしてきました。真剣にお付き合いをさせていただいています。でも、今回のことは僕の責任です。本当にご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした……」
「え！　じゃあ、あなたが桜庭さんのお宅の翔太くん？　同姓同名だとは思ったけど、まさかひかるの担任の先生だったなんて」と、ひかるのお母さんはかなり驚いた顔で言った。
「そうなんです。僕があの時の翔太です」
「まぁ、こんな偶然ってあるのかしら。ねぇ、あなた」となだめるような声で、ひかるのお母さんは隣に立っているひかるの父親に声をかけた。
「ふん、そんなもんはどうだっていいんだ。問題は、お前が教師のくせに生徒に手を出したってことだ」
「軽い気持ちではないんです。ひかるさんをとても大切に思っています。将来は結婚をかん……」と言いかけた瞬間、左頬に強い痛み

が走った。どうやらひかるの父親に思いっきり殴られたらしい。反動で体が傾き、病室の片隅に置いてあった白いソファに倒れ込んだ。口の中に血の味がじわじわと広がる。もう一度殴りかかってきたところを、ひかるのお母さんが止めに入った。「あなた、やめて！やめて！」と恐怖に顔を引きつらせて叫んでいる。

「こんな奴、殺してやる！　よくも……よくも嫁入り前の娘をキズモノにしてくれたな！」

「誤解です！　ひかるさんとは一度も深い関係にはなってません」

「見え透いた嘘をつくな！　母親が母親なら子も子だな。高校生の分際で男を誘惑するとはな！」

ひかるの父親はひどく興奮して顔を真っ赤にし、俺とひかるのお母さんをものすごい形相で睨んだ。

「僕たちは何も恥ずべきことはしていないんです。どうかわかってください……」

恐怖と絶望感が同時に大波のように押し寄せてきた。全身が震えあがり、頭皮からつま先までの皮膚が粟立っているのを感じた。俺は、許しを乞うためにただ足元にひれ伏すことしかできなかった。

「この野郎！　出てけ！　もう二度と顔を見せるな！」

ひかるの父親は黒い革靴で、土下座をしたままの俺の頭を三回ほど強く蹴った。そして、足で俺の体をぐいぐい押してドアまで追いやり、目の前でバシンと力いっぱい戸を閉めたのだった。

目覚め

「横井先生！　ひかるの意識が！」

聞き覚えのある声と、バタバタと騒々しい足音が耳に響いてきた。重い瞼（まぶた）がゆっくりと開く。視界はハッキリせず、まるで眼球の上に白い膜がくっついているかのように感じられる。それに体のあちこちが痛くて、指の関節すらうまく動かせない。

「ひかるちゃん？」

声のする方に目を向けると、白衣を着た医者らしき人物が立っていた。三十歳くらいで中肉中背、黒ぶちの眼鏡をかけており、どことなく優しそうな雰囲気が漂っている。横井先生と呼ばれているこの医者は「意識が戻ったようですね。ひかるちゃん、よく頑張ったね」と安堵したような笑顔で言い、私の頭に軽く触れた。その瞬間、胸が締めつけられるような感情が襲ってきて、思わず横井先生の手を振り払ってしまった。この感情の波は何……？　どうしてこんなに切ない気持ちになるんだろう。私はまだ混沌（こんとん）とする意識の中で、誰かのことを思い出していた。こんなに苦しい想いを抱いてもなお、恋い慕っているあの人のことを。

「ひかる！　本当によかった……」

お母さんは感涙にむせびながら、私の手をぎゅっと握った。

「私、どうして……ここに？」

喉に違和感があり、口の中が乾いてうまく話せない。声もガラガラでまるで自分じゃないみたいだった。

「覚えてないの？　手首を切って救急車で運ばれたのよ。公園の土管の中で意識不明で倒れているところを、たまたま巡回していたお巡りさんが見つけてくれたのよ」

お母さんの瞳から、大粒の涙が流れるのを見た。いつもはバッチリお化粧をしているのに今日はノーメイクらしい。顔をぐちゃぐちゃに歪めて、声をあげて再び泣き始めた。お母さんが“泣きモード

”に入るとなかなか収拾がつかない。
「お母さん、ごめん……ね。泣かないで、お願い……。もう泣かないで」と、私は消え入るような声で言った。
目だけを動かして自分の身の回りをぐるりと見渡してみた。白いベッド、白いシーツ、白い壁、それに白い窓枠。目に入るものすべてが白い。点滴をぶら下げているキャスターつきの台だけが銀色に光っていた。ドアの近くには白っぽいソファとガラス製のテーブルがセットで置いてあり、そのテーブルの上には紫色のチューリップが七、八本ほど花瓶に挿さっていた。
「ねぇお母さん、そこにあるお花って……」
私はテーブルの上にあるチューリップを指さした。
「何？」
「あのお花。紫の」
もう一度、ハッキリわかるように人差し指を向けた。
「あぁ、あれね。さっきまた桜庭先生が来て、ここにお花を置いて行ったのよ」
「どういうこと……？　先生が来たの？」
私は、自分の心臓が大きく波打つのを感じた。
「どうして？　お母さん、学校に電話をかけたの？」
「あんたのケータイの短縮1番に入ってたのが先生だったからよ。学校にはかけてないわ、夜中だったし」
「どうして先生に電話なんかしたのよ！　余計なことばっかりして」
「ひかる！　親に向かってその口の聞き方は何なの？　これだけ心配をかけておいてひどいじゃないの」
「勝手な事をしないでって言ってるの。　先生には迷惑かけたくないのに」
「どうして？　あんたは桜庭先生のせいで手首を切ったんでしょ？」
「ちがう」
私は思いっきり首を横に振った。
「ちゃんと説明して。お母さんにわかるように説明してちょうだい。

どうして手首なんか切ったの？」
「それは……」
「ひかる、あんたは私に罰を受けろと言うのね？　だから、教師なんかと……。おまけに自殺未遂までするなんて！　どうしてこんな事になるのよ！」
お母さんはしだいに半狂乱になり、ヒステリックに金切り声をあげた。その声があまりに大きかったのだろう。少し白髪のまじった髪を後ろで一つにまとめた、五十歳くらいの小太りな看護師が病室へ入ってきて、怖い顔でお母さんを睨んだ。
「病室ではお静かにお願いします。娘さんの体にも負担になりますから、そんなに大声を上げないでください」
看護師さんの厳しい口調に病室の空気が凍りついた。お母さんは我に返ったような表情で、「ちょっとお父さんに電話してくるからね」と繕った薄い笑みを浮かべ、足早に病室を去って行った。
まるでかなづちで殴られたように、後頭部に大きな衝撃を感じる。私は甘かったのだ。お母さんは、いつの間にか翔お兄ちゃんとの関係に気づいていたんだ……。

密かな決意

一ヶ月近く経って、ようやく退院の許可が出た。満面の笑みを浮かべた横井先生とお世話になった三人の看護師さんが病院の正面玄関までわざわざ見送ってくれた。隣にいるお母さんは私の右腕をつかんで、「ありがとうございました」と何度も頭を下げた。その時、後ろから「ひかるちゃん！」と大きな声がした。振り返るとそこには病室で何度か顔を合わせた、赤縁の眼鏡をかけた看護助手の若いお姉さんがいた。エレベータではなくきっと階段で下りて来たのだろう。ハァハァと荒く肩で息をして、手には大事そうに紫色のチューリップの花束を持っていた。お姉さんは「さっき、ひかるちゃんにっていつもの人が届けてくれたよ。桜庭さんって言うんだよね？　あの人、彼氏でしょ？　イケメンで羨ましいっ」と言ってイタズラっぽく笑い、「はい」と私の手に花束を握らせた。

入院している間、一日も欠かさず紫色のチューリップが病室に届けられていた。でも、届いた花束は私が自分の手で全部ゴミ箱に捨てた。連日病室に来て翔お兄ちゃんの悪口を言っていたお母さんも、そんな私を見て「むこうが一方的に好意を持っているってことね？　あんたはもう桜庭先生のことは好きじゃないのね？」と上機嫌に言って安心しきっているようだった。

「お母さん、この花束捨ててくるから」

私は待たせているタクシーにすでに乗りこんでいるお母さんに向かって、無表情でそう告げると、病院の玄関ドア前に設置してあるゴミ箱へ走った。一直線に小走りをしていると、チューリップの良い香りがふわっと鼻腔をくすぐった。その途端、どういうわけか胸から熱い想いがあふれ、目の前が涙でぼやけてきた。必死に我慢してきた涙が、抑制を失ってどんどん溢れ出てくる。

――翔お兄ちゃん、せっかくくれた花束を捨てちゃってごめんね。お母さんが持つ疑惑を少しでも減らしたくて、こんなバカげたこと

をしていたの。決して憎しみから捨てたわけじゃない。これだけはどうかわかって。私、少し前に院内図書館へ行ったの。そこで紫色のチューリップの意味を調べて、あの日公園で言ってた宿題の答えがわかったんだ。花言葉は「永遠の愛」。これで正解？　私ね、翔お兄ちゃんの愛をしっかり受け止めた。たくさんの愛で心が満タンになったよ。毎日病院へ来てくれて、すっごく嬉しかった。でもね、ここで終わりにしなければいけないと思うの。私、翔お兄ちゃんには誰よりも幸せになって欲しい。いつも笑顔でいてほしい。だから、この禁断の関係にピリオドを打って自由になってほしいの。これ以上、愛するあなたを一ミリも傷つけたくないから。

重い帰宅

私は「ただいま」と感情のこもらない声で、ぼそっとつぶやいた。自宅へ帰ってきたというのに、何も懐かしい感じがしなかった。お父さんのおぞましい発言を耳にしてからは、家にいても耳をふさいで過ごすことがほとんどだった。ヘッドフォンをして部屋にこもり、外の音声は一切遮断する。精神を正常に保つにはこの方法しかないと考えたのだ。

一畳ほどの玄関スペースで靴を脱ぎ、作り付けの濃い茶色の靴箱を開け、中にローファーをしまった。靴箱の上には、家族写真が一枚飾ってある。カメラに向かって微笑む父、楽しそうにはしゃぐ母、そして八歳の頃の天真爛漫な私が写っている。この頃は幸せだったな、なんて思いながら玄関のすぐ右側にある階段へ足をかけた。

その時「おい、ひかる」と低い声がした。お父さんがリビングからぬっと顔を出し、階段を三段ほど上った私を見つめていた。

「ちょっと話があるから来なさい」

「あなた、ひかるは退院したばかりよ？　疲てるだろうし休ませてあげてください」

「お前は黙ってろ。ひかる、来なさい」

お父さんは眉間にしわを寄せて私をじっと見た。足が凍りついたように動かない。怖い……。お母さんに肩を支えてもらいながらリビングルームに入り、ベージュの布製のソファに腰を下ろした。

「お前、担任の桜庭って男とはどういう関係なんだ」

やっぱり聞かれてしまった。お母さんだけではなくお父さんも既に知っていたらしい。しかも「お帰り」とか「大丈夫か」というねぎらいの言葉は一切なく、単刀直入に責め立ててくるお父さんが憎らしかった。

「何もないよ。ただの先生と生徒」

「男女交際してるって話は嘘だって言うのか」

「そう、嘘だよ」
「じゃあ、あの男はなんで俺たちに土下座までしたんだ？　真剣に付き合っているって言ってたぞ？」
　え？　土下座をした？　翔お兄ちゃんが私のためにそんなことまで……。ふと光景が目に浮かび、ショックでカッと頭に血が上った。
「そんなの知らない！　勝手に向こうが好きだっただけでしょ」
「そうなのよ、あなた。ひかるに毎日花束を送りつけてきたんだけどね、この子はすぐにゴミ箱へ捨ててたんだから」とお母さんが横からすかさず口を挟んだ。家庭内のもめ事をこれ以上増やしたくないと顔に書いてある。
「お前は好きじゃないんだな？　ひかる、嘘はついてないな？」
　私はうつむいたまま、大きく首を縦に振った。
「昔はあんなにいい子だったのに、まさか生徒を恋愛対象にするとはねぇ。翔太君も困ったものだわ」とお母さんはまだぶつぶつとつぶやいている。
「わかった。でも、念のためにお前はすぐ携帯の番号もメールアドレスも変えろ。あと、あいつには学校をやめてもらうからな」
　お父さんは腕組みしたまま、渋い顔で言った。
「どうして？　桜庭先生とは何の関係もないって言ってるじゃない！　学校をやめさせるってどういうこと？」
「来週、校長に電話をかけるつもりだ。それが因果応報なんだよ。お前をキズモノにして自殺にまで追い込んだあの男には、当然ふさわしい罰を受けてもらうんだ」
「ひどい！　お願いだからやめてよ！　私が転校するから。それでいいじゃない！」
「駄目だ」
「先生は何も悪くない！　これだけ言っても信じてくれないの？」
「信じられんな。あの男の目は本気だったからな」
「そう……わかった。そこまで信じられないなら、真実を言うしかないね。私が自殺しようとした本当の理由を教えてあげる。離婚だ

って大騒ぎしてケンカしてた夜、私はあんたの子どもじゃないって言ってたよね？　あの話、ドアの所で聞いちゃったの。私、この目で全部見てたんだよ」

「ひ、ひかる……」

さっきまで勝ち誇ったように私を脅していたお父さんが、態度を１８０度変えてうろたえたような表情を浮かべた。

「あの時から、私には居場所がなかった。家ではなるべくあんたと顔を合わせないようにしてたし、声も聞きたくないから部屋にこもってヘッドフォンで音楽を聞いてた。この気持ちがわかる？　十八年間、ずっとあんたたちの子だって信じてた。それなのに、それなのに……本当にひどいよ。あんたたちが私を傷つけたんだよ。でも桜庭先生だけは救ってくれた。居場所のない私の唯一の拠り所になってくれたんだよ。父親でもないクセに、先生をやめさせるなんて言わないでよ」

暴言を吐きながら、自分自身を天井から客観的に眺めているような気がした。実際、お父さんをリストカットの原因に上げたのは“売り言葉に買い言葉”だった。私自身なぜ手首を切ったのか真の理由がわからなかった。そもそも、本当に死のうとしていたのかすらわからない。あの時はただ、現実逃避をしたかっただけなのかもしれないし、居場所がなくなって傷ついた気持ちを誰かに知ってほしかっただけなのかもしれない。

窓の外の人影

リビングに流れる重苦しい空気に耐えかねて、私は逃げるように二階へ駆けあがった。そのまま自分の部屋のベッドに倒れ込み、掛け布団を被った。一か月の入院生活でガタっと体力が落ちていたせいか、体中が鉛のように重く、少し歩くだけでもめまいがした。

「ひかる、ご飯よ！」

階下からお母さんの大きな声がした。ふと木製の壁掛け時計に目をやると、既に午後七時半を回っていた。どうやら九時間近くも眠っていたらしい。

「お腹すいてない。いらない」

ドアを開けて静かにそう告げると、のそのそとベッドに戻った。そして、豆電球をつけて再び掛け布団を頭からかぶった。二歳か三歳の頃、お仕置きとして真っ暗な押し入れの中に何度か入れられた事を思い出した。あの頃は暗闇が何よりも怖かった。未だに暗所恐怖症の名残があるようで、十八歳になった今でも真っ暗で眠ることはできない。

音楽でも聞こうと、机の上に置いてある小さなＭＰ３プレーヤーに手をかけた瞬間、コツっと窓に何かが当たったような音がした。静寂の中に響いた大きな音に、思わず心臓が跳ねあがった。無視をしていたら、三回、四回と連続して同じ音がした。家は角地に建っており、私の部屋は道路側だから偶然何かが窓に当たることは物理的に可能だ。でも連続して音がするのは、故意に誰かが窓に何かを当てているように思えて気味が悪い。カーテンを少しだけ開けて、おそるおそる窓の外を確認してみた。だが、目を凝らしてみても外の様子は暗くてよく見えなかった。

「こんな遅くに誰かがわざとイタズラするはずもないよね」と私は小さくつぶやき、カーテンを閉めようとした。その瞬間、下から「

ひかる！」と聞き覚えのある声が飛んできた。おもむろに下を覗き込むと、黒い人影らしきものがこちらに向かって大きく手を振っている。私は防災用の懐中電灯がベッド脇のフックに掛けてあったのを思い出し、慌てて手に取った。窓の外の人影らしきものに向かって光を当ててみると、黒っぽいスーツにネクタイを締めた翔お兄ちゃんが私に向かって手を振っていた。これは夢なの？　現実なの？

よくわからないまま、窓の外をしばらくボーっと見つめていたら、突然、携帯電話の着信音が鳴り響いた。画面には＜桜庭翔太＞と表示されている。

取るべきか無視するべきか迷っているうちに、音が止んだ。そして、三秒もたたないうちにもう一度着信音が鳴った。覚悟を決めた私は、震える指で電話を取った。

悲しい嘘

「もしもし」
「もしもし、ひかる？　今日は家庭訪問に来たぞー」
翔お兄ちゃんは、わざとおどけたように明るい声で言った。
「退院したんだな？　体はもう大丈夫なのか？」
窓の下を見ると、携帯電話を耳に当てながら私の顔を見つめる翔お兄ちゃんがいた。
「うん。もう大丈夫」
「よかった。お前が無事で本当に良かったよ。声が聞けて安心した」
「うん」
「窓から手を振ってみて。もっとひかるの顔が見たい」
私は一度だけ小さく手を振った。
「何もしてやれなくてホントにごめんな」
翔お兄ちゃんは、心から申し訳なさそうに言った。
「いいよ。気にしないで」
「いや、気にするよ。だって今回の入院も俺のせいだろ？　辛かったんだよな」
「ちがうよ。リスカは他の理由なの。だからもう忘れて」
「どうしたんだよ？　中田先生とのことを怒ってるんだろ？」
「別に」
「わかるよ、普通あんなとこ見たら怒るよな。でも説明させてくれないか？　中田先生とは何もないんだ。本当に何もない。キスされたのはただの事故だ。あの後、中田先生にはハッキリ断っておいたからな。これは天に誓って真実だから」
「そっか」
「本当にごめんな。お前を傷つけたことを謝りたくて。こうやって面と向かって謝りたかったんだ。電話じゃ伝わらないと思って……。でも家まで来ちゃったのは迷惑だった？」

「……そう、だね」
「お前なー、正直すぎ！　いくら迷惑でもそんなにハッキリ言うなよ。俺は毎日でもお前の顔を見に来たいのに。帰りに寄っちゃダメかな？　お前が登校してくるまでいいから。お父さんやお母さんに見つからないようにそっと来るからさ」
翔お兄ちゃんはいつになく饒舌（じょうぜつ）だった。
「意識不明のお前を見て、絶対に失いたくないって心の底から思った。今までの俺は間違っていたよ。これからは中田先生とも正面からぶつかっていくつもりだ。全力でお前を守る。ひかるの親御さんにもちゃんと話をするよ。もう一度正面から向き合うつもりだ」
翔お兄ちゃんの発する一言一言が胸にズシンと響いた。すぐに走っていって翔お兄ちゃんの胸に飛び込みたかった。でも……。
「ごめん、もう終わりにしよう」
「え？」
「私たち、別れよう」
「ひかる、どうしたんだよ？　何があったんだ？　お父さんから何か言われたのか？」
「普通の先生と生徒になりたいの」
「なんでだよ？　本当の理由を教えてくれよ」
「親からは怒られるし、学校でもいつかバレるかもしれないってビクビクしているのが嫌なの」
私は、翔お兄ちゃんからもらった指輪をぎゅっと手の中で握った。
「本当にそれだけなのか？」
「うん。これが本心だから」
「そっか……。わかった。ひかるの気持ちも知らずに勘違いして一人で突っ走ってたんだな。ごめんな、ひかる」
私は感情の高ぶりを必死で抑え、一方的に電話を切った。そして、カーテンを閉め、ベッドの中にもぐりこんだ。
「これでいいの。これで良かったの」と私は呪文のように何度も唱え、溢れ出る涙を手でぬぐい続けた。

一抹の不安

別れを告げられたことがどうしても信じられなくて、あれから毎日ひかるの家の近くを通って帰宅していた。だが、いつ行ってもカーテンは閉まったままで、窓の下で数回電話をかけてみたが、ただの一度も取ってもらえることはなかった。

失恋というのはこんなに辛いものなのか。胸にしみわたる悲しみは時間が経っても薄れてくれない。言い知れない虚しさが、日に日に増していくだけだった。

「桜庭先生、夏休みのご予定は？」

横からぬっと顔を出したのは、紫のアイシャドウに赤い口紅をした中田先生だった。君と学校で顔を合わせなくて済む夏休みはまさに天国だ、と嫌味が喉元まで出かかった。

「今夜の飲み会には出るんですか？」

「まぁ、一応」

俺は、中田先生の顔を見ないようにして短く返答をした。今日は午後七時から三年生の先生だけが集まる飲み会が開催される予定だった。本当は行きたくなかったが、前回も前々回も欠席したという負い目もあって今回は参加することにしたのだ。

「そういえば、先生のクラスの渡瀬さんって退院したんですか？」

急に話題を変えられて、ドキッとした。中田先生の口からひかるの名前が出たのは、不意打ちキスを食らった日以来だった。悪夢のような出来事が思い出されて、頭がズキッと痛んだ。

「ええ。ところで来週の……」

話題を変えようとしたところで、「そうですか、良かったぁ。心配してたんですよ」と中田先生が早口でまくし立てた。

「私、生徒たちとお昼休みによく話をするんですけどね、そこで渡瀬さんの話題が出たんですよ。いろいろと噂が広がっているみたい

ですよ」
「噂、ですか？」
「え、知らないんですか？」
「別に知りたくないので」
努めて顔色を変えないようにしながら、目を合わせずに冷たく言った。
「ふぅん。ならいいですけど」
中田先生は反応を確かめるように横目で俺の顔をちらっと見て、職員室を後にした。

そういえば、三日ほど前に梶井彩夏が生物の授業の後、「先生、渡瀬さんってもう学校に来ないんですか」と聞いてきた。「いや、今は体調不良で休んでいるだけだから、もう少ししたら出てくるはずだ」と答えると、「でも、私聞いちゃったんですよ。あの子、いろいろヤバいことしてるって。リスカもやっちゃったんでしょ？」と、彩夏はどこか試すような目で俺を見つめた。俺はすぐに「そんな根も葉もない話を信じるな」と一喝したが、彩夏は小さく笑って「ただの噂ですよ」と言い、去って行った。
あの時はさほど気にも留めなかったが、彩夏の言う“ヤバいこと”とは何を指しているのだろうか。もしかして、俺とひかるが恋人として付き合っていたことが既に学校で噂になっているのだろうか。一抹の不安が胸をよぎった。

失恋の痛み

「カンパーイ！」

先生方は皆上機嫌で、手にビールの入ったジョッキグラスを持っている。俺の向かいにはB組の担任で三十三歳の小石川百合先生が座っていた。童顔に薄めのメイク、肩までの黒髪で、二十代後半と言ってもおかしくない風貌だ。斜め向かいの席にはC組の担任をしている、大江幸三先生がネクタイを緩めながらニコニコして正座をしていた。実際は五十歳くらいだが白髪が多く六十歳くらいに見える。いつもだいたい深緑色やカーキなど変わった色のズボンを履いているせいか、余計に老けたように感じられる。

「一学期、お疲れさまでした！　明日から夏休み、大いに楽しみましょう」と声を上げたのは、俺の隣に座るD組担任の田辺陽太先生だ。細い一重の目に薄い唇、すっと通った鼻、いわゆる“北方系弥生顔”の二十八歳で、うちの学校を卒業した生徒と去年結婚をしたらしい。まだ新婚ほやほやで、毎日愛妻弁当を持参してきている。

「せっかく掘りごたつの居酒屋にしたのになんで正座しているんですか」と、クリーム色のスーツを着た小石川先生が大江先生の方を見て不思議そうに聞いた。

「我が家は和室が多いからね、こっちの方が落ち着くんだよ」

「へぇ、そうですか。私は正座なんて無理です。足がしびれちゃうから」

「百合先生は若いからね。正座の世代じゃないもんね。足も長いし、正座なんて疲れちゃうでしょ。椅子でいいんだよ、椅子で。せっかく綺麗な足なんだから出した方がいいんだよ」

大江先生は鼻の下を伸ばしながら、小石川先生の脚をちらっと見た。田辺先生が横目で俺の方を見て「また始まりましたね。ビール一杯で酔っぱらってますよ」と、こそっと耳打ちしてきた。

「先生方ってこんなに変わるものなんですか？　学校での姿と全然

違うじゃないですか」と、俺は田辺先生に言った。
「学校ってストレス溜まるでしょ。最近の生徒ってホントに生意気だし。実際、俺が高校生の時はもっと真面目でしたよ。先生の言うことは一応ちゃんと聞いてたし。でも、今の子たちって先生と自分が対等だと思ってるでしょ。そこが間違いだっつーの」
「田辺先生も相当ストレス溜まっていますね」
「まぁな。俺、うちの学校に採用が決まった時は超嬉しかったんだけどさ。入ってみてビックリしたんだよ。共学の女子は男の目があるから、ある程度女らしさを保ってる。でも、女子高の女子は最悪だな。ある意味、オヤジだろ。女の怖い面を見過ぎちゃってさ。一時期、女性恐怖症になりかけたよ」
「でも、田辺先生は結婚されてますよね？　うちの生徒だったんでしょう？」
「禁断の恋愛ってヤツだな。あ、でも付き合い始めたのはあいつが卒業した後だったから、禁断でもないのか」
田辺先生は、楽しそうに早口で喋り、一人でツッコミを入れている。
「告白したのはどっちですか？」
「あっちから。卒業式に先生のことが好きだったんですって言われてさ。あいつが短大に行っている間は遠距離恋愛だったけど、なんとか乗り越えて今があるってわけ」
「いいですね、幸せそうですね」
「ふふっ幸せだよー今はね。ところで桜庭先生は？　彼女とかは？」
「いませんよ」
「先生の容姿なら相当モテるでしょ」
「別れたんです、最近」
「失恋かー。それは辛いな」
「初恋の人でもあったから余計にへこみました」
「そうだったのか。ま、嫌なことがあった時は飲め、飲め！　飲んで忘れろ！」

田辺先生が次々に注文したビールや日本酒を、俺は見境なく手に取って一気に飲み干した。今だけでも、この一瞬でも、胸に広がる失恋の痛みから逃れたくて、体の隅々までアルコールを満たしていった。

苛立ち（いらだち）

体がふわふわと宙に浮き、まるで雲の上にいるような気分がした。ここのところずっと塞いでいた気持ちが、どんどん開放的になっていくのを感じる。酒の力というのは、まさに魔力だ。

その時、「お邪魔します」と言いながら、紺色のノースリーブのひざ丈ワンピースに薄手の白いカーディガンを羽織った中田先生が個室の引き戸を開けた。「来てくれて嬉しいです！　中田先生がいると盛り上がるんですよ」と大きな声を出したのは田辺先生だった。中田先生の顔を見るとどうしてもあの日の不意打ちキスが思い出されてしまう。俺は、反射的にすっと席を立とうとした。すると、「桜庭先生？　どうしたんですか？　そんな驚いた顔をしちゃって」と、中田先生はクスっと笑いながら俺の隣に腰をかけた。

「いやぁ、中田先生はいつ見ても美人ですな」と大江先生は上機嫌に言い、ますます顔を赤くしている。中田先生は、さっと日本酒を手に取り、お酌をしながら「呼んでいただけて嬉しいです。三年生の先生方とは一番気が合うんですよ」と言った。　いかにも世渡り上手といった感じで、話をうまく合わせている。

飲み会も一時間半を過ぎた頃、話題の中心が生徒の進路のことになった。それから話は景気や政治の方面まで発展し、大江先生が熱く持論を語り始めた。お酒がほどよく入り、皆それぞれに楽な姿勢で議論を交わし合っている。そのうち小石川先生が「お先に」と言って出ていき、その二十分後くらいに大江先生も帰って行った。田辺先生は中田先生と俺の向かい側に移動し、追加で日本酒やビール、カクテルなどを注文した。

「桜庭先生、随分飲んでますね」

中田先生は俺の顔を覗き込むようにして言った。

「失恋したらしいですよ、初恋の人と。それでやけ酒ですよ」と、

田辺先生が口を滑らせた。
「それでこんなになるまで飲んじゃったんですね」
中田先生は、ふふっと含み笑いをした。
「私も好きな人がいるんです。田辺先生だけに打ち明けちゃおうかな」
心臓がドキっと跳びはねた。おそらく中田先生が片想いしている人物というのは俺だろう。キスの件を公言されてしまっては困る。盛り上がっている二人の会話を遮る手段はないものか……。俺はこの不穏な空気に強い苛立ちを感じていた。
「中田先生はモテるでしょ？　やっぱり彼氏いるんだよね？」と、田辺先生は興味深々な表情で聞いた。
「彼氏っていうか、私の片思いなんですよ。この前もフラれちゃったし」
「先生みたいな美人を振るなんてどんなヤツだよ。まだ今も好きなの？」
「振られた方が燃える、みたいな。今は無理でも絶対に私の男にしてみせますよ」
「そうだ、その意気だよ。今度、そいつ紹介してな。俺が鑑定してやる」
「ビックリしますよ、相手を見たら」
「もう、やめろよ！」
頭にカッと血が上り、俺は立ちあがって二人を怒鳴った。一瞬場の空気が固まったが、「ヤダー、そんなに興奮するような話題じゃないのに」と中田先生は言って、ケラケラと笑いだした。田辺先生も「だよな、まぁ座れって」と言い、俺の肩に手を触れた。無理やりその場に座らされた俺は、半分自棄になって再びビールに手を伸ばした。
キスをされてしまったあの日、俺は完全に油断をしていた。バスケ部の練習が終わって帰ろうとしたところ、中田先生が職員玄関の隅で小さくうずくまっていた。そして、具合が悪いから車で送って

くれないかと頼んできたのだ。断るわけにもいかず、中田先生を助手席に乗せて家の住所を聞いたところ、急に吐き気がするといって口を押さえて黙り込んでしまった。俺はなす術もなく、とりあえず自分の家へ向かった。そして、リビングルームに入れた瞬間、あのキス事件は起こってしまったのだ。

仕掛けられた罠

目を覚ますと、俺は見慣れない部屋にいた。木製のダブルベッドにワインレッドのシーツ、そして同色の薄い掛け布団。八畳ほどの部屋の白い壁にはニューヨークらしき夜景の大きなポスターが飾ってある。ポスターの下には真っ白いチェストと鏡台が並んでおり、鏡台の上には所狭しと香水や化粧品の瓶などが並べられていた。

すぐに起き上がって自分の置かれている状況を確認しようとしたが、頭がひどく痛んで体も思うように動かない。喉もカラカラで声が思うように出なかった。俺は昨日の記憶を必死に思い出そうとしたが、覚えているのは恋愛話で盛り上がる田辺先生と中田先生に向かって怒鳴りつけたところまでで、それ以降の記憶はまったくなかった。

ここが中田先生の部屋ではありませんようにと祈りながら、片手で掛け布団をめくり、ベッドから起き上がろうとした。その瞬間、俺は「ウソだろ！」と上ずった声をあげてしまった。我が目を疑うような光景に愕然（がくぜん）としたのだ。昨日着ていたはずの服が脱がされており、信じられないことに一糸まとわぬ姿で俺はベットに寝かされていた。あわてて立ち上がり廊下に出ると、突きあたりの白いドアの奥から水音が聞こえてきた。誰かがシャワーを浴びている。まさか本当に昨夜、何かあったんじゃ……？

リビングのソファーに放り投げてあった自分の服を手に取り、大急ぎでズボンを履き、ワイシャツのボタンをはめ、ネクタイをしめた。そして、俺は後ろを一度も振り返らず、逃げるようにしてその場を去った。ドアを閉める時に、後ろから「ちょっと！　待って！」と中田先生の声がしたが、足は止めなかった。裸のままベッドで寝ていたという事実は隠しようがなかったが、俺は自分に暗示をかけるように「何もなかった。何もしてないんだ」と心の中で繰り返し、必死に平静を装おうとしていた。

鳴らされた警鐘

俺は力なく自宅のドアを開け、ソファに倒れ込むようにして横になった。さっき目に映った光景がただただ信じられなく、まるで悪夢でも見ているかのような気分だった。ふらふらとした足取りで冷蔵庫へ行くと、中からポット型浄水器を取り出してグラスに注ぎ、一気に飲み干した。

「あれは何かの間違いだ」

ゲージの中ですやすや眠っているヒッキーナを腕に抱きながら、俺は独り言をつぶやいた。携帯電話を手に取り、アドレス帳から“田辺先生”と書いてあるページを探す。昨夜何があったのかを確認しなければ前に進まないと思ったのだ。知りたい気持ちと、知るのが怖い気持ちが入り混じり、胸のあたりがモヤモヤする。発信ボタンを押すかどうか十秒ほど迷った挙句に、俺は指に力を込めて発信ボタンを押した。

「もしもし。田辺先生ですか」

「あぁ、桜庭先生？　昨日は大丈夫でした？」

「そのことで聞きたいことがあるんですが、今いいですか？」

「いいよ、俺にわかることなら答えるけど。」

「昨夜のことが全然記憶にないんです。俺、かなり酔ってました？」

「完全に酔いつぶれてたよ。そういえばさ、中田先生と家が近所なんだって？」

さっきわかったことだが、中田先生は三十階建のタワーマンションに住んでおり、うちまでの距離はさほど遠くなかった。徒歩二十分といったところで、最寄駅も隣同士だ。俺は「ええ、まぁ」と曖昧に返事をした。

「だからかー。　昨日、桜庭先生を送り届けるって言ってタクシーで帰って行ったんだよね」

「タクシーで送り届けるって、中田先生が俺を……ですか？」

「そう。中田先生が肩を支えてタクシーに乗る所までは見たけど」
「そうだったんですか」
「ちゃんと家まで送ってもらったか？　もしかして、起きたら中田先生の家にいたとか？」
「いいえ、ちがいますよ」
「ふぅん、そっか。いや、俺さ、昨日中田先生と話してて、好きな人がうちの学校の先生だって聞いてさ。もしかして桜庭先生じゃないかって思ったわけ」
　田辺先生の確信を持ったような言い方に、心臓がドキっと反応した。
「どうして俺だと思ったんですか？」
「桜庭先生を見る目つきが、あれは恋してるって感じなんだよな。俺は応援するから、二人のこと」
「やめてくださいよ、ちがいますから」
「俺は、中田先生の方がいいと思うぞ。下手に高校生に手を出すと大変な事になるからな。お前は顔がいいんだし、女ならいくらでもいるだろ」
　田辺先生の言葉が耳の中で雷鳴のようにこだました。不安が一気に募り、肩に力が入って返す言葉が見つからなかった。
「いやいや、聞き流していいよ。俺はただ桜庭先生が心配なんだよ。あれが単なる噂だといいんだけど」
「噂って何ですか」
「あ、いや、何でもないよ」
「そうやって隠されると余計気になりますから」
「昨日、飲み会の席で中田先生からちらっとね、聞いたんだよ」
「どんな話だったんですか」
「桜庭先生がうちの学校の生徒に手を出したって。しかも三年Ａ組だって言ってたな」
　俺は全身から血の気が引いていくのを感じた。やっぱり中田は魔性の女、いや魔女だ。胃袋がうずき、息苦しいほどに心臓の鼓動が

速くなっていった。
「まさか田辺先生はそんな噂、信じてないですよね？」
「もちろん信じるわけないよ。でも、ほら、火のない所に煙は立たないって言うだろ。気をつけた方がいいよ。女子高の親はこういうタブーに一番敏感だからな。すぐにクビが飛んじゃうぞ。あ、俺そろそろ行かないと！　カミさんが呼んでるから。じゃあ、また始業式に」
田辺先生は、あわてた様子で電話を切った。これ以上、“危ない煙”には近寄りたくないらしい。
急に頭の中を「たかが噂、されど噂」というフレーズが駆け巡った。これから約一か月の夏休み、俺はこの噂と中田の亡霊に付きまとわれながら過ごすことになるのだろうか。想像しただけで、ぞっと背筋が凍りつくのを感じた。

私を呼ぶ声

「あっつい……」

うだるような暑さに目が覚めた。全身が汗でべとべとしている。ベッドの上で半袖のパジャマを脱ぎ、薄いグリーンのキャミソールと同色のショーツだけになった。そして、机の上に置いてあるエアコンのリモコンを握り、設定温度を二度下げた。

ベッド脇に置いてある目覚まし時計を見ると、午前十一時半近くになっていた。ゆっくりベッドから起き上がり、下着姿のままで浴室へ移動した。シャワーの蛇口をひねりながら、ぼんやりと今年は厄年なんだろうかと考えた。でも、前向きに考えてみると、そうそう悪いことばかりでもなかった。新学期早々に翔お兄ちゃんと再会できたし、一緒に海やゲーセンにも行けた。ファーストキスもしたし、指輪だってもらった。あの時は本当に嬉しかったな……。思い出すだけで頬が紅潮してしまう。

必死に考えまいとしていた翔お兄ちゃんの顔が脳裏にくっきりと浮かんできた。こんなに好きでお互いに求めあっているのに、別れを選ばなくてはいけないなんて……。胸が苦しくてたまらない。神様、どうせ別れる運命ならどうして私たちを再会させたの？　翔お兄ちゃんに会いたくて、抱きしめてもらいたくて、狂おしいほどに心がかきむしられる。

その時、玄関から誰かが入ってくるのを感じた。家には誰もいないはずだし、戸締りはきちんとしているはずだ。もしかしてお母さんが途中で帰宅したのかもしれない。そう思いながら、体にバスタオルを巻きつけて浴室のドアを少しだけ開けた。ちらっとドアの外を見てみたが、何の物音もしなかった。ほっと安堵のため息をついて浴室に戻ろうとしたところで、「ひかる」と私を呼ぶ低い声が聞こえた。

普段だとこの時間帯は静寂に包まれており、玄関からは物音一つしないはずだ。両親に夏休みはなく、平日は毎日朝八時頃から夕方六時過ぎまで仕事に出かけている。私は顔を合わせないために、わざと午後六時すぎに一旦寝て、夜中に何度か起き、正午くらいに完全にベッドから出るというおかしな生活をしていたのだ。

それなのに、誰かが私を呼んでいる……。なんとなく気味が悪くて、浴室のドアを開ける手に緊張が走った。

涙の和解

恐る恐る冷たい金属のドアノブに触れると、カチャっとリビングのドアが開いた。まず目に入ってきたのは、ソファに座る人影だった。一瞬ドキッとしたが、後ろ姿を見ただけですぐにそれがお父さんだとわかった。

「なんで？」

「驚かせてすまんな」

「え？　会社は？」

「今日は半日休みをもらったんだ」

「どうして？」

「お前とは一度ちゃんと話をしないとって思ったんだ」

「……私は話したくない」

お父さんはふーっと深いため息をつくと、咳払いを一つした後で「とにかく、ちゃんと着替えてきなさい。風邪ひくぞ」と優しい口調で言った。私は「風邪ひいたって病気になったって関係ないでしょ。入院中、一度もお見舞いに来なかったくせに」と言い放ち、すぐに背を向けて後ろ手でリビングのドアを閉めた。背中越しに「ここで待ってるからな」とお父さんの懇願するような声が飛んできた。

私は浴室へ戻り、へなへなと床に座り込んだ。お湯が流れ続けるシャワーのヘッドを見つめていると、ふとドア越しに見た夫婦喧嘩の光景がはっきりとよみがえってきた。お父さんとお母さんが吐いたセリフの一つひとつまで鮮明に覚えているからたちが悪い。もう少し忘れっぽい性格なら、こんなに長く傷ついた気持ちを抱かなくて済んだのかもしれない。あの日以来、私とお父さんとの間には深い溝ができていた。さらに、リストカットの原因をお父さんの発言のせいにしてからは、前にも増して気まずい空気が流れていた。

正直に言えば、お父さんとはこれ以上話をしたくない。一度ぱっくり開いた傷口にはこれ以上触れられたくないのだ。もし、これ以

上傷口に塩を塗られるようなことを言われたら、私だって黙っちゃいない。強い覚悟を決め、白いTシャツとタオル地の薄いピンクのハーフパンツに着替えて再度リビングへ向かった。

ドアを開けると、L字型のソファの一人掛けの部分にお父さんがうつむいたまま座っていた。テーブルの上には白いケーキの箱らしきものが置かれている。

「ひかる、ケーキ食べないか？」

お父さんは私の機嫌を伺うように薄く笑って言った。

「いらない」

「ひかるは駅前のケーキが大好物だったよな？　あそこのいちごショートを買ってきたんだ」

その通りだった。小さいころから、大粒のいちごと甘すぎない生クリームのコンビネーションが好きで、行けば必ず注文していたのだ。

「お前とこのまま口を聞かないまま過ごしたくないんだよ。お父さんのこと怒っているのか？」

私は黙り続けた。

「この前はお父さんが悪かった。お母さんとケンカをしてて、つい変な事を言ってしまったんだ。本当にすまなかったな」

「謝って済む問題じゃない。お父さんの子どもじゃないって聞かされて、どれだけ傷ついたと思う？」

「お前はお父さんの子だよ。この前言ったことは嘘なんだ。お母さんに反撃したくてつい意地悪を言ってしまったんだ」

「私は……お父さんの子なの？　本当にそうなの？」

今まで張りつめていた緊張がふっと解けた気がした。

「そうだよ、お前は正真正銘お父さんの子だ。混乱させるようなことを言って悪かった。この通りだ。謝るから許してくれないか」

あまりにも必死な物言いに驚き、私はちらっと顔を上げた。すると、お父さんのかけている老眼鏡のレンズが涙で濡れているのが見

えた。普段のお父さんは「日本男児たるもの、涙を見せてはいけない」とかなんとか言い、泣き顔を見せる人ではないのだ。そんなお父さんが、今懺悔の涙を流している。この信じられない光景に、私は自分だけがこだわりを持ち、怒り続けているのがバカバカしく思えてきた。

「お父さん、わかった。もういいよ。私、怒ってないから」

「本当か？　許してくれるのか？」

お父さんは菩薩様でも拝むような表情で私を見た。自分の中で、今まで持っていた怒りが嘘のように消えていくのを感じた。そして、胸を埋め尽くしていた黒い塊が跡形もなく無くなっていき、清浄な空気がすぅっと体の中に入ってきたように思えた。

冷たい視線

学校に来るのは何日ぶりだろう。退院して二週間ほどで夏休みに入ったので、およそニヶ月半の間、登校していないことになる。

「おはよう！」と下駄箱で靴を履き替えながら元気に挨拶してきたのは、クラスで一番仲の良い理香だった。

「おはよう」と返すと、「もう大丈夫なの？　メールしてもあんまり返事なかったし、心配してたんだよ」と理香は言った。たしかに理香とは数回電話で話したが、メールは三回に一回くらいしか返してなかったような気もする。自分が元気のない時に返信をすると、ネガティブなオーラに相手も引きずりこんでしまうように思えて気が進まなかったのだ。

教室へ足を踏み入れると、自分が異質なものに思えた。ニヵ月半前には自分もここにいたはずなのに、今はまったく違う空気が流れているような気がした。

「ひかるの席はこっちでしょ」と、理香は窓側の一番前の席を指さした。

「え？　席替えしたの？」

「あ、そっか！　いなかったもんね。ちょうど夏休みの一週間くらい前にしたんだよ。休み前なのに、いきなり彩夏たちがやろうって言いだしてさ。どうせ自分たちが同じ班になりたいからじゃない？　ほら、すぐに文化祭と体育祭があるしさ」

一番前の席は思ったよりも気楽だった。後ろを振り向かなければ、目の前にあるのは黒板と教卓、そして小さな掲示板だけ。彩夏グループや他の女子グループの声がガヤガヤと後ろから聞こえてきたが、前を向いている時は違う世界にいられるような気がした。女子のグループから受け入れてもらえなかった私が出来ることと言えば、嫌われないように、いじめられないように、そして目立たないようにするだけ。それだけが自分を守る手段だと思っていた。

彩夏の取り巻き女子のうちの二人が私の机までわざわざやってきて、「渡瀬さん、やっと学校に来たんだね。ねぇ、夏休み前になんかあったの？　ずいぶん休んでたじゃん」と言った。もちろん本当の事を告げる義務はないのだから、「ちょっと風邪が長引いちゃって……」と適当にごまかした。二人が目を合わせながらクスクス笑って去っていくのを確認し、後ろの席をちらっと見ると、彩夏を中心とした女子三人が慌てて私から目をそらした。そして、彩夏が大きな声で「うちの担任にマジで告ったらしいよ。しかも、フラれてリスカしてるし。カッコ悪っ」と教室中に響き渡る声で言った。周りの取り巻き女子は、彩夏につられて一斉に「だよね」とか「そうそう」と声を上げ始めた。

ドクンと心臓の鼓動が速くなり、胸の奥がチクチクと痛んだ。私はカバンの中から文庫本を取り出してぱらぱらとめくった。本の内容なんて関係ない。ただ、何か他のことをして気を紛らわしていないと、涙がぽろぽろとこぼれ落ちてきそうだったのだ。クラス中から浴びせられる視線が痛いほどに私の背中に突き刺さり、今にも走って逃げ出したい衝動に駆られた。このニヵ月半でクラスでの自分の立ち位置が、目立たない存在から目ざわりな存在に変わってしまったことに気づかされ、私は極度の不安を感じた。

言えない本心

夏休みが開けて最初の体育の授業は水泳だと、昨夜連絡網が回ってきた。いくら女子高で男子の目がないとは言っても、水着での授業にはいつも抵抗を感じる。更衣室は古ぼけた八畳ほどの部屋で、授業中のみ一人ひとつロッカーを使うことが許可されている。ロッカーの鍵は腕時計のように手首に巻きつけるような形になっており、それを肌身離さず授業中身につけることが決まりになっている。私はなるべく端の方で静かに着替えたかったので、昼休みが終わる直前ではなく三十分ほど前に教室を出た。三年Ａ組の教室から屋外のプールに出るには、校舎と屋外プールを結ぶ渡り廊下を通る必要がある。プールの授業があっても、たいていの生徒は五分前か三分前に更衣室へ来てささっと着替えてチャイムの音と同時に整列するのだ。昼休み中にこの渡り廊下を歩く生徒は多くない。

私は、誰とも目が合わないように下向き加減に早足で渡り廊下を歩いていた。すると背後から突然、ぎゅっと右手を握られる感触を感じた。ビックリして振り返ると、翔お兄ちゃんの姿が目に飛び込んできた。白いワイシャツに紺色と白のチェックのネクタイ、それにいつもの白衣を羽織っている。不安そうな緊張しているような表情を浮かべて私を見つめていた。

「具合、悪いんじゃないのか」

「先生こそ青い顔しているじゃない」

私は前方に生徒の気配を感じて、慌てて握られた手を振り払った。

「お前、クラスで何かあったのか？」

「どうして？　何もないよ」

「最近元気ないだろ」

「そんなことないって。別に何もないから心配しないで」

見たことのない女子生徒が二人、私たちの横を通り抜けた。何かヒソヒソと話しているような気がして、私はひどく不安な気持ちに

させられた。
「私、これから体育だから。じゃあ」
踵を返そうとしたところで、今度は手首を強くつかまれた。
「おい、待てよ」
「やめてよ、離して！」
翔お兄ちゃんは、「ちょっとこっち来い」と短く言って私の腕を引っ張った。
「痛いよ。やめてったら」
「俺、まだひかるのことを諦められないんだ」
「その話は聞きたくない」
「どうして急にそんなに冷たくなったのか教えてくれよ」
「もう別れたんだから、慣れ慣れしくしないで」
私は翔お兄ちゃんをキッと睨んで、小走りでプール脇にある更衣室へ向かった。態度とは裏腹に、自分の心がひどく弱っていくのを感じた。でも、今はどうしようもない。何か行動を起こせば、それが即二人の破滅につながってしまう。自分の気持ちさえ殺せば、翔お兄ちゃんの人生がめちゃくちゃになることも防げるはずだ……。
私はそう固く信じていた。

更衣室での惨劇

金属のドアノブを回し更衣室へ足を踏み入れると、ギシっと床から木のきしむ音が響いた。私は壁側の一番奥のロッカーにタオルや水着などを放り込んだ。そして誰もいないのを確認し、半袖のセーラー服の赤いスカーフを取り、脇にあるチャックを開ける。慣れた手つきで水着に着替え始めた。

その時、ガチャとドアの開く音が聞こえ、誰かが更衣室へ入ってくる気配がした。腕時計を見ると、午後十二時四十三分を指している。まだ授業開始の十五分以上も前だ。こんな時間に来る人はいないはずなのに、と首をかしげて考えていると突然視界が暗くなった。そして紐のようなもので、両手を後ろに縛り上げられた。

「やめて！」

私は反射的に声を出した。目の前が見えない恐怖に足がすくむ。

「渡瀬さん、本当のこと教えてよ。うちの担任が好きなの？」

自信に満ちた彩夏の声が背後から響いた。周りでクスクスと複数の笑い声がしていることから、犯人は恐らく三人以上だ。私はひどく動揺し、「どうして目隠しなんてするの？　早く取って！」とありったけの大声で叫んだ。

「ちゃんと答えたら取ってあげる。ね？　だから、私の質問には全部答えるの。わかった？」

「何が聞きたいの」

「あんたと桜庭翔太の関係。付き合ってるって噂と、告ってフラれたって噂があるけど、どっちが本当なわけ？」

「どっちも本当じゃない。付き合ってないし、告ってもいない。これで満足？」

「なにその態度。じゃあその首にかけている指輪は何なの？」

誰かの手が、私の首にかけられているシルバーのネックレスのチェーンに触れた。

「これは……」
「それって特別なものなんでしょ？」
「別にそんなんじゃない。」
「へぇ、じゃあこうしてもいいわけ？」
誰かがネックレスを力いっぱい引っ張った。首が締まって苦しくなり、息ができなくなる。「うっ」という低い声と同時にブチっと鈍い音がして、細いチェーンがちぎれた。指輪がカランと床に落下する音が虚しく響いた。
「どうしてこんなことするの？」
私は全身が身震いするのを感じながら、声を振りしぼって聞いた。
「あんたが嘘をついたから」
「それは……」
「保健室のお姉さんと私、親戚だって言ってなかったっけ？　寛子（ひろこ）さん、うちの母方の叔母なんだよね。だから、ごまかしたってムダ。ねぇ、翔太と寛子さんが付き合ってるってこと知らなかった？　それとも知ってて邪魔してるとか？　寛子さんから聞いたんだけど、あんたが翔太を誘惑して寛子さんから奪ったんだってね。人の彼氏と浮気しておいて罪の意識とかないわけ？　しかも彼女になりたくて告ったんでしょ？　結局翔太にフラれた後も、気を引くためにリスカしたって。私、全部本当のことを聞いたんだから。嘘をついたってムダだよ。あんたってマジで最低なヤツ」
彩夏は、翔お兄ちゃんを翔太と呼び捨てにし、中田先生のことを寛子さんと呼んだ。彩夏と中田先生が親戚だったこと、二人が付き合っているという言葉、そして翔お兄ちゃんを誘惑して奪ったという事実無根の言いがかりに私は驚愕（きょうがく）し、言葉が何も出てこなかった。
「渡瀬さんって着やせするタイプなんだー。けっこう胸おっきいよね。これで誘惑したんでしょ？　ねぇ、翔太にどんなことされたの？　答えなさいよ」
淡いグリーンのキャミソールに同色のショーツだけを身にまとった姿で、私は顔が真っ赤に染まっていくのを感じた。自分は目隠し

をされているのに、相手には全部見えているんだ……なんてサイアクな状況だろう。
「先生とは何もしてない」
「また嘘ばっかりついて」
「信じて！　私は誘惑なんてしてない」
「嘘をつく悪い子にはお仕置きをしないとねぇ」と彩夏は、耳元でふっと笑いながら囁いた。そして、私の体を強く後ろに倒すようにして、ぐいっとロッカーの中に押し込んだ。ガチャンと不吉な音が耳に届く。彩夏たちは「五時間目の体育はプールじゃなくてバレーボールに変更だってぇ」と笑いながら言い、バタバタと大きな足音を立てて去って行った。

解き放たれた心

ロッカーの中で目隠しをされ、手を後ろで縛られていては身動きが取れない。唯一自由に動く足でドアを蹴り、何度も「助けて！」と叫んでみたが、誰も来てくれる気配はなかった。

暗所恐怖症のせいだろう。暗闇で過ごすことに言い知れぬ恐ろしさを感じた。心臓が締め付けられて、呼吸が荒くなる。遠くで下校を知らせるチャイムが聞こえてきた頃には、私は少し意識を失いかけていた。その時、更衣室のドアがガチャっと開く音がした。

「ひかる、ここにいるのか？　いるなら返事をしろ！」

はぁはぁと荒く息を吐きながら、翔お兄ちゃんは大きな声で叫んだ。すぐに返事をしようと思ったが、もう私にはあまり体力が残っていなかった。蚊の鳴くような声で「助けて」と言ったが、ロッカーの外にまで聞こえているかどうか自信がなかった。「どこにいるんだ！」と翔お兄ちゃんは焦ったような声で、更衣室の中を歩き回っている。大きな足音がすぐ前まで聞こえてきた時、私は最後の力を振り絞って足でロッカーの扉を蹴りあげた。

「ここか！　閉じ込められたんだな？」

翔お兄ちゃんは何度も扉を引いている様子だったが、一向に開かなかった。

「鍵はどこにあるんだ！　クソッ！　ひかる、誰が閉じ込めたんだ？」

私は答えるべきかどうか迷っていた。ここで犯人の名前を告げれば、彩夏の行動はエスカレートするかもしれない。

「名前を言えよ。こんなことをするなんて、いったい誰なんだ！　ひかる！　答えてくれ！　うちのクラスの奴なのか？」

「ちがう」

「じゃあ、誰なんだ？　おい！ちゃんと答えろ」

「もういいの」

「いいわけないだろ？　ドアを開けるのに鍵がいるんだよ。誰がやったのか言ってくれないと、すぐにドアを開けられないだろ。頼むから言ってくれ」
「ドアを……開けて。お願い。私、苦しいの。暗くて……怖いの」
「カギがないんじゃ仕方ないな。今、用務員の佐藤さんを呼んでくるからな。待ってろよ」

暗闇の中でしばらく耐えていると、「ここです！　早くお願いします」と叫びながら近寄ってくる翔お兄ちゃんの声と、バタバタとした足音が聞こえた。
「こんなイタズラ、前代未聞だな。人を閉じ込めるなんて一体どんな神経してるんだ」
六十歳近くの用務員の佐藤さんが、イラっとしたような口調でつぶやいた。そして、カギを開ける専門の業者らしき男の人が「大丈夫？　今開けるからね」と私に話しかけてくる声も聞こえた。
二分も経たないうちに、カチャリという音と同時に扉が開いた。
「ひかる！　大丈夫か？」
翔お兄ちゃんは、ロッカーから一秒でも早く出ようとする私を両手で抱きとめ、瞬時に自分の着ている白衣で私の体を包み込んだ。そして、目隠しを剥ぎ取り、手首を締めつけていた紐を解いてくれた。
ロッカーの前には、険しい顔をした翔お兄ちゃんと、驚いて口を開けたままの佐藤さん、そして三十代前半くらいのベージュの作業服を着た鍵業者さんが立っていた。翔お兄ちゃんはすぐに、用務員の佐藤さんとカギ業者の男性に向かって「ありがとうございました。うちのクラスの生徒なので、あとは僕が」と早口で言って、ここから去るようにうながした。
二人きりになった更衣室で、翔お兄ちゃんは私を力いっぱい抱きしめた。
「怖かっただろ」

私は首を少し縦に振った。
「お前、昔から暗い場所が苦手だったもんな。でももう大丈夫だ。家まで車で送ってやるからな」
「そんなことしなくていい。目立っちゃうでしょ。私たち、また噂の的にされちゃう」
「いいんだ。気にするな。俺はもう覚悟を決めたんだから」
「ダメだって！　私たち別れたでしょ？　もう先生のことは好きじゃないの」
「お前バカだな。その上、意地っ張りで、見え透いた嘘をつく」
翔お兄ちゃんは口角を上げてフッと小さく笑った。そして、私の頭の上に手を乗せてぽんぽんと軽く撫ぜた。
「もう一人で抱え込むな。いいな？　これは命令だからな。それから、好きじゃないとか嫌いだとか嘘をつくのも禁止だ。お前、まだ俺のこと好きだろ？　無理に嫌いになろうとしたって駄目だ。ひかるは俺の女なんだからな」
凍りついていた心が少しずつ解けていくような温かい気持ちになった。私はコクリと小さく頷き、翔お兄ちゃんの顔をまっすぐ見つめた。その途端、涙がぽたっと流れ落ちて白衣に小さなシミをつくった。
「私、翔お兄ちゃんを傷つけたくなくて。先生の仕事をクビになるんじゃないかって思って。だから、別れなきゃって思ったの」
「わかったからもう泣くな。俺の白衣に鼻水がつくだろ」
翔お兄ちゃんは紺色のタオルハンカチを目の前に差し出した。そして、私の頭をすっぽり包むようにぎゅっと抱きしめた。

久々の笑み

俺はひかるを車に乗せたまま、首都高で湘南に向かった。そして、海辺の駐車場に車を停め、曇り空の下で打ち付ける波を眺めていた。この浜辺は、ひかると六月にデートで訪れた思い出深い場所だ。助手席に座るひかるの目はまだ赤く、膝の上で固く握った二つの拳は静かに震えていた。ロッカーに閉じ込められたことがよほどショックだったのだろう。

車を停めて三分もしないうちに、大きな雨粒が車のフロントガラスを叩きつけるようにして落ちてきた。みるみるうちに雨脚が強くなり、強風が木の枝を大きく揺らし始めた。昨晩のニュース番組で、沖縄に台風が上陸したと言っていたのを思い出した。東京に来るのはまだ先だと高をくくっていたが、どうやら上陸が早まったようだ。

「さっき、どうして私が更衣室にいるってわかったの？」

ひかるは下を向いたまま、静かに口を開いた。

「六時間目の授業中に、吉岡が職員室に来たんだ」

「理香が来たの？　なんて言ってたの？」

「お前が消えたって。体育の授業中もいなかったし、六時間目にも姿が見えないから俺に探すように頼んできたんだ。それで、学校中を片っ端から二人で探しまわったんだよ」

「そうだったんだ。理香が私のためにそこまで……」

「吉岡、お前の様子が変だって言ってたぞ。前までは仲良しでいつも一緒にいたのに、最近はお前から一方的に避けるようになってきたって。あいつ、お前が入院している時も毎日のように病院へ行ってたんだぞ。だけど、お前のお母さんが吉岡を追い返してからは、担当看護師に様子を聞くだけにしていたんだ。吉岡は、俺がお前の親の手前もあって病院に行けないのを知ってて、学校でお前の様子を毎日報告してくれていたんだよ」

「え？　私、知らなかった。毎日だなんてそんな……。じゃあ、理

香はリストカットのことも、翔お兄ちゃんとの関係も知ってたのに、それでも私と一緒にいてくれてたってこと？」
「あぁ、そういうことになるな。でも、どうして吉岡を避けたりしたんだ？」
「私、クラスの女子に嫌われているから。だから、理香まで巻き込まれるのがイヤだった。クラス中から白い目で見られるのは、私一人で十分だと思ったの。理香のことが大切だから、私のせいで傷つくのが耐えられないの。そんなの見ていられない」
「お前、ホントにバカだな。大バカだよ。この小さい頭でそんなことまで考えてたのか」
俺はひかるの頭のてっぺんを手のひらで包み込むようにして、左右に少し揺らした。
「な、なんで！」
ひかるは少し怒ったように、口を尖らせて頬を膨らませた。
「人間っていうのは、お互いに傷つけあって生きているんだ。人は、みんな心に無数の棘を持っている。そして、知らず知らずのうちにその棘でお互いを傷つけあうんだよ。その傷に気づかない人もいれば、繊細ですぐに反応してしまう人もいる。だけど生まれてこの方、棘を刺したことも刺されたこともない人間なんて、この世にいると思うか？」
俺の目を見て、ひかるは不思議そうな顔を浮かべている。そして、「でも傷つくのも傷つけるのも私はイヤなの」と静かに言った。
「傷つくのが怖いなら、部屋に引きこもればいい。そうすれば、お前は死ぬまで傷つかないだろうし、人を傷つけることもなくなるだろう。でも、他人との接触を一切絶ってしまったらどうなる？　お前は誰とも話さず、誰とも会わずに、これから毎日を生きていくのか？」
ひかるは頭の中で引きこもり状態を想像しているようだった。急に青い顔をして「誰にも会えなくて、口もきけないなんて……」と口ごもった。

「それに、いつ俺がお前に傷つけられるのが嫌だって言った？　吉岡だって同じだぞ？　お前の力になりたいって思っている人間をどうしてそうも遠ざけるんだ」
「力に……なりたい？　私の？」
「そうだよ。俺も吉岡も同じように、お前を助けたいって思ってるんだ」
「だけど、私は自分のせいで誰かが不幸になるのが嫌なの」
「ひかる、よく聞くんだ。傷を負うのは悪いことじゃない。傷つくことが即不幸になるわけではないんだ。傷は癒えるんだよ。そして、その傷が心を強くするんだ。吉岡も俺も、ひかると一緒に乗り越えたいんだ。傷つくことなんて最初から恐れていないんだよ」
　ひかるは急に嗚咽を繰り返し、涙をぽろぽろとこぼした。
「今まで、理香のことも翔お兄ちゃんのことも、ただ傷つけないようにってそれだけ思ってきたの。だから、私は嵐が過ぎるまで一人で耐えようと思ってた」
「もう我慢するな。これからは、絶対に一人で背負いこむんじゃない。お前はもっと他人に頼ることを学ばないと駄目だな」
「今の言い方、いかにも先生って感じ」
　ひかるは涙でぬれた頬を小さな手で拭いながら、いたずらっぽく笑った。久しぶりに見たひかるの笑顔に、俺は天にも昇るような嬉しさを感じた。

「はい、これ」
　俺はズボンのポケットから指輪を取り出した。
「どうしてここに？」
「お前、落としただろ。ちゃんと指にはめておかないからだぞ」
　俺はすっとひかるの左手を取って、指輪をゆっくりと薬指にはめた。
　この指輪は、ひかるが閉じ込められたロッカーに鍵の業者さんと用務員の佐藤さんを連れてきた時、床に落ちているのを発見したの

だ。突然の別れを不審に思っていた俺は、その指輪を見てひかるの気持ちを確信した。別れを告げた後も、指輪は肌身離さず身につけられていた。ということは、俺を嫌いなったから別れたわけではなかったのだと。

翔太の思い（前書き）

本小説『永遠（とわ）の愛』をお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいました。とっーても嬉しいです！ご愛読いただき、どうもありがとうございます。これからもよろしくお願い致します♪

翔太の思い

「ねぇ、見て。あの人の傘壊れてるよ」
ひかるは暴風で傘がひっくり返っている人を指差して、心もとない表情を浮かべた。
「コンビニ傘は風に弱いからな。せっかく海に来たけど、この雨と風じゃどうせ外には出れないし、そろそろ帰るか」
時計を見ると、午後五時を回っていた。俺は静かにサイドブレーキを解除し、ウィンカーを上げ、アクセルを踏み込んだ。
「交通情報を聞くにはどうしたらいいんだっけ」
ひかるは、ラジオのスイッチがどこかわからないようだった。俺はハンドルを握って前を向いたまま、ラジオのチャンネルを合わせていく。ザザザっという雑音の後に「現在、首都高速はかなり混雑しております。なお、一部の区間で通行止めとなっており……」と、機械的な声が車内に響き渡った。真剣にラジオに耳をそばだてていたひかるは、「ヤバイよ。ここ、通行止めだって」と急に大きな声を出した。通行止めか……。俺は確認の意味を込めて、繰り返し流れているアナウンスをもう一度注意深く聞いた。結果、ひかるの言っていることは正しかった。
「しばらく動けそうにないな」
「電車は？　動いているの？」
「この天気じゃ止まっているかもしれない。でも、とりあえず駅へ行ってみるか」
俺は車を走らせ、最寄駅へ向かった。
駅前のロータリーに車を停めると、ひかるは改札口まで走っていき、一分くらい経って戻ってきた。そして、「電車も止まってるって」と途方に暮れたような声を出した。
「親に帰りが遅くなるって電話をかけたほうがいいかもしれないぞ。きっと心配するだろ」

「でも、誰とどこにいるか聞かれたらどうしよう。なんて答えたらいい？」
少しイライラしたような口調でひかるは言った。
「電話かけてやろうか？」
俺はひかるの右手から携帯電話をすっと抜き取り、発信履歴から電場番号を探すフリをした。ただの冗談のつもりだったが、ひかるは真剣な顔つきで「ちょっと、やめてよ！　今度こそ翔お兄ちゃんクビになるよ！　私もう知らないから」と止めに入った。
「え？　クビって？」
「あ、いや、何でもない」
「ハッキリ言えよ。気になるだろ」
「お父さんがね、前に翔お兄ちゃんをクビにするって言ってたから。校長先生に電話をかけるって言ってて……」
ひかるは、退院後に起こったお父さんとの経緯（いきさつ）を詳しく俺に説明した。
「あの時、お前のお父さんをかなり怒らせちゃったからな」
「多分脅しただけだよ。早く別れさせたかったんだと思う」
「だよな。お父さんの気持ち、痛いほどわかるよ。娘のことが心配なんだよな」
ひかるは携帯電話を俺の手から取り返すと、待ち受け画面をじっと見て黙りこくった。そして着信履歴の画面を開き、通話ボタンを押した。
「もしもし、理香？　さっきは心配かけてごめんね。今？　先生といるよ」
ひかるの突然の行動に、俺の心臓はドキっと跳びはねた。目をまんまるく見開いた俺の顔を見て、ひかるは人差し指を自分の唇の前まで持ってきた。そして、黙っててという仕草をして見せた。
「お願いがあるの。湘南まで来たんだけど、台風で車が動かなくなっちゃって。だから今日は帰れないかもしれない……。今夜は理香の家に泊まることにしてもいい？」

ひかるは、冷静な声で淡々と話した。
「ありがとう。本当に助かる！　もし、親から確認の電話が来たら、理香、お願いね」
受話器の向こうから、「わかったよー、任せといて！」と言う吉岡の声が漏れ聞こえた。ひかるが電話を切ったのを確認し、俺はすぐに口を開いた。
「お前、今日は帰らないつもりなのか？」
「うん」
「おい、勝手に決めんな」
「今、お母さんに電話するから」
「ちょっと待て、無視すんなって」
「駄目なの？　私と一緒にいたくないの？」
「あと何時間か経てば通行止めは解除されるはずだ。だから、ちゃんと家に帰れ」
「どうして？　私、翔お兄ちゃんとここにいたいの。離れたくない」
ひかるは哀願するような目つきで俺を見た。まるで捨てられた子猫のように、つぶらな瞳で訴えてくる。
「駄目だ。ひかる、お父さんとの信頼関係を壊しちゃいけない。せっかく和解できたんだろう？」
「何よ、先生ぶっちゃって。こういう時だけ親の味方をするわけ？」
「俺はとっくに教師をやめててもおかしくない立場なんだよ。でも、ひかるのお父さんとお母さんは、俺たちの関係を知った上で黙っていてくれたんだ。それはなぜだかわかるか？　お前の親はひかるを信用してるんだ。俺とは別れたって信じ切っているんだよ」
「でも、どうしてうちの親は翔お兄ちゃんと私が付き合っていることを認めてくれないの？　もし、わかってくれたら……この気持ちをわかってくれたらどんなにいいか……」
「それは無理だな。教師と生徒は禁断の関係だから。親にそこまで期待しちゃいけないよ」
「でも、一晩くらい一緒にいてくれたっていいじゃない。親には理

香の所に泊まるって言えばいいんだし」
　ひかるはひどく不満そうな顔で俺を見つめていた。
「とにかく今夜は帰るんだ。いいな？」
　俺は、男としての抑えがたい衝動を胸の奥でチリチリと感じながらそう言った。本能だけで動けるなら、今夜は迷うことなくひかると一緒に過ごしていたかもしれない。だが、ひかるの父親に殴られ、蹴られた時のことを思うと、そんな気持ちも自然と薄まっていくように思えた。娘をあれほど大切に思っている父親にいつか結婚の許しを乞うその日まで、俺は軽はずみな行為を慎まなくてはならない。それに、もし教師をクビになれば、ひかるへのいじめがもっとエスカレートすることは容易に想像できた。だから今はひかるを守るためにも、自分自身を戒めなくてはならない――俺はそう思っていた。

ひっそりと横たわる罪悪感

「ねぇ、聞きたいことがあるんだけど」
電車に揺られながら、ひかるは意を決したように俺を見て言った。
「ん？」
「学校で変なことを言う人がいて、なんだか胸がスッキリしないの。もしかして、翔お兄ちゃんと中田先生の間に何かあった……とか？」
「それ、どういう意味だよ」
「だからその……恋愛関係が一度でもあったのかってこと」
ひかるは伏し目がちに、声を落として言った。その時、ふと俺の脳裏に悪夢のような光景が浮かんできた。万が一、あの日、魔女の部屋で一線を越えた関係になっていたとすれば……たとえ身に覚えがなくても浮気をしたことになってしまうんだろうか。ひかるに対して後ろめたい気持ちを感じつつも、俺はいちいち報告するような話題でもないと思い直し、口をつぐんだ。
「変なこと聞いちゃったね。ごめん、忘れて」
「それ、誰が言ってたんだ？」
「ちょっとね。うちのクラスの子たちが話してたから」
「中田先生とは何もないよ。向こうから告白はされたけど」
「やっぱり。あの人、翔お兄ちゃんのこと好きなんだね」
「みたいだな。でも俺は断ったからな。付き合ったことは一度もないから安心しろ」
「わかった」
「胸のもやもやはおさまったか？　すっきりしたか？」
「うん、大丈夫だよ。ありがと」
ひかるはまたいつもの笑顔に戻って、俺の方を向いた。
「ねぇ、やっぱり電車にして良かったね。首都高なら通行止めが解除されても、きっと渋滞がひどいでしょ」
「そうだな」

「駐車場に置きっぱなしの車はどうするの？」
「明日、もう一度湘南へ来るよ」
「あーあ、いつか翔お兄ちゃんとお泊まりしたいなぁ」
「お前が高校を卒業したらな」
「ホント？」
ひかるは上目遣いのまま、喜々とした表情で俺を見た。そしてウキウキした様子で、指を折って卒業までの月数を数え始めた。
「じゃあ、あと六ヶ月だね。三月が待ちきれないよー」
ひかるの無垢な笑顔に、俺は大きな安心感を覚えた。まるで一本のロウソクに火が灯ったかのように、心の底からじわじわと温かくなる。そして、空っぽだった胃が満たされていくように感じるのだ。だが同時に、俺の胸に暗雲のようにひっそりと横たわる罪悪感は、どれだけロウソクに火を灯したとしても、決して燃え尽きてくれそうにはなかった。じわじわと俺の首を締めつける罪悪感こそが、魔女の企（たくら）みだったのだろうか――。

動揺

「ひかるー！　昨日どうだった？　先生としちゃったんでしょ？」
教室に入ると、理香が駆け寄ってきた。興味深々といった顔で、にやにやしている。
「シーッ、小さい声で話してよ」
「何があったのか教えて。私だって協力したんだから。ひかる、バージンだったんでしょ？」
「ナイショ」
「ひかるって秘密主義でつまんない！　感想聞くの楽しみにしてたのにぃ」
「実はね、泊まらなかったの。昨日は家に帰ったんだよ」
「え？　なんで？　湘南で通行止めって言ってたじゃん」
「先生、真面目なんだもん。親が心配するから帰れって言われた」
「そこまで行って帰されたの？」
「うん。私もちょっと期待してたんだけど、あっさり却下されちゃったよ」
「なんかガッカリだねー」
「だよね」
「私、ひかると先生のこと応援してるんだからね」
「ありがと。でも、最初わかった時はびっくりしたでしょ？」
「うん、信じられなかった。だって、先生と付き合うようなタイプに見えないもん。大人しいし、男なんて興味ないって顔してたでしょ。あ、実はね、私、ひかると先生が理科準備室で放課後に会ってたの知ってたんだ」
「え……」
「ひかるの顔つきが毎日すっごい幸せそうだったから、何かあるんじゃないかって思ったの。でも、聞いても教えてくれなかったでしょ？　だから後をつけたことがあって」

「全然気づかなかったよ」
「毎日準備室に通ってたでしょ？　あの時点で、怪しいなーって思ったんだ」
「バレてたんだね」
「ひかるから言ってくれるの待ってたのに、なんで黙ってたの？」
「私と先生だけの秘密が欲しかったから……かな。私みたいな何のとりえもない生徒がイケメンの先生と付き合ってるなんて……なんか手の届かない夢みたいでしょ？　誰かに喋ったら泡のように消えちゃう気がして。だから言えなかったの。結局今は親にもバレたし、クラス中にも知れ渡っちゃったけどね」
「もしかして、この前のリスカは先生が原因だった？」
「先生だけじゃないよ。いろんなことが重なったの」
「最初の頃は幸せそうだったのに、途中からなんか辛そうだったもんね」
「私ってそんなに顔に出る？　恥ずかしいな」
「ねぇ、じゃあ今はまたラブラブなんだよね？」
「一応そうかな」
理香は大きく伸びをすると、「私も彼氏がほしーい」とお腹から絞り出すような声を出した。

私は席を立ち、一人でトイレに向かった。早足で廊下を歩く。その時、突然「渡瀬さん、ちょっといい？」と背後から声がした。振り向くと、彩夏が申し訳なさそうな顔つきで立っていた。
「この前はごめん。私の勘違いだったみたい」
反省したような表情を浮かべ、彩夏は顎（あご）の前で両手を合わせた。
「私、今印刷室へ行ってきたんだけど、なんかヤバそうだったよ」
「ヤバイって何が？」
「翔太がクビになるって田辺たちが話してた」
「え？　それ、本当なの？」
「嘘だと思うなら、実際に印刷室に行ってきたら？　自分で確かめ

て来なよ。」

証拠写真

私は廊下を全速力で走り、印刷室のドアを勢いよく開けた。目に入ってきたのは、シンと静まりかえった室内で一人コピー機の前に立っている中田先生だった。

「あら、渡瀬さんじゃないの。そんなに息を切らして、一体どうしたの」

「あの、田辺先生はいませんか？」

「いないけど」

「桜庭先生もいないんですか？」

「見ての通り、ここにいるのは私だけよ。桜庭先生がいなくてガッカリしたでしょ？」

「いいえ、そんな……。すいません、失礼しました」

重苦しい空気に耐えられず慌ててドアに手をかけた。そして、急いで廊下へ出ようとした瞬間、背後から鋭い声がピシャリと私を打った。

「待ちなさい。あなたを呼んだのは私よ。今すぐここに連れて来なさいって彩夏に頼んだの」

「そんな……」

「桜庭先生は最初からここにはいないわ」

「じゃあ、全部嘘だったんですか」

「クビになるって聞いて驚いたでしょ？」

中田先生は勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「ひどいです。私、本当にビックリして……」

「渡瀬さんを呼び出したのには、大事な理由（わけ）があるの。彩夏から聞いたかもしれないけど、桜庭先生と私、付き合い始めたのよ。つい最近もね、翔太くんがうちに来て泊まっていったの」

「え？」

心拍数が一気に上がり、激しい動悸を感じた。

「一緒にお酒を飲んで、その後うちへ来たのよ」
「どうせまた嘘ですよね？　この前、直接先生に中田先生とのことを聞いたんですよ。恋愛関係は一切ないって言ってましたけど」
「そんな話を信じたの？　渡瀬さんって純情なのね」
「私は桜庭先生を信じてますから」
「あなたって本当に子どもよね。大人の話をそのまま鵜呑みにしちゃダメでしょ。ここに動かぬ証拠があるっていうのに」
　中田先生は、羽織っている白衣のポケットから一枚の写真を取り出した。そして、人差し指と中指で写真を挟み、見せつけるように私の目の高さまで持ってきた。
「翔太くんの言っていることは嘘で、こっちが真実よ」
　目の前には、信じられない光景が広がっていた。ベッドの上で翔お兄ちゃんが上半身裸の状態で、その横にはぴったり寄り添うようにシーツに包まった中田先生が写っていたのだ。
「そんな……」
「私だって渡瀬さんを傷つける気はなかったのよ。でも、こういう証拠でも見せないと信じてくれないでしょ？　まぁそういうことだから、もう渡瀬さんには邪魔されたくないのよ。翔太くんは優しから、きっとあなたの気持ちを拒否できないんでしょうね」
　中田先生はポケットに写真をしまうと、目を細めてうっすらと笑った。そして、無言のままで印刷室を後にした。

こじれ始めた糸（前書き）

本小説『永遠（とわ）の愛』をお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいました！嬉しくてヤル気が倍増しました＾＾　どうもありがとうございます。これからもご愛読いただけたら嬉しいです☆よろしくお願い致します♪

こじれ始めた糸

中田先生に突きつけられた証拠写真が脳裏に焼きついて離れない。私はひどい無力感に心が蝕(むしば)まれていくような気がした。

のそのそと印刷室を出て、数十メートル先にある職員室へ向かった。朝のホームルーム前は慌ただしいようで、先生たちはバタバタと忙しそうに動き回っている。

「お、三年A組の日直だな？」

ドアの近くに立って翔お兄ちゃんの席をじっと見つめていると、田辺先生が背中越しに話しかけてきた。そして、辺りをキョロキョロと見まわしてから「桜庭先生ならもうすぐ来るはずだ。A組のプリントはこっちだぞ」と言い、目の前の机の上に積まれている紙の束を指差した。

「今日はプリントが多いなぁ。重いだろ？　一人で持てる？」

田辺先生は、十センチくらいあるプリントの束を目の前に差し出した。今日は日直でもないし、プリントを持っていく義務なんて最初からなかったが、話の流れから私は拒否できずにいた。おもむろに両手を出すと、田辺先生が私の手の上に紙の束を置いた。

「なんか顔色悪いね。大丈夫？」

人懐っこい顔をした田辺先生が、覗きこむように私の顔を見た。

「何ともありません」

私は何の感情も交えずに、口だけを動かして答えた。

「悩みがあるんだろう？　こう見えて俺は頼りになるぞー。いつでも相談に来ていいんだからな」

「別にないです」

私があまりにつれない態度を取ったからだろう。田辺先生は困ったような気まずいような表情を浮かべ、その場から去って行った。気分が沈んでいる時は誰とも会話をしたくない。それなのに、あのデリカシーのない顔で話しかけられると胸がムカムカするのだ。私

はプリントの束を腕に抱いたまま、翔お兄ちゃんの席の方へ歩いて行った。そして、机の上にプリントを置き、ゆっくりと椅子に腰をかけた。
「お、今日はお前が日直だったか」
口元を緩めて笑いながら、翔お兄ちゃんがこちらに向かって歩いて来た。
「なんで俺の席に座ってんの？　ここは先生の席だぞ」
私はうつむいたまま小さな声で「……嘘つき」とつぶやいた。その時、ホームルーム開始のチャイムが鳴り、職員室から先生達が一斉にいなくなった。
「え？　なんだって？」
「どうして本当のことを言ってくれないの？　私のこと、からかってるでしょ？」
翔お兄ちゃんは、怪訝（けげん）そうな面持ちで私をじっと見た。
「お前、何言ってんだ」
「中田先生の家に泊まったって本当なの？」
私の言葉を聞いた瞬間、翔お兄ちゃんの顔がこわばったまま固まった。
「あぁ、やっぱり罠だったか……。ひかる、これには理由（わけ）があるんだ。話は中田先生から聞いたんだろ？」
「誰だっていいでしょ。それより、あの写真は何なのか教えて」
翔お兄ちゃんは二歩ほど後ろへ下がって窓の桟（さん）にもたれかかり、両手で顔を覆って深いため息をついた。

募る不信感

「桜庭先生、もうホームルームが始まってますよ！　渡瀬さんも早く教室へ行って」
声のする方を見ると、学年主任が職員室のドアのそばに立って、不審げに視線を投げかけていた。
「渡瀬、教室へ行こう」
翔お兄ちゃんは、学年主任に聞こえるくらいの大きな声を出した。そして、私の方を見て「早く立て」と小さな声で言った。
「いい、行かない」
「おい！　話は後だ。いいな？」
「一人で行けばいいでしょ。ホームルームに遅れるんじゃない？」
「いいから来い」
「いやだってば！」
翔お兄ちゃんは私の手首をぐいっとつかんだ。力いっぱい引っ張ったせいだろう。私は倒れ込むようにして、床に膝と手をついてしまった。
「渡瀬さん！」
学年主任が血相を変えてこちらに走ってきた。
「桜庭先生、あなた何やってるの！　ここはいいから早く教室に行ってちょうだい！　渡瀬さんは私が」
「主任、お願いです。朝のホームルームに、僕の代わりにうちのクラスへ行ってもらえませんか？」
「自分が何を言っているかわかってるの？　担任がホームルームを放棄するなんて……！」
学年主任が顔を真っ赤にして怒鳴り散らしている最中に、翔お兄ちゃんは私の腕をつかんだ。そして、ふわりとお姫様抱っこをしたかと思うと、私を腕に抱いたまま廊下に出た。
「おろして！　おろしてってば！」

翔お兄ちゃんは私の言葉を無視し、駐車場の方まで早足で歩き続けた。そして、助手席に私を乗せ、シートベルトを締めようとして覆いかぶさるような姿勢になった。翔お兄ちゃんの体が近づき、石鹸の香りが鼻腔をかすめる。

「……ったく。主任の前であの態度はないだろ」

翔お兄ちゃんが大きなため息をついて、低い声で言った。

「バレるのが怖かった？」

「いや、もうバレてる。お前をあんな風に抱きかかえて出ていったからな」

「教室に行かなくていいの？」

「この状況で戻る気にはなれない……」

「ねぇ、中田先生と付き合っているなら、どうして私に優しくするの？」

「だから、付き合ってないんだって。それはお前の誤解なんだよ」

「でも、あの写真は？」

「写真って何だよ。俺、あの夜のことは全然覚えてないんだ……」

「それって、もしかして酔っぱらった勢いってこと？」

「朝起きたら、魔女……いや、中田先生の家にいたんだよ」

「それを私に信じろって言うの？」

翔お兄ちゃんは、真剣な表情でコクリと頷いた。

「信じられるわけないでしょ。私とは泊まれないって言ったくせに、中田先生ならいいんだね」

胸の内がザワザワして落ち着かない。私の心の中に渦巻(うず)いている感情が今にも爆発しそうだった。

「ちがうんだよ！」

翔お兄ちゃんは、急に大きな声を出した。

「何が？　何が違うの？　酔った勢いでしちゃったんでしょ？　ひどいよ。最低だよ」

私はシートベルトを外し、乱暴にドアを開けた。

「待て！　行くな！」

「私、歩いて帰るから」
翔お兄ちゃんは素早く車から降りて、小走りで追いかけてきた。
「ついてこないで！　お願いだから一人にしてよ！」
私は狂ったように叫び、走って校門を出た。一度も振り返ることなく、ただひたすら前を向いて歩く。翔お兄ちゃんを信じたい気持ちと、写真の中に写っていた二人の顔が頭の中で何度も交錯（こうさく）する。もし、中田先生の言うことが真実なら……考えただけで悔しくて悲しくて、心がひどくかき乱された。

自信喪失

おぼつかない足取りで、何度か躓(つまづ)きそうになりながらもようやく家にたどり着いた。玄関に座り、いつものように靴を揃える。その時、突然背後から声が飛んできた。

「ひかる、大丈夫なの？」

振り返ると、お母さんがリビングルームからぬっと顔を出していた。

「さっき桜庭先生から連絡もらって、急いで会社から帰ってきたの。具合が悪いんだって？」

「具合が悪い？　先生がそう言ったの？」

「そうよ。家に帰って見てあげるように言われたわ」

「私、別に具合が悪くて早退したわけじゃないし」

「じゃあ、なんで帰ってきたの」

「色々あって……」

「お母さんには話せないことなの？」

「ねぇ、私って魅力ないのかな。女としてダメなのかな」

「突然何を言い出すかと思ったら、一体なんなの？」

私はお母さんの言葉を聞き流し、のそのそとリビングルームを出た。

「ちょっと！　一体どうしちゃったのよ！」

背中にお母さんの貼りつくような視線を感じながら、私は二階へ上がり、自分の部屋に入った。バタンとドアを閉めると、緊張が緩んだのかその場に座り込んでしまった。手足に力が入らず、制服を着たままで床に横たわる。フローリングのひんやりとした感触が頬に、腕に、足に伝わる。泣きたくなんかないのに、制御してもしきれない涙が頬を濡らした。

「ひかる？　入ってもいい？」

お母さんの声と共に、遠慮気味にドアがノックされた。
「学校で何があったの？　言いにくいことなの？」
返事をせずにいると、ドア越しにため息をつく音が聞こえた。
「落ち着いたら話してくれるわね？」
お母さんは心配そうな声で言い、「心療内科で処方してもらった薬をドアの前に置いておくね。お母さんのだけど、中に精神安定剤が入っているから。これを飲めば少しは落ち着くはずよ。夕食の時間になったら呼ぶから。いい？」
薬で楽になれるの……？　それなら、飲みたい――。私はフラフラ状態の体で立ちあがり、静かにドアを開けた。そして、精神安定剤を手に乗せて口に含み、一気に水を飲み干した。

封筒の中の真実

何時間くらいたったのだろう。目が覚めると、私はベッドの上にいた。制服のまま横向きで小さく丸まって眠っていたようだ。セーラー服の下に着ているキャミソールが少し濡れている。悪い夢でも見たのか、背中にじっとりと汗をかいていた。異常なほどの喉の渇きを覚えた私は、階段を下りてキッチンへ向かった。

「お母さん？　いないの？」

キッチンにもリビングルームにも浴室にもトイレにもお母さんの姿は見えない。急に不安な気持ちに襲われ、二階へ駆けあがった。両親が使っている主寝室のドアを開ける。ここにもお母さんはいない。私は、向かい側にあるお父さんの書斎のドアを開けた。この部屋に足を踏み入れるのは何年ぶりだろう。十年近く入ってない気がする。あまり父娘の会話がなかったこともあって、書斎に足を踏み入れることはなかったのだ。部屋は五畳ほどの広さで、黒い机、同色の椅子、そしてこげ茶の本棚が壁に沿って置かれている。まだ外は明るいというのに、窓にかかったベージュのカーテンは閉められたままになっていた。ふと白い壁を見ると、金色の額縁が目に入った。そこには「おとうさん　ありがとう」と、くねくねした文字で書かれた絵が飾ってあった。似顔絵のようだが、私には描いた覚えがない。紙の下の方に「わたせひかる」と自筆サインがあることからも、きっと自分が幼稚園児の時に描いたものなんだろうけど……。

ガシャン！　突然の大きな音に驚いた。足元を見ると、グラスが真っ二つに割れている。どうやら、机の上にあったグラスを肘で押してしまったらしい。

（はぁ、本当に今日はツイてない……）

私は片付けようとして、慌ててその場にしゃがんだ。その時、机の下に置いてある黒いプラスチックのごみ箱が目に入った。中には、ぐしゃぐしゃになった封筒らしきものが一枚捨てられている。拾っ

て手に取ってみると、Ａ４サイズの封筒には「株式会社ＱＡＰＡ」という文字が書いてあり、中に厚めの紙が入っていた。人のものを勝手に見るのはモラル違反かなと少し迷ったが、私は素早く中の紙を取り出した。

その瞬間――自分の目を疑った。そこには、“ＤＮＡ　鑑定結果：親子関係　否定”と明記されていたのだ。

「嘘……こんなの嘘……！」

大声を上げた途端、ものすごいスピードで誰かが階段を上がってくる音が聞こえた。

「ひかる！　どうしたの！」

お母さんが青ざめた顔で駆け寄ってきた。そして、私の目の前に落ちている鑑定書を手に取った。

「ＤＮＡ……鑑定……書？　これは……」

お母さんは目を見開いて口に手を当てると、膝から崩れ落ちるようにして、全身の力が抜けたようにその場に座り込んだ。

迫りくる恐怖

家を飛び出した私は、渋谷の街をあてもなく歩きまわった。腕時計を見ると、もうすでに午後九時を回っている。でも家には帰りたくない……。理香に電話をかけてみたが、留守電の音声が流れるだけだった。きっと今頃塾に行っているのだろう。たしか前に、午後八時から午後十時過ぎまでは塾に通っていると話していた気がする。

表通りから少し離れた場所を歩いていると、不意に背後から手が伸びてきて私の肩に触れた。

「キャッ、触らないで！」

私は小さく叫び声をあげて、その手を振り払った。

「ねぇ、どこのお店の子？　この制服、かわいいじゃーん。似合ってるよ」

気持ち悪い声。全身に悪寒が走る。背後から再び手が伸びてきて、今度は私の腰の辺りに触れた。

「やめてください！」

振り返ると、二十代後半くらいの男が二人、ニヤけた顔で立っていた。

「かわいいね、君。いくつ？　ねぇ、いくらでやらせてくれんの？」

あまりの恐怖に声が出ない。

「おい、無視すんなって。ナメてんじゃねーぞ」

茶髪の方の男が機嫌の悪そうな声を出した。

「今日はツイてんな。なかなかレベルの高い獲物じゃん」

野球帽をかぶった方の男が、興奮したような声を出して近づいてくる。その時、出し抜けに茶髪男がジーンズのポケットから携帯電話を取り出した。そして「あ、電話だ。ヤベぇ」と言いながら、電波の良い場所を探すようにして表通りへ走って行った。私は一瞬のスキを狙って脱出しようとしたが、逃げようにも片方は行き止まりで、表通りに出るには野球帽男と茶髪男の二つの関門を通らなくて

はならない。どうすべきか必死に考えていると、野球帽男がおもむろに胸のポケットから煙草とライターを取り出し、私に背を向けてタバコを吸い始めた。
野球帽男がくるりと後ろを向いた瞬間、今がチャンスだと思った。あわててスカートのポケットから携帯電話を取り出し、翔お兄ちゃんへ電話をかける。お願いだから出て……！と必死に祈りながら、男たちに見つからないように表通りに背中を向けた。
呼び出し音が三回ほど鳴ってから、「もしもし、ひかるか？」といつもの声がした。
「助けて！」
私は男たちの動向に注意しながら、気づかれないように小声で言った。
「どうした？」
「今、渋谷で変な男たちにからまれちゃって……」
「渋谷のどこだ？！」
翔お兄ちゃんの声が上ずっている。住所がわからないことに気づき、私はハッとした。どう伝えればいいんだろう……。迷った挙句に、目に入った風俗店の看板をいくつか見つけ、そのまま店名を伝えた。四軒目の店名を伝えたところで、茶髪男が突然こちらに向かって走ってくるのが見えた。
「テメェ！　電話なんかかけやがって！」
野球帽男は慌てた様子で吸っていたタバコを地面に落とし、足で火をもみ消した。二人は私にじりじりと迫ってくる。そして、ニヤけた顔で「電話をよこせ」と茶髪男が言った。
「こいつ、誰かと話してたぜ。ヤバくねえか？」
茶髪男は、野球帽男の顔色を伺うように聞いた。
「なぁ、お前どこにかけたんだよ」
茶髪男が脅すような口調で言った。
「学校の先生……です」
「はぁ？　お前、何言ってんの？　もしかして、マジで女子高生と

か？」
野球帽男は興味深々といった顔つきで私を見た。
「高校生を獲物にできるなんてラッキーだな、俺たち」
茶髪男は満足そうに口角を上げる。そして、「さぁて、味見でもさせてもらうか」「いいねぇ、女子高生は可愛くて」などと口々に言いながら、二人は距離を縮めてきた。
怖い……。野球帽男の顔があと数センチというところまで近づいてくる。
「こいつ、マジで怖がってんぞ。ほら、足がぶるぶる震えてやがる」
二人は低い声で笑いながら「こいつ、処女だったりしてな」と軽く言い放った。
「やめてください！　お願いだから、触らないで！」
必死の抵抗もむなしく、野球帽男に両手を強くつかまれ、頭上で押さえつけられた。そして、セーラー服の胸元で結んでいる赤いスカーフを外され、服の上から胸元をまさぐられた。
「イヤー！」
あまりに気持ち悪くて大声を出した。その時――バシン！　という大きな音が鳴り、頬に強い痛みが走った。口の中が切れたようで、血の味がじわっと広がる。あまりの痛さとショックで全身から力が抜けていくように感じた。もう私、ダメかもしれない……。

危険な救出

抵抗することもできず、私はただただ絶望感に打ちひしがれていた。ここで犯されるくらいなら、喉を掻っ切って死んでしまいたい……。そう強く思った瞬間――。「ひかる！」という声が、耳の奥に響いてきた。

「おい、何やってんだ！」

ジーンズにブルーのチェックのシャツ、そしてグレーのパーカーを羽織った翔お兄ちゃんが、息を切らしてこちらに走ってくるのが見えた。

「先生！」

私は大声を上げた。その途端、茶髪男が「やべぇな。マジに来たぞ」と言い、焦ったような表情を浮かべた。だが、野球帽男は冷静な顔つきのまま、「どうせ一人で乗りこんできたんだ。一発殴りゃ片づくだろ」と、事も無げに言い放った。

「殴るなんて、そんなひどいことやめて！　翔お兄ちゃん、来ないで。こっちに来ないで！」

私は必死に叫んだが、翔お兄ちゃんは走るスピードを緩めなかった。そして私のそばまで来て、体を守るようにして自分のパーカーを私に着せ、後ろに隠れるように指示をしてきた。

「おいおい、お前ホントに先生なのかよ？」

茶髪男は、あからさまに小バカにしたような顔で翔お兄ちゃんを見た。

「お前ら、ひかるに何をしたんだ！」

「そんなの見りゃわかるだろ。これからゆっくり味見でもしようかって所だったのによ、邪魔しやがって」

茶髪男がそう言った直後、翔お兄ちゃんの拳（こぶし）が男の右の頬あたりに命中した。

「クソッ！」と声を上げて痛そうに顔を歪（ゆが）める茶髪男を尻目に、少

し離れた場所に立っていた野球帽男が低い声で笑い始めた。
「あのさ、お兄さん、ホントに俺らに勝てると思ってる？　先生のフリしてホントは兄貴なんでしょ？　妹を助けに来たのかもしんないけど、俺ら強いよ？　言っとくけど、ケンカだけは負けたことないからねぇ」
「お前、自分のしていることが恥ずかしくないのか！　こいつは高校生なんだぞ？　犯罪だってことわかってんのか？」
「犯罪、ねぇ。俺ら、ムショなんて怖くないんだよね。お兄さんみたいなお坊ちゃんとは違うんでね。この子、ひかるちゃんって言うんだ？　今夜、もらっちゃっていい？」
野球帽男は口元を緩ませて、あたかも自分が勝者であるかのようにせせら笑った。
「……ふざけんなよ」
翔お兄ちゃんは、お腹の奥底から絞り出したような低い声を出した。そして次の瞬間、野球帽男に殴りかかった。見事にわき腹に命中し、男は少し後ろによろけた。野球帽男がわき腹を押さえて壁にもたれかかり、茶髪男が頬を押さえてヨロヨロと立ち上がる。今しかないと思ったのだろう。翔お兄ちゃんは私の手を強く引っ張って「逃げるぞ」と言った。
全速力で数分走った後、もう大丈夫かと思って後ろを振り返ると、あの男たちがしつこく追いかけてきていることに気がついた。距離がどんどん狭まっていくのを見た私は、焦って気が動転し、その場で歩道の溝に躓(つまづ)いて転んでしまった。
「ひかる、立てるか？」
翔お兄ちゃんの顔は引きつりながらも、私の足を気遣っている様子だった。
「うん、大丈夫。ごめんね。早く逃げないと！」
「お前、一人で行け。駅はあっちだ。ここをまっすぐ行って、右に曲がると大きい通りに出る。そこまで行けば安心だ。いいか、まっすぐ家に帰るんだぞ。約束できるな？」

「え？　一人って何？　翔お兄ちゃんは？」
「いいから、早く行くんだ！　どっちにしろお前の足だと追いつかれる。だから一刻も早く逃げるんだ。俺が足止めして警察に突き出すから」
「一人じゃ危ないからダメだよ。置いて行けるわけないでしょ」
「ひかる、よく聞け。お前がここに残ると暴行される可能性が高いんだよ。俺はそんなの耐えられないんだ。そんなことになるぐらいなら、一発や二発、殴らせてやったほうがどんなにマシか……。あいつらの気が済むなら、それが一番いいんだよ」
翔お兄ちゃんは私の背中をぐっと押し、早く行けという仕草をした。たしかに、翔お兄ちゃんの言うことには一理あるのかもしれない。私がいると奴らの“カモ”になってしまうし、きっと足手まといになるだけだ。後ろ髪を引かれる思いを振り切り、私は全速力で駅までの道のりを走った。ただひたすら、翔お兄ちゃんが無事であることを祈って――。

消えかけた灯（ともしび）

あと数メートル先に渋谷駅が見えてきた頃、私は少し冷静になり、自分の愚かさに気づいた。なぜ初めから１１０番に通報しなかったんだろう。翔お兄ちゃんに逃げろと言われた時、すぐに電話をかけていれば良かったのだ。私は目の前にあった駅隣の交番まで走り、引き戸を開け、目の前に立っていた二十歳くらいの端正な顔立ちをした警官に「助けてください！」と叫ぶように言った。

「どうしましたか？」

同僚と談笑をしていた警官の顔色が一瞬にして仕事モードに変わる。「早く来てください！　先生が男たちに殴られているんです」と早口で言うと、「とにかく現場へ行きましょう。乗ってください」と警官はパトカーを指差した。私は来た道を思い出しながら道順を伝え、さっきの場所へ向かった。

数分で到着したが、先ほどの男たちの姿はもうなかった。翔お兄ちゃんの姿も見えない。

「あれ？　誰もいませんね。本当にここですか？」

警官は不思議そうな表情で振り返り、私を見た。車から降りてキョロキョロと辺りを見回してみたが、人影すら見当たらない。

「どうしよう……確かにここで別れたはずなのに」

「近くを確認してみましょう」

警官は柔らかく言い、懐中電灯を片手に辺りを探し始めた。小さな道路なので人通りはほとんどない。街灯もところどころ消えていて、なんだか気味が悪い。数秒後、警官が急に「ちょっと来てください！」と大声を出した。私もすぐに追いかけ、雑居ビルと雑居ビルの間の細い路地に入って行った。

「探していた人って、この方ですか？　僕はすぐに救急車を呼びますので……」

慌てた様子で警官は無線機を手に取った。私は恐る恐る、倒れている男性に近づいて行った。五、六歩近寄って顔を覗き込んだが、血だらけでまったく判別がつかない。男なのか女なのかもわからないほどに、顔が腫れあがっている。なんてひどい殴られ方なの……。もしこの人が翔お兄ちゃんだったらどうしよう――。言いようのない不安が胸をよぎる。

その時、見覚えのあるブルーのチェックのシャツが目に入った。顔の判別はつかなくても、服装は翔お兄ちゃんそのものだった。いくら否定したくても、この服はさっき見たものに違いない。

「嘘……」

体を揺さぶってみたが反応はなかった。ドクンと心臓が大きく波打つ。信じられない光景に私はただ茫然(ぼうぜん)とするばかりで、泣くことも喚(わめ)くこともできなかった。

救急車とパトカーのサイレンが自分の至近距離で停まり、ストレッチャーを持った救急隊員二人が慌ただしくこちらへ向かって走ってきた。そして、救急隊員は険しい表情のままで「ちょっとすみません」と言い、私の手を翔お兄ちゃんの体から振り払った。慣れた手つきで翔お兄ちゃんを車両の中に入れると、けたたましいサイレンを鳴らして去って行ってしまった。

「さっき先生って言ってたけど、被害者は君の先生なのかい？　何があったのか事情を話してもらえるかな？　目撃証言が犯人を探す手掛かりになるからね」

警官の質問に、私はまっすぐ前を見つめたまま首だけを縦に振った。

「まずは署に戻ろうか。」

警官は二台停まっているパトカーのうち、先頭のパトカーの後部座席に私を乗せ、先ほど到着した中年の警官二人に会釈をしてから、私の隣に座った。

「あの人たちがちゃんと現場検証をしてくれるからね。心配しなくても大丈夫だよ」

「あの、先生は……助かるんですよね？」
車に乗ったとたん、涙があふれるようにこぼれ出た。
「私のせいでこんなことに……。先生は何も悪くないのに……」
「あの容態だと重傷は免れないかもしれない。でも、きっと大丈夫だ。一緒に祈ろう」
警官は優しい笑顔を浮かべ、私をなだめるように言葉に力を込めた。

至心の祈り

事情聴取を終えて警察署を後にした私は、ひどく重い足取りでとぼとぼと駅へ向かった。翔お兄ちゃんがどこの病院に搬送されたのかを聞いても、警官は誰ひとりとして教えてくれなかった。個人情報保護法というもので家族以外には教えられないと言うのだ。電車のホームに立っていると、銀色の車体に緑色の線が入った電車が目の前をサーっと駆け抜けて行った。胸を渦巻く重苦しく不安な気持ちは時間が経つごとに膨らんでいく。

何もできない悔しさに涙がこぼれ落ちた。瞳から流れ落ちる雫が、頬を伝い、ぽたっと地面に落ちる。不意にざーっという音が聞こえた。外を見ると、バケツをひっくり返したかのような雨が降り始めていた。まるで私の心の中を表わしているかのような降り方に、妙な安心感を覚えた。この雨の音と一緒に、私も消えてしまいたい。夜の闇と一緒に、私をどこかへ連れて行って――。

気がつくと、私は見慣れない部屋でベッドの上に横わたっていた。

「あの……」

小さく声を上げると、そばにいた中年の看護師が安心したような笑顔を見せた。

「気がついたのね」

「ここは……？」

「病院よ。駅で倒れて、救急車で運ばれてきたの」

「ここに、桜庭翔太って人が来ませんでしたか？　殴られてけがを負っていると思うんですが……」

「ここら辺ではうちが夜間の救急当番だけど、患者さんの個人情報までは教えられないのよ。ごめんね」

看護師さんは申し訳なさそうに言い、忙しそうにバタバタと病室を出て行った。私は、スカートのポケットの中で何かが振動してい

るのに気づいた。手で探ってみると、携帯電話がマナーモードのまで着信を知らせていた。一度は茶髪男に携帯電話を奪われ地面に叩きつけられたが、後で翔お兄ちゃんが拾って私のスカートのポケットに入れてくれたのだ。画面を開くと、「着信あり」という文字が目に飛び込んでくる。お母さんとお父さん、理香からそれぞれ数回着信があったようだ。

私は、自力でベットから立ち上がると、点滴の針をすっと抜いた。ピリっとした痛みはあったが、そのまま止血もせずに廊下へ出た。深夜の病院は思ったよりも暗い。常備灯はついているが、スムーズに歩くのは困難に感じた。隣の病室のドアを開け、私は静かに足を踏み入れた。そして、一人ひとりの患者の顔とベッドの脇にある名札を確認する。すべての病室を回ったが、結局、翔お兄ちゃんは見つからなかった。私はそれでも諦められず、赤いランプが点灯している手術室の前までやってきた。そして、「手術中」と書かれたランプの下で体育座りをした。

翔お兄ちゃんからもらった指輪をぎゅっと力をこめて握り、ただひたすら祈りをささげる――どうか私の願いを聞いてください。翔お兄ちゃんを助けてください。私の命の代わりに、あの人を救ってください。

瓜二つの弟

「もしかして、ひかるちゃん？」
ほんわかとした優しい声が私の名を呼ぶ。パッと顔を上げると、そこにはベージュのチノパンに紺色のパーカーを着た翔お兄ちゃんらしき人物が暗闇の中で立っていた。
「もう大丈夫なの？　ケガはなかったの？」
私は立ちあがり、飛びつくようにして翔お兄ちゃんの胸に飛び込んだ。
「ひかるちゃん……？」
「無事に生きててくれて本当に良かった」
「俺、弟の修哉（しゅうや）だよ」
間違えた！　私は慌てて修哉さんの背中に回していた手を引っ込め、二歩ほど後ずさりをした。
「ご、ごめんなさい！」
「会うのは十年ぶりだから無理もないよ。俺のこと覚えてない？」
「覚えてます……」
私は恥ずかしさに顔を赤らめた。手術中の翔お兄ちゃんが健康体で目の前に現れるはずなんてないのに……。勘違いをしてぬか喜びをしてしまった自分がどうしようもない間抜けに思える。
「兄貴、大丈夫かな。怪我の状態とか聞いてる？」
「いえ」
「チンピラに殴られて頭に怪我を負ったって警察から聞いたけど。兄貴がなんでこんな時間に渋谷の風俗街にいたんだろ」
修哉さんは不思議そうな顔で、首をかしげた。
「あの、私が……私が悪いんです」
「え？　ひかるちゃんと兄貴、一緒だったの？」
「はい。変な男に襲われそうになったのを翔お兄ちゃんが助けてくれたんです」

「そうだったんだ」
「ごめんなさい。本当にごめんなさい」
人前では泣きたくないのに、無意識のうちに涙が頬を濡らす。
「謝らないで。きっと無事だから」
修哉さんは私に近づいて、ポケットティッシュをさっと差し出した。
「ひかるちゃんがいてくれて助かるよ。うちは、親父もおふくろも都内にいないんだ。今は仙台に住んでる。連絡は入れたけど、ここに着くまでだいぶかかるだろうし。まぁ親がいるよりも、兄貴はひかるちゃんがいてくれた方が喜ぶと思うけどね」
「私がいても意味ないんです。翔お兄ちゃんに何もしてあげられませんから。いつものように足手まといになるだけです……」
「いや、兄貴はひかるちゃんのことそんな風に思ってないと思うな。北海道に住んでた時もずっとひかるちゃんの写真を持ち歩いてたし。多分、今でも財布に入れたままなんじゃないかな。あ、それからね、チワワの名前だって一番最初は“ひかる”ってつけてたんだよ。いかにも兄貴らしいよな、好きになったら脇目も振らず一直線に突き進んでいく所がさ」
「じゃあ、十年前から私のことを……？」
「そうだね、十年越しの愛だね。高校の時も兄貴はすっげーモテてたんだけど、全部断ってたんだよ」
「修哉さんは私たちのこと、反対しないんですか？」
「反対？　どうして？」
「だって、教師と生徒なんですよ」
「うん、知ってる」
「私たちは付き合えないんです」
「世間一般的にはそうだよね。でも、俺は兄貴の気持ちが痛いほどわかるからなぁ。十年間の想いを知ってて反対するのは可哀想だと思ってさ。俺は別に教師だろうが生徒だろうがいいと思うんだけどな。恋愛なんて自由だろ。どっちかが既婚者ってわけでもないんだ

し」
修哉さんは、白い歯を見せてニッと笑った。
「なんか嬉しいです。今まではほとんどの人が反対だったから……」
「俺、しばらく留学してたからな。もしかしたら、普通の日本人とは違う意見を持っているのかもしれないなぁ」
その時、手術室の自動ドアが静かに開いた。中から、ストレッチャーを持った二人の看護師さんが足早に出てくる。私は翔お兄ちゃんの顔を一目見ようと、慌てて駆け寄った。だが、マスクをした看護師さんに「今は駄目です」と強い口調で止められ、ハッキリと目視することはできなかった。その後、すぐに手術着を着た医師らしき人物が、「ご家族の方は？　お話があります」とこちらを見た。私の隣にいた修哉さんは「弟です」と名乗り、医師の後ろについて個室へ入って行った。

父娘の亀裂

三、四分ほど待っていると、ガラっと引き戸が開いて修哉さんが出てきた。私は駆け寄って行き、「どうでしたか？」と噛みつくような勢いで聞いた。

「あぁ、大丈夫だ。肋骨の骨折以外は、顔の傷もすぐ治るだろうって。骨だって若いからすぐにくっつくって言ってたよ。ただ、しばらくは家族以外は面会できないらしい」

「じゃあ、無事だったんですね。良かった……本当に良かった……」

嬉しくて全身に鳥肌が立つ。体中から“不安”という文字が消えたように感じ、無意識に顔がほころんだ。

「ひかるちゃんはもう遅いし帰った方がいいよ」

「あ……」

安堵した途端、私は自分が救急車で運ばれてここに来たことを思い出した。携帯電話を取り出し、慌ててお母さんに電話をかける。

「もしもし？　ごめんね、電話できなくて。今、病院にいるの。駅で倒れちゃって」

お母さんはホッと胸を撫で下ろしたような声で、「夜中まで連絡もないし、捜索願を出そうとしたところだったのよ。すぐ病院に行くからそこにいて」と言って電話を切った。

「修哉さん、私帰りますね」

「一人じゃ危ないから送って行くよ」

「いいえ、お母さんが迎えに来るので大丈夫です」

私は、すぐに病院の外へ出た。一人、ロータリーの前でお母さんの迎えを待つ。十五分ほど待ったところで、お母さんがタクシーから降りてきた。そして、私の手を取って「心配したんだよ。いったいどういうことなの？　どうして渋谷の病院にいるの？」と矢継ぎ早に質問をした。

「心配かけてごめん、渋谷駅で倒れちゃったの」

「もう治ったの？　どこが悪かったの？」
「貧血だと思う。考えたら朝から何も食べてなかったし、ここ最近ストレスが多かったから」
「そうなの？　本当に治ってるの？　家に帰っても平気なのよね？」
青白い顔をして泣きそうな表情を浮かべるお母さんを見ていると、これ以上心配をかけてはいけないと感じた。

タクシーから降りて自宅のドアを開けると、お父さんがイライラした様子で私を待っていた。
「ひかる！　お前、何時だと思ってる。どこに行ってたんだ」
「病院」
「どこか悪いのか？」
「ただの貧血だから平気」
「その前はどこにいたんだ」
「駅」
私は面倒臭そうに答えた。
「駅に何時間もいたっていうのか」
お父さんの顔を見ていると、嫌でもＤＮＡ鑑定書のことが思い出される。必死に忘れようとしても、“否定”という二文字が脳裏に浮かんできてしまうのだ。
「関係ないでしょ。心配するフリはやめて」
「その言い方はなんだ！」
「もう嘘をつくのはやめない？　私たち、本当の親子じゃないんでしょ。ＤＮＡは嘘をつかないもんね。ねぇ、どうして本当のことを言ってくれなかったの？」
「お前、もしかして見たのか……」
「あなた、私に内緒で鑑定をしたんですか」
お母さんはお父さんの腕をつかみ、真剣な表情で頼み込むように言った。だが、お父さんの表情は硬いままで、何も言わず二階へ上がってしまった。そして、静かに書斎のドアを開け、中に消えてい

った。

記憶喪失（前書き）

本小説『永遠(とわ)の愛』をお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいました。ありがとうございます＾＾　すごく嬉しいです！これからもよろしくお願い致します♪

記憶喪失

悪夢のような事件から三日経った月曜日。三年A組の教室に入ると、理香がドアの所まで駆け寄ってきて私に言った。
「ちょっと！　金曜日なんで電話に出てくれなかったの？　すごい心配したんだよ」
「ごめんね、色々あって……」
「あ、そうそう。ひかる、知ってる？　先生、今日休みだって」
「うん。私のせいでケガしちゃったから」
「どういうこと？」
私は、あの出来事を洗いざらい理香に話した。
「信じられない……」
理香は絶句した様子で首を横に振った。
「それって、ひかるを守ってケガしたってことだよね」
「うん。先生がいなかったら私、今頃どうなっていたかわからない」
「先生は命の恩人か……」
「今日ね、放課後にお見舞いに行こうと思うの。理香も行かない？」
「いいよ。先生の様子を見に行かないとね。私も気になるし」
「土曜も日曜も病院に行ったんだけど、まだ家族以外は入れない状態だったの。意識が戻らないんだって……」
「でも、弟の修哉さんだっけ？　その人は、たいした怪我じゃないから大丈夫だって言ってたんでしょ？」
「うん……」
返事をしながら、私の心は再び不安に支配され、嫌な予感が頭をよぎった。

放課後――病院のエレベーターで五階へ行き、足早に病室へ向かう。だが、ドアの前のプレートに翔お兄ちゃんの名前はなかった。週末に見に来た時はあったはずのに。私は廊下を歩く看護師さんに

「桜庭翔太の妹なんですが」と嘘をつき、新しい病室がどこかを聞き出した。“妹”というのは、罪悪感もなく咄嗟(とっさ)に出た嘘だった。とにかく今は翔お兄ちゃんの居場所を突き止めなければ……と思ったのだ。看護師さんに教えてもらった通り、エレベーターで三階まで下りる。再度翔お兄ちゃんの名前を部屋の前にかかっているプレートで確認し、静かに引き戸を開けた。

「先生？」

理香は私より先に中に入った。だが、中からは物音ひとつしない。四人部屋のようだが、廊下側のベッドに寝ていた八十歳くらいのお爺さん以外は、誰も部屋にいなかった。「先生？」ともう一度理香が言った直後、お爺さんが昼寝から起きたようで、伸びをしているのが見えた。私は近くまで行き、「ここに桜庭って若い男の人いませんか？」と聞いてみた。

「え？　お嬢さん、もっと大きい声で話してくれるかい？」

お爺さんは少し顔をしかめた。

「ここに、桜庭って男の人が今日移ってきませんでしたか？」

「あぁ？」

「今、どこに行ったかわかりますか？」

「さぁね」

埒(らち)が明かないので、お爺さんに質問をするのは諦めた。病室を出て右側に目をやると、十数人の人がお茶を片手にテレビを観たり、雑誌や新聞を読んだりしているラウンジのような場所が見えた。理香を呼び、私たちはラウンジへ行って探してみることにした。すると、窓際のテーブルに修哉さんと翔お兄ちゃんのお母さんらしき人が向かい合って座っているのが見えた。修哉さんはジーンズに白っぽいパーカーを着ている。翔お兄ちゃんのお母さんは昔からスラっと背が高くて、色白美人だ。セミロングの黒髪に淡いブルーのスーツがよく似合う。恐らく五十歳代なんだろうけど、四十代前半、いや三十代後半といってもおかしくないほど若く見える。大きくてパッチリした目は翔お兄ちゃんや修哉さんにそっくりで、やっぱり親

子なんだなと私は改めて実感した。
「修哉さん！」
私は小走りで駆け寄って行き、笑顔で声をかけた。
「お、ひかるちゃんか！　兄貴なら今トイレに行ってるよ」
「私の友達の吉岡理香さんです。今日は二人でお見舞いに来ました」
理香は、二人に向かって会釈をした。
「わざわざ来てくれてありがとう。あなたがひかるちゃんね。随分と大きくなったね」
翔お兄ちゃんのお母さんは、小さく微笑んだ。そして、切なそうな声で話を続けた。
「あのね、今日は話しておきたいことがあるの。ショックだろうけど、聞いてほしいの」
心臓がドクンと高鳴る。
「うちの翔太ね、今朝目を覚まして一般病棟に移ったんだけど……記憶障害が残ってしまったの」
理香と私は、予想外の言葉に声を失った。
「部分記憶喪失と言うらしいわ。一応、翔太に会う前に伝えておいた方がショックが少ないと思って。突然こんな話をしてごめんなさいね」
翔お兄ちゃんのお母さんは、辛そうな表情を浮かべ、ゆっくりと言葉を選ぶように話した。

そこへ、ブルーと白のチェックのパジャマを着た翔お兄ちゃんがこちらに向かって歩きながら、手を振っているのが見えた。
「先生！」
私はその場で立ちあがり、大きく手を振り返した。
「制服ってことはうちのクラスの生徒かな？　わざわざお見舞いなんて嬉しいよ。でもこんな姿で恥ずかしいなぁ」
翔お兄ちゃんから発せられた言葉に、私は耳を疑った。
「え？　先生……私だよ。ひかるだよ？」

「ごめんな、頭を打っちゃったらしくて記憶が定かじゃないんだよ。えっと、君はひかるさんだね」
「何言ってるの？　翔お兄ちゃん、私だよ」
「ん？　名字が思い出せないや。悪いな」
翔お兄ちゃんは申し訳なさそうに言って椅子に腰をかけた。
「本当に忘れちゃったの？　私のこと、覚えてないの？」
「今はちょっと思い出せないんだ。すまない」
「そう……なの……？」
私はあまりのショックに心臓がぎゅっと握られたような感覚に陥り、急に胸が苦しくなった。目の前にいる翔お兄ちゃんは、私の知っている翔お兄ちゃんではなかったのだ。

標的（前書き）

本日、新たに本小説『永遠(とわ)の愛』をお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいました。とっーても嬉しいです！ありがとうございます☆　これからもどうぞよろしくお願い致します♪
最近、お気に入りの登録数の増減が激しいので、見落としがあるかもしれません……。改めて登録していただいた皆様に御礼を申し上げます＾＾

標的

どうしてここに来たのかは自分でもわからない。だが、気がつくと私はどんぐり公園でブランコに座っていた。翔お兄ちゃんの記憶がなくなってしまったのは私の責任だ。あんな男たちに絡まれたのは、自分に隙があったせいなのだから。私が電話で助けを求めたせいで、何の罪もない翔お兄ちゃんを巻き込んでしまった。それなのに、今私の心はこう叫んでいる「翔お兄ちゃん、私のことを忘れないで。あの気持ちを忘れないで」って。そう自覚すればするほど、ひどい自己嫌悪を感じる。――私ってどうしてこんなに自分勝手なんだろう。

その時、カバンの中に入った携帯電話から着信音が響いた。

「もしもし」

「ひかる、今どこ？　何も言わずに急にいなくなったからビックリしたよ」

「公園にいるよ。ごめんね、理香のこと置いてきちゃって。まだ病院にいるの？」

「いや、さっき出たところ。ひかる、先生は完全に記憶を失っているわけじゃなかったみたいだよ。話した感じだと、高校の先生をしていることは覚えていたし、家族のことも問題なく覚えているみたいだった。医者の話だと、外傷のほかに強いストレスが重なったことも記憶喪失の原因らしいよ。でも、一過性のものだから、回復する可能性も高いって言ってた。小さなきっかけで治ることもあるらしいよ」

「そっか、強いストレスもあったんだ……」

「気を落とさないで。ね？」

「うん、ありがと」

「ひかるが元気ないと、先生だって悲しいはずだよ」

「そうかな？　私のことなんて覚えてないみたいだったけど」

「大丈夫。すぐに思い出すよ」

翔お兄ちゃんが学校から姿を消してもうすでに十日が過ぎていた。クラスでの私の立場は相変わらず“目障りな存在”だったが、彩夏グループ以外の人間はたいして興味も関心もないようで、取り立てて大声で悪口を言われるような事もなくなっていた。そう、この日の朝までは――

「みんな聞いて！　担任がずっと休んでる理由、知りたくない？」

得意げな声の彩夏が、教壇の上に立ってクラスを仕切り始めた。教室で各々談笑をしていた女子たちは、一様に戸惑いを隠せないような表情を浮かべ、ヒソヒソとグループ内で「どうする？」などとささやき合っている。彩夏はタイミングを見計らったように、教室の後ろの方に固まっていた取り巻きたちに目配せをした。すると、「知りたい」とか「ここで言って」と取り巻きたちが口々に言い出し、クラスの女子たちもあっという間に同調する雰囲気になった。私は嫌な予感がしていた。彩夏と中田先生は繋がっているのだ。先生方しか知りえないような情報を握っていてもおかしくはない。

「うちのクラスのある人が、先生に怪我を負わせて入院させたんだよ。信じられないでしょ」

「やめなよ！」

理香が大きな声で彩夏を制する。だが、クラス中の目線は、私の味方をする理香にも冷たかった。彩夏は理香を一瞥（いちべつ）しただけで、「勝手に彼女気取りになってイイ気になってんのがここにいるんだよね」と続けざまに言った。

「え、彼女って何それ」

腰まである長い髪の毛をポニーテールでまとめた学級委員の大滝さんが叫ぶように言って椅子から立ち上がった。

「詳しい話を聞きたい人、手あげて」

彩夏の声に女子が一人、また一人と手をあげた。

「多数決だと、過半数は超えてるよ」

彩夏の取り巻きの一人が、急かすように言った。
「では、今から裁判を始めます。教師を誘惑して大怪我を負わせ、入院までさせた犯人は、有罪でしょうか？　それとも無罪でしょうか？」
急に彩夏の口調が変わった。さっきまでの馴れ馴れしい態度とは打って変わり、鋭い言い回しでクラス中を見まわしている。
「みんな！　おかしいよ。こんなの間違ってる」
理香が必死に止めようとして、教壇の上に上がって大声を出した。だが、彩夏は再び無視をし、「もう犯人はわかっているのにね」と言ってニタっと笑った。
「ちょっと、それはやりすぎじゃない？」
大滝さんが、クラスの女子を見回して仕切るようにして言った。
「罪は償ってもらわなきゃ。そうでしょ？　大滝さん」
「え……」
「学級委員のくせに、クラスメイトの過ちを見て見ぬふり？」
「それは……」
「とにかく、犯人はみんなの前で自首するように。釈明があるならどうぞ。期限は、今から二十四時間です」
彩夏の発する一言一言が私の心に重くのしかかる。犯人というのは、まぎれもなく私のことだ。彩夏の指示通り、このまま名乗りをあげるべきなのか……私に残された時間は二十四時間しかない――。

裁判

四時間目の生物の授業は、翔お兄ちゃんがいないせいで自習になった。生徒たちは配られたプリントそっちのけで、嬉しそうにグループをつくっておしゃべりに花を咲かせている。理香も私の机にやってきて心配そうな顔をしながら、「朝のことは気にするんじゃないよ」とか「彩夏って最低だわ」などと呟き始めた。

「彩夏は誤解してるんだと思うの。中田先生の姪っ子だって言ってたし。事実無根の話を聞いてそれが真実だって信じ込んじゃってるんだよね、きっと」

私は自分に言い聞かせるように言った。

「え？　あの子って保健室のお姉さんと親戚だったの？」

「うん。前に更衣室に閉じ込められた時、寛子さんと翔お兄ちゃんは付き合ってるって言ってた。私が誘惑して奪ったって思ってるみたい」

「だからさっき、裁判とか罪を償うとか変なことを言ってたんだね」

「私、やっぱり誤解は解くべきだと思うの。このまま、浮気だとか誘惑したとかそんな風に思われたくない」

「そっか……。ひかるの気持ちもわかる。だけどね、誤解がさらなる誤解を生むことだってあるんだよ。本当に大丈夫？」

「中田先生には負けたくないの。あの人の操り人形になるのはもう嫌だから」

私は覚悟を決めて立ち上がり、教壇の上に立った。

「みんなに言いたいことがあります」

私の一言で、教室がシーンと静寂に包まれた。

「私は、桜庭先生のことが好きです。そして、私のせいで事故に遭ってしまいました」

クラス中がざわざわし始める。彩夏はその場に立ち上がり、「ついに犯人が白状したわ」と大声で言った。

「犯人って言い方はやめて。たしかに今回の事故の原因は私だけど、恋をするのは罪じゃないでしょ」
「よくそんな事が言えるね。寛子さんとの仲をあんたが引き裂いたんでしょ」
彩夏の声はよく通る。クラスの女子たちが引きつったような顔をして私を見つめていた。
「私は他人(ひと)の彼氏を奪ったりしてない。桜庭先生は中田先生とは付き合ってないって言ってたし」
彩夏はいきり立った様子で黒板の前まで来て、私から十五センチくらい離れた場所に立った。
「みんな、これを見て！」
一斉にみんなの目が彩夏の手元に集中する。そこには、中田先生と翔お兄ちゃんが映っている写真が握られていた。中田先生が私に見せてきた写真とまったく同じものだった。
「ちょっと、あれ……」
教室中が大きくざわつく。
「ここに証拠があんのよ。二人の仲を引き裂いたのはあんたでしょ？　違う？」
彩夏が機嫌の悪そうな顔で私を睨みつけた。
「その写真は私も見ました。でも、桜庭先生に聞いたら酔っぱらっていたから覚えてないって」
「それで釈明のつもり？」
今度は、学級委員の大滝さんが椅子から勢いよく立ちあがって言った。
「私、渡瀬さんみたいなタイプの人って許せない。不潔すぎる」
大滝さんの一言で、空気が変わった。クラス中が学級委員の味方というような顔をしている。正義感が強く、誰にでも平等に接することができる彼女は、女子の間で人望が厚い。そのせいか、普段は目立たないような生徒までもが「人の彼氏を奪うってひどくない？」とか「最低」などと一斉に私を非難し始めた。

「本当なんです。私と先生は昔からの知り合いで……」
「だからもう聞きたくないんだって。略奪愛とか、禁断の関係とか、聞いてるだけで胸がむかむかしてくる。そういう人って本当に嫌」
いつもの大滝さんではないようなピシャリとした口調に、私は何も言えなくなってしまった。
――こうして三年A組の裁判官である大滝さんは、検察官である彩夏からの証拠品を得て、陪審員であるクラスメイトたちの前で、私に有罪を突きつけたのだった。

嵐の前兆

あの裁判の日以来、学校での私はまるで空気のような目に見えない存在になっていた。ふと、昔誰かが“最大のイジメは無視である”なんて言っていたのを思い出す。集団という力を利用し、一人を攻撃の対象にして団結力を強めてしまうのだから、女子というのは本当に恐ろしい生き物だ。

重苦しい気持ちのまま教室のドアを開けると、理香が笑顔で駆け寄って来た。

「ねぇ、今日二人で先生の所に行かない？」

「どうしようかな」

私はあの日、翔お兄ちゃんの記憶喪失を目の当たりにしてから、病院へ行くのが怖くなっていた。

「行こうよ、ね？」

「いや、やめておこうかな」

「ひかるが行かないって言っても私は行くよ。先生の様子が気になるし」

「今回はいいや、ごめんね」

「わかった。新しいことがわかったら電話するからね」

理香は一瞬残念そうにしていたが、気持ちを切り替えたのか笑顔のままで自分の席へ戻って行った。

学校が終わるとすぐに帰宅し、ベッドの上にゴロンと横たわるのが最近の私の日課になっている。学校での私は何重もの殻を被る。無視という攻撃から身を守るのにいっぱいいっぱいで、心身ともに疲れきっているのだ。心の充電をするためにも、私はなるべく学校にいる時間を短くするようにしていた。

受験勉強もそっちのけで、本棚から小学生の頃に愛読していた漫画を手に取る。パラパラとページをめくったところで、通学カバン

に入っていた携帯電話からけたたましく着信音が鳴った。
「もしもし？」
「ひかる、ヤバいよ！　早く病院に来て」
「どうしたの？」
「あの人が来てるんだよ」
「誰？」
「保健室のお姉さんが、病室に入り浸りなんだってば」
「今もいるの？」
「うん」
　中田先生が絡むとロクなことが起こらない。今回も記憶喪失を利用して、翔お兄ちゃんに何か変なことを吹きこんでいるかもしれない。私はざわざわする気持ちを抑え、大急ぎで駅へ行き、到着駅でバスへ乗り換えて病院に向かった。

偽りの恋人

病室のドアを勢いよく開けると、理香の言った通りの光景が広がっていた。花柄のワンピースにデニム地のジャケットを羽織った中田先生が、赤いハイヒールを履いたままベッドの脇に腰をかけ、水色のパジャマを着た翔お兄ちゃんに小さく切ったりんごを食べさせている。理香はそんな二人を睨むようにして、窓側の小さな丸椅子に腰をかけていた。

「ひかる！」

理香は私を見つめ、緊張で顔をこわばらせたまま小さく手を振った。

「おぉ、来てくれてありがとな」

翔お兄ちゃんの顔がほころぶ。でも、その笑顔は特別なものではなく生徒に向ける一般的な“教師スマイル”な気がして、私はガッカリした。まだ記憶は戻ってないんだ……。

「あら、渡瀬さんじゃないの。お久しぶりね。先生のお見舞いに来たの？　健気ねぇ」

中田先生の甘ったるい声に、私は心を掻きむしられるようなイライラを感じた。

「普通に歩けるようになったし、だいぶ顔色も良くなったのよ。もうすぐ退院できるかもね」

中田先生はあたかも自分が恋人であるかのように、翔お兄ちゃんの肩に寄りかかって笑顔を浮かべた。

「いやー、寛子さんが毎日こうやって世話をしてくれるから助かるよ」

「毎日って……？」

私は絶句した。まさか、中田先生が毎日翔お兄ちゃんの病室に入り浸っていたなんて想像もしていなかったのだ。そして次の瞬間、中田先生の口から衝撃の一言が発せられた。

「だって、私たち恋人同士よ。なにも遠慮することなんてないわ」
「でも俺は寛子さんのことを覚えてないんだよ。なんだか悪いよな」
翔お兄ちゃんは申し訳なさそうな顔を浮かべながらも、照れたようにニッと笑って中田先生の方を見た。
「ひかる、行こ！　こんなの見せつけられちゃ居づらいよね」
理香は私の腕を強くつかんで、ドアの方へ引っ張った。そして、そのまま引き戸を開け、廊下へ出た。
「ひどいでしょ。あの人、先生に嘘を吹きこんでるんだよ」
理香は興奮したような声で、ため息混じりに口を開いた。
「翔お兄ちゃんは魔女とか言ってあんなに中田先生のことを嫌ってたのに。理香、こんなの耐えられないよ」
「どうにかして記憶を呼び戻さないと……」
「ねぇ、コソコソと何の相談？」
いきなり背後から、中田先生がぬっと顔を出した。にこやかな表情を浮かべているが、その裏に隠し持った牙が垣間見えるようで悪寒が走る。だけど、私だってここで負けてはいられない。勇気を振り絞ってお腹の底から声を出した。
「記憶喪失だからって嘘を吹きこむのはルール違反です」
「ルール違反？　あなたの方が道徳違反でしょ。教師と生徒が堂々とタブーでも犯そうってわけ？　あなたの親はどういう教育をしてきたんでしょうねぇ。高校生のくせに教師を誘惑して、それで私たちは付き合っていますってよく言えたもんだわ。そんなの道理が通らないわよ！」
「親のことを悪く言うのはやめてください。これは私と先生の問題ですから」
「生意気言うんじゃないわよ。私は本気よ。翔太くんと付き合うためならなんだってする。私はね、あの人を高校時代から想い続けてきたのよ」
「え？」
「私が高校三年の時、翔太くんは一年だった。あれからずっと、彼

のことが好きで忘れられなかった。四月に教職員同士として再会できて、これは運命だって確信したのよ」
「でも、先生は中田先生とは酔った勢いで一晩過ごしただけだって。好きとかそういうのはないって言ってました」
「あなたはそんなこと言える分際じゃないでしょ。翔太くんを怪我させたんだから。あなたの望みは何なの？　これ以上、翔太くんを傷つけたいわけ？　あなたには彼を守ることなんてできないの。ただ足手まといになるだけ。もう彼のことは諦めなさい。翔太くんを世界で一番愛して幸せにできるのは私しかいないんだから」
「そんな……」
「今日、ここで翔太くんの顔を見てわかったでしょ？　事故に遭った後、やっと私の気持ちに気づいてくれたの。だから、もう悪あがきはしないことね。それから、私が翔太くんの婚約者だってことを学年主任にはハッキリ言っておいたわ。渡瀬さんとの関係を疑ってたみたいだけど、私の一言ですぐに解決したわよ。翔太くんはこれでクビにならずに済んだの。彼の人生を狂わせたくないなら、渡瀬さんは身を引くべきじゃないの？　ねぇ、彼をクビにさせたいの？　させたくないの？　よく考えて決めてちょうだい」
「婚約者ってどういう……」
「私たちは事故前から婚約していたの。ふふっ。私、そういうシナリオを書いたのよ」
　中田先生はニヤリと不敵に笑うと、左手の薬指に光る指輪をこれ見よがしに私の目の前にかざしてきた。

壊れた心（前書き）

新たに本小説『永遠(とわ)の愛』をお気に入り登録してくれた方がいらっしゃいました。継続的に読んでいただいてすごく嬉しいです！どうもありがとうございます＾＾　これからもよろしくお願い致します♪

壊れた心

私は先生の足手まといになっている――。中田先生の放った言葉が、頭からずっと離れない。自分でも自覚はあったが、他人からズバっと指摘をされると、より心に深く突き刺さる気がした。

中田先生との浮気を疑われ、学年主任の前で醜態をさらした揚句、チンピラに記憶が無くなるほど殴られた翔お兄ちゃん。私はそれを止めることもできず、ただ走って逃げるしかなかった。私には最初から翔お兄ちゃんの恋人になる資格なんてなかったのだろう。自分が惨めで情けない。私のせいで翔お兄ちゃんの家族までもが悲しみに暮れている。記憶を失った原因の一つがストレスだった事も私には大きなショックだった。恋人として、私は何をしてあげられたのだろう。結局この数ヶ月間、私は翔お兄ちゃんにストレスという苦しみを与え続けていただけの存在だったのかもしれない。

考えれば考えるほど、自分という存在が無意味なものに思えた。私がいることで、誰かが幸せになっただろうか。理香だって私さえいなければ、クラスから無視されることもなかっただろう。両親だって無理に結婚することはなかっただろうし、お父さんが血のつながりのない子を苦労して育てようとする必要もなかったはずだ。翔お兄ちゃんの家族にも迷惑をかけずに済んだだろうし、中田先生だって我欲むき出しな姿を晒(さら)して私を責め立てることはなかったのかもしれない。全て私が原因なのだ。私というこの存在が、周りの人を狂わせているのだ。

自分の部屋でベッドに腰をかけていた私は、その場でよろよろと立ちあがって少し歩き、机の引き出しからカッターを取り出した。そして、ためらうことなく渾身(こんしん)の力を込めて左手首に刃をあてる。目の前で、赤い液体が勢いよく流れ出た。だが、私は微塵(みじん)の怖さも感じなかった。それどころか、言いようのない安心感を覚えた。これで誰のお荷物にもならずに済む。これ以上、何の苦しみを抱える

必要も与える必要もないのだ。そう考えただけでスーッと気が楽になり、薄れゆく意識の中で沸き上がる幸福感を噛みしめた。

優しい光

気がつくと、私は膝丈の真っ白いワンピースを着て、丈の短い緑の草が生い茂る野原のような場所に立っていた。一面に色とりどりの花が咲き誇り、美しい蝶々が花の周りを舞う。奥に見える小高い丘の上には大きな木が一本生えており、そこで羊や犬、リスなどの動物たちが楽しそうに駆けまわっている。ここがどこかはわからなかったが、私はたまらなく楽しい気分になっていた。はしゃぎたい気持ちが抑えられなくて、「ヤッホー」と大きな声で叫ぶ。その時、向こうから黄色のラブラドールレトリバーが一匹、尻尾を振ってこちらに走ってくるのが見えた。あれ？　この子は……。向かいの家で飼われていた“まる”に違いなかった。五年ほど前に老衰で亡くなってしまった犬だ。まるが生きていた頃は、よく給食のパンをあげに行ったり、飼い主のおじさんに許可をもらって散歩に連れ出したりしていた。その場にしゃがんでまるをぎゅっと抱きしめると、まるも嬉しそうに尻尾を振って私の手をペロペロと舐めた。頭を撫でていると、まるが急に「僕についてきて」というような仕草をして何かに追い立てられるように走り始めた。私もあわてて後を追う。しばらく走っていると、突然目の前に一面のチューリップ畑が現れた。

「まる……？」

私は名前を呼んだが、すでに姿は見えなくなっていた。

紫のチューリップ。永遠の愛……。必死に忘れようとしていたあの人の顔が、ふと脳裏に浮かんだ。その時――。

「ひかる！」

突然、天から私を呼ぶ声がした。

「う……」

返事をしようにも声が出ない。喉に力が入って、苦しい――。

「ひかるの指が……指が動いたぞ！」
うっすらと視界が明るくなっていく。冷たくなった私の手を握る、温かいぬくもり。
「ひかる、お母さんよ！」
ぐずぐずと鼻水をすする音が部屋中に響き渡っている。お母さんは「先生を呼んでくるわ！」と言ってバタバタと病室を出て行った。
「まだ生きてるの？」
私は虚ろな目で天井を見つめた。
「すまなかった。お前にひどいものを見せてしまったな」
お父さんは私の手を握ったまま、かすれた声で話を続けた。
「もうこれ以上自分を傷つけるんじゃない。お父さんはお前を失いたくないんだよ。泣いてばかりのひかるを見ていられないんだ。辛いんだよ」
「本当の親子じゃないのにどうして心配するのよ」
「血のつながりが何だって言うんだ。たとえ実の親子じゃなくたって、いいじゃないか」
お父さんはふっと口角を上げ、優しく微笑む。こんなにも柔和な顔をしたお父さんを見たのは初めてだった。
「辛かったな、ひかる。学校でもイジメにあってたんだろ。俺は何も知らずにお前を傷つけてばかりだったな」
私は小さくため息をついた。裁判の日の記憶が鮮明に蘇ってくる。
「それに、桜庭先生はお前のことを忘れてしまったんだってな」
「知ってたの？」
「先生にそっくりの弟が、昨日吉岡さんと一緒にここへ来たんだよ」
「え……？　修哉さんと理香が？」
「弟は真剣な顔つきで、頭を下げてこう言ったんだ。――兄貴はひかるちゃんだけを十年以上も想ってきた。今も純愛を貫いてる。だから、教師ということを忘れて認めてあげてくれないかってね」
修哉さんのおだやかな笑顔を思い出し、胸が熱くなった。
「それから、この写真を俺に渡してきたよ。桜庭先生がずっと財布

に入れていたらしい」
お父さんがジャケットの内ポケットから取り出した写真には、八歳の私と中学生の翔お兄ちゃんが映っていた。二人ともとびっきりの笑顔でピースサインをしている。
「この頃のお前は本当に幸せそうだった。毎日笑ってたな。お前もずっと桜庭先生のことが好きだったのか？」
私はコクンと頷く。そして、ゆっくりと口を開いた。
「先生とのこと、認めてくれる？」
お父さんはゆっくりと首を縦に振り、「そばに居てやりなさい」と言いながら私の頭を撫ぜる。あったかい大きな手に、私は言葉にならないほどの幸福感を感じた。窓から差す優しい夕陽の光を背に、私は震える声で言った。
「お父さん、ありがとう」

実の父親

お父さんが照れたように病室を出て行った後、すぐにお母さんが医者を連れて戻ってきた。
「ひかるちゃん、具合はどうだい？」
以前入院した時もお世話になった横井先生が、優しい表情を浮かべて私の顔を見た。
「横井先生？」
「あ、覚えててくれたんだね。嬉しいなぁ」
横井先生は口元をほころばせて微笑んだ。
「先生、ひかるはどうですか？　もう大丈夫なんですか？」
お母さんは横井先生の横に立ってもどかしそうな声を出した。
「意識が戻ったのでもう心配ないでしょう。ただし、怪我が治ったら心療内科を受診してもらいます」
横井先生は穏やかな顔のまま、ハッキリした口調でそう告げた。
「心療内科、ですか？」
「はい。ひかるちゃんの心が安定するまでは何度もリストカットを繰り返すでしょうから。命に危険が及ぶ前に、心の傷も治してしまいましょうね」
「横井先生、心配かけてごめんなさい」
私は咄嗟（とっさ）に謝罪の言葉を口にした。
「ひかるちゃんは謝らなくていいんだよ。クラスのこと、そして学校の先生とのこともちらっと聞いてるからね。色んなことがあって辛かったんだよね」
「え？　誰がそんなこと……」
「吉岡さんと言ってたかな。ひかるちゃんが救急車で運ばれてきた日に、心の傷を治してあげてくれって僕の所へ頼みに来たんだよ」
「理香が私のため、に……？」
横井先生が温和な笑顔を浮かべたまま、首を縦に振った。そこへ、

若い看護師がバタバタと足音を立ててやってきて「先生、ちょっと！」と大声をあげ、横井先生に何か耳打ちをした。恐らく急患だったのだろう。横井先生は顔色を変え、「失礼」と言い残し、慌てた様子で走り去っていった。病室に残されたお母さんは、私の頬にそっと手を置いた。

「お母さんも一緒に心療内科に行くからね。だから不安に思わなくても大丈夫よ」

「うん……」

「ひかる、お父さんと何を話したの？」

「え？」

「廊下でさっきお父さんとすれ違ったんだけど、しわくちゃな顔で目も赤くなってたから。喧嘩でもした？」

「してないよ」

「あの人は九州男児だから、泣くってことは滅多にないんだけどね。とにかく照れ屋で頭が固いの。ありがとうっていう言葉さえも素直に言えないような人なのよ。だけどお母さんはそんなお父さんに惚れたのよねぇ。心根がとっても綺麗な人だから」

「ふぅん。だからお母さんはお父さんと結婚したの？」

「初めて会った時からお父さんを好きになっちゃったの。お母さんが猛アタックして射とめた相手なのよ。でもあの頃私は銀座のホステスだったから、向こうの親には結婚を大反対されたわ。結局、お義父さんとお義母さんの許しがないまま、駆け落ち同然で一緒になったのよ。今でも、そんな商売女を嫁にした覚えはないって怒鳴られるわ。あの頃は本当に辛かったわね……。でも、あの人は実家との縁より私との生活を選んでくれた。だから、お父さんとは喧嘩をしても、嫌いだって言われても、何をされてもお母さんは幸せなのよ。ああやって無骨（ぶこつ）に生きてる人だけど、本当は誰よりも優しい人なんだと思うの」

「お父さんとお母さんの夫婦喧嘩は、私のせいじゃなかったの？」

「ひかるは何も悪くないのよ。夫婦喧嘩は犬も食わないって言うく

らいだもの。お父さんって普段、愚痴も不満も言わない人でしょ？
　きっと寂しかったのね。その気持ちをわかってほしかったんだと思うわ。ここ数年はまともに会話もなかったから」
「お父さんは辛かったんだね。私、てっきり自分は愛されてないんだと思ってたの。だからいつも反抗的で……」
「ひかるが二度も命を絶とうとしたのを見て、お父さんなりに何かフッ切ったんだと思うわ。あんたが意識不明で眠ってたこの三日間、ご飯も食べずに祈るような顔でずっとここにいたんだもの。お父さん、離婚を考えた時、誰にも内緒でＤＮＡ鑑定をしたらしいの。でも、結果を見た瞬間にすごく後悔したって言っててね。何度も鑑定結果を見てひかるは自分の子じゃないって言い聞かせたんだけど、やっぱり心は娘を求めていたって。あんたが可愛くてしょうがないのよね、あの人は」
「お母さん……私、死ななくて良かった」
　私はシーツの裾をぎゅっと握りしめ、嗚咽を上げて泣き崩れた。久しぶりに流す嬉し涙だった。悲しくて辛い涙とは対称的で、凛（りん）とした温かさを自分の心の奥深くに感じた。
「私の本当の父親ってどんな人なの？　まだ生きているの？」
　私はずっと聞きたくても怖くて聞けなかった質問を口にした。
「もうこの世にはいないわ。妊娠してすぐの頃、交通事故で亡くなったの。雨の日にバイクを運転して崖から落ちたのよ。あの頃は本当に辛くてね……。お母さんも後追い自殺を考えたわ」
「そんな……」
「妊娠をすっごく喜んでくれていたのよ」
「その人、名前は？」
「川上祐二さん」
「それで、お父さんとはいつ出会ったの？」
「事故から二週間くらい経った時、私の目の前に祐二さんにそっくりな人が現れたのよ。それが今のお父さん。外見も考え方も喋り方もあまりに似ているから驚いちゃったわ」

「それって祐二さんが生き返ったみたいだね」
「私もそう思ったの。生き返ったんだって。だからどうしてもあの人を離したくなかった。それで……罪を犯してしまったの。お父さんに妊娠を告げたのよ」
「それはひどいよ。大きな嘘をついたんだね」
「本当にひどい嘘よね。自分でも信じられないほどの大罪を犯してしまったの」
「お父さんが可哀想」
「そうね。でも、結果的には良かったの」
「どうして？」
「ひかるが入院した翌日にお父さんは私に言ったわ。ひかるを生んでくれてありがとう。自分の娘にしてくれてありがとうって」
「本当に……？」
「あの人がありがとうって言葉を口にするなんてね。結婚して以来、何十年かぶりに聞いたのよ」
大きな黒い瞳に涙を浮かべ、お母さんは力強く私の手を握った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2790w/

永遠（とわ）の愛

2011年10月28日02時02分発行